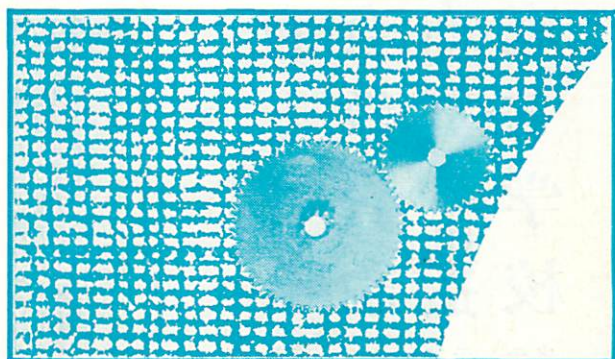


技術教育

6
1977

産業教育研究連盟編集 No. 299



ドイツ民主共和国の教育視察報告

資本主義国における「総合技術教育」

ヨーロッパの障害児教育

地域に根ざした男女共修の被服学習

創造的思考力を養うための教育——カムの設計製作——

肢体不自由養護学校の技術教育

＜産教連のあしあと(3)＞ 研究活動に対する反応

宮原誠一教育論集

〈全 7 巻〉

〈特 色〉

学校教育・社会教育の本質をとらえる宮原教育理論の集大成。
教育実践・教育運動の内部から問いつづけた問題提起集。
子どもの声をきき、子どもの心に語りかけることのできたユニークな感性の所産。
大胆、鋭利、柔軟な教育時評は、戦後教育三十年の問題史。
戦後教育の初心を堅持し、荒廃した日本教育の進路を示す。



⑤ 教師と国民文化

第5回配本

編集解題

北田耕也
神山順一

日本の教師に寄せる 教師論／教師と人間回復／聖職意識と労働者意識 組合運動と研究組織 日本の教員と教員組合／日本の教員組合運動と倫理綱領／教師の研究組織をどうするか／歴史的な出発（第一回教研大会をおもむ）／教研大会のめざしたもの／職場教研について／教育科学研究会二年史／地域に教科研運動を 教育と文化の問題 芸術と社会教育／文化財と生活／新しい教育と新しい教具／教育改造と教科書／新しい教育と演劇／新教育と学会／新しい教育と映画／新しい教育とラジオ 他

〈既刊〉

編集解題

① 教育と社会

碓井正久
藤岡貞彦

② 社会教育論

小川利夫
島田修一

③ 青年期教育の創造

木下春雄
千野陽一

④ 家庭と学校

千野陽一
室俊司

〈近刊〉

⑥ 教育時論

編集解題

碓井正久
宮坂広作

⑦ 母と子のための教育論

神山順一
北田耕也

内容見本進呈

四六判 上製 函入

定価④三、〇〇〇円

定価各二、五〇〇円

国 土 社



1977, 6, 技術教育

目次

ドイツ民主共和国訪問の旅を終えて	諏訪義英	2
<産業教育研究連盟主催>		
ドイツ民主共和国 (D.D.R.) の教育視察旅行報告		
経過報告	三浦基弘	5
どこを訪れ何を聞き何を見てきたか	小池一清	7
企業内職業学校と室内照明器具のこと	志村嘉信	13
ドイツ民主共和国で見たこと聞いたこと	保泉信二	16
ピカピカ光る自動車が沢山走ること うらやましがらない国でのこと	坂本典子	19
旅行を終るにあたって ——モスクワ〜東京間に書いた感想文から——		21
ドイツ民主共和国の総合技術教育に学ぶ	向山玉雄	25
資本主義国における「総合技術教育」	池上正道	29
<教育時評> ゆがんだ「教育を受ける権利」と教師		31
ヨーロッパの障害児教育	琴屋孝之	32
学習意識を高めるには——動機づけのこと——	後藤豊治	37
地域に根ざした男女共修による被服学習の自主編成	畔地豊美	40
<質問コーナー>		45
<産教連のあしあと(3)> 研究活動に対する反応	清原道寿	48
<実践報告>		
創造的思考力を養うための指導——カムの設計製作——	工藤鎧一	52
肢体不自由養護学校現場から	小池舜哉	56
<教師の目・子どもの目>		
「小学生殺人事件」の記事に思うこと	鈴木順子	59
真心を気づかせてくれた45人の目	千田カツ	59
1977年「技術教育・家庭科教育」全国大会案内		62



ドイツ民主共和国訪問の旅を終えて

英 義 訪 談

さる3月27日から4月5日にかけて、産業教育研究連盟はドイツ民主共和国（以下DDRと記す）の教育、とくに総合技術教育視察の旅を行った。この視察旅行の総括的なまとめについてはいずれ行なう予定であるので、ここでは、とりあえずDDR訪問を終えたことの報告を兼ねて、この視察旅行全般を通してえたものについて、きわめて個人的なものではあるが、感想めいたものを記すことにしたい。

1 民間教育研究運動について

われわれがこのDDR視察旅行を計画し具体化し始めたのは、およそ1年ぐらい前である。このような計画をたてたのは、もちろん、産教連が1970年代に入って、その運動方針として“総合技術教育の思想に学ぶ実践”をかかげたことを背景としてもっている。そして、DDRを選んだのは、DDRの教育、とくにその総合技術教育の内容が「技術教育」誌をも含めた刊行物に割合紹介されていたことによって、われわれが若干なりともそれについて情報をつかみ、早くから関心を持っていたことによる。

ただそれにしても、限られた専門的分野についての視察旅行を一団体として企画しても、果たしてどれだけの人員が参加するかについて、これを企画した事務局としては、当初必ずしも楽観していなかった。

しかし、事務局の懸念に反し、一部の人はその希望がかなえられないまま35名にしばらざるをえない程の参加者をえた。しかも、参加者は多様な層によって構成されており、そこにこの視察団の特徴があった。中学校の技術・家庭科の教師が中心であることは当然であるが、工業、農業、水産を含む高校教師、小学校、養護学校、聾学校、学童保育、そして大学と、多様な学校種別の教師によってこの視察団は結成されたのである。

その上、この団体の主流は産教連であるとはいえず、ここに参加した人たちは、技術教育研究会・全国農業教育研究会・子どもの遊びと手の労働研究会などでそれぞれ主要な役割を果たしている教師でもある。いわば、日本の技術教育・職業教育・労働教育に関心をもつ諸団体に属する人たちが、このDDR視察旅行においてともに行動する機会をえたことになったわけである。中には、3月27日の結団式当日に初めて顔を合わせるようになった人もいる。その人をも含めた35名が10日間—正確には全く予定外のモスクワ市内観光というおまけを含めて11日間—という短期間ではあるが、寝食をともにした交流を深めることになったのである。そして、このことが、子どもの発達を保障するための労働や技術の教育をさらに幅広く展開する上で、何らかのプラスとなって現われてくるであろうと思っている。

2 DDRと日本の友好について

DDRと日本とは1973年春によりやく国交を回復し、1974年に初代大使が着任したばかりである。しかも、その後の交流について、日本政府は対ドイツ連邦共和国ほどには積極的ではなく、文化協定も結ばれていない。

その中で、われわれの交渉ルートは、DDRと日本の相互理解と友好親善を目的とした大衆組織である日本DDR友好協会と、DDRにあるDDR日本友好委員会であった。日本DDR友好協会の主催する会合にはなるべく出席し、DDR訪問経験をもつ人たちにDDRの実情をうかがいながら多くの示唆をえた。そしてその過程で、日本政府がDDR日本友好委員会の人たちの入国について差別的な取扱いをしている事実にもぶつかったし、その中で友好協会、友好委員会を通した幅広い文化交流、身体障害者視察団、社会福祉視察団などのDDR訪問が積極的に推進されている実情をも知ることができた。

そしてわれわれの訪問についても、日本DDR友好協会の第4回大会で、協会として協力することが正式に承認され、われわれの訪問先についても、DDR日本友好委員会のゴールドシュミット夫人、さらに打合わせを経て、その希望が適えられる見通しをえた。しかし、今年に入ってからのも人民教育省の措置によって10年制学校訪問というわれわれの希望は閉ざされた。

けれども、Liga（DDR諸国民友好連盟）教師の家、ドレスデン工科大学、ドレスデン・ピオニール宮殿、ベルリンの化学工場付設職業学校の訪問を通して、DDRの総合技術教育について知りたいというわれわれの希望はかなり充足されたように思う。

そして、これらの訪問先における多くの人たちとの会合の中に心暖まる歓迎の意向を読みとることができた。DDR諸国民友好連盟における Me

nne-berg 氏のきびしい政治外交情勢報告の間テーブルに無造作におかれたジュースのもてなし、教師の家における Wetterhahn 女史の時間を忘れた精力的かつ適確な説明と苦いコーヒーの味、副学長以下、学部長から学生代表までを含めた討議の後で実習工場を見学してくれたドレスデン工科大学、明るくきびきびした子どもたちとのコーヒーとケーキの歓談に心のなごみを覚えたピオニール宮殿、そして食事の時間をも含め十分な見学と質疑の時間を確保してくれた職業学校、これらすべての中にDDR日本友好委員会をはじめとするDDRの人たちの好意を読みとったとしても、それは、われわれの主観的願望ばかりがもたらしたものではないであろう。そしてまた、誇大妄想というそしりに対する若干のためらいをこめながらも、われわれ視察団の中に“私費できたわれわれを国費で歓迎してくれた”という声がささやかれたのは、ゆえなしとはしないであろう。

世界10指の工業国という自信の上に、昨年の9回大会で最低賃金や養老年金の引上げ、労働時間の短縮、住宅問題の解決など国民生活の直接的向上を意図したDDRではあるが、国内的には実践諸国と同じようにハーバマン、ピアマンなどの反体制知識人のかかえ、政治的にはドイツ連邦共和国がDDRを国としてではなく一地方としてしか認めようとししない（Menneberg 氏の説明）きびしい状況の中で、社会主義建設への理解を通した諸国民との友好に積極的であろうとするDDRの姿を見た思いがするのである。

3 教育について

さて肝心な教育そのものについてであるが、個々の訪問先については別として、全体を通して感じたことはつぎのようなことである。

第1は、個々の問題が大きな社会主義—共産主義建設の見通しの中で考えられ解決されようとし

ていることである。計画化された経済的見通しを基礎にした文化、生活面における諸計画というのが社会主義建設の特徴であることはいうまでもないが、それについて教育の領域を通して改めて知らされる思いがした。教師の家で、現在全国平均としてある1学級当り26人という生徒数は将来変えることがあるかという質問に対して、Wetterhahn 女史は、現在の教育体系について一応十分と考えてはいるが、アカデミーでは常に検討しており、その結果、1980年代に体系が変わるかもしれない、そしてそれに関連して26人という数字も変わるかもしれないというのである。また、過密地ベルリンの1学級当り35名という現状は、住宅建設（9回大会で重視されている）に伴う学校建設によって今年9月から最高30名に下がるという説明の中に、やはり社会主義建設と教育との関連の密接さを見る思いがした。

第2に、社会主義社会建設のためには、労働力が絶対に不足しているDDRでは高い生産性を求めることになるが、その生産性追求の中でも、生産と教育の結合の観点から、学生・生徒の生産実習を生産計画の中に位置づけていることである。Wetterhahn 女史（教師の家）によれば、実習生産物は“おしゃか”をうみやすいが、個人の失敗は全体にひびくという自覚を生徒に指導するという。また、学生・生徒には企業の生産計画に応じた課題が与えられる。ピオニール宮殿の計測制御技術サークル・R君（7年生）の作品は、企業から与えられた「ドアをあける自動装置」という課題にこたえたものであるという。生産性のみの追求からは教育へのこの配慮は生じないであろう。

第3は、このような生産と教育との結合は高度な労働力養成という社会的要請に帰結される危険性をもっているが、社会的要請と個人の利益を一致させるという観点がしばしば強調されたし、追

求されているということである。職業選択のさいの職業指導センターの役割、高度な労働力が求められて行く将来の社会に備えて、8年制学校しかでられない程度の能力の人（8%）の能力を十分発揮させる策をたえず模索しているという指摘（Wetterhahn 女史）は、DDRでは労働力養成という観点のみで安易に人の能力を切捨てようとはしていないという感じを与えるに十分であった。

この社会的要請と個人の利益、発達とを結合するという観点は、計画化され組織化された社会主義社会建設という雄大な構想の中で、個人の創造性がどう生かされ吸収されているかという問題とともに、社会主義・共産主義社会における全面发展を理解するために重要な点である。しかし、それを短期間の、しかも公的な場の訪問からは十分に探ることは不可能である。

それにしても、教育が社会主義・共産主義社会建設の長期的見通しの中に構想され、国家、地域、学校の網の目の中で学校の生産実習、教科活動、教科外活動が、それぞれ相互に密接な関連をもちながら独自に追究されているということは、総合技術教育がまさに全一的体系として存在していることを示しているといえよう。ひるがえって、それは、われわれの教育実践を、学校づくり、地域づくり、国づくりの見通しの中にどう位置づけるかということを示しているともいえよう。

その外、歴史博物館、ベルガモン宮殿、静かなベルリンの街並み、誇り高きエコール・ド・ポリテクニック、陽気で人なつっこいがどこか抜け目のないイタリア人、そして、あまりに悠然としてせっかちな日本人をいららせたモスクワ、それらすべては、われわれに世界の広さを示してくれたのである。

（大東文化大学教育学科研究室）

ドイツ民主共和国(D.D.R.) の教育視察旅行報告

経 過 報 告

視察団事務局長

三 浦 基 弘

はじめに

私が産業教育研究連盟（以下産教連）に入会したのが、1975年1月、日教組、日高教の全国教研山形大会のときでした。

それ以来、会員になり、昨年、全国常任委員（以下常任委員）になりました。技術教育に関しては、無知でしたので、産教連の研究活動の中で、いろいろ啓蒙を受けました。そしてさまざまな研究成果を調べていくうちに、ドイツ民主共和国（以下DDR）の技術教育に関心を寄せました。過去かなりの文献紹介が多いものでしたから、常任委員にお聞きしましたら、まだDDRを訪問されているかたがひとりもいませんでした。「百聞は一見にしかず」という格言もあることですから、DDRの総合技術教育を視察することは、産教連の研究活動に新たな光明を与えようと思い実現を試みようと思いました。いままでに日本民間教育研究団体連絡会（以下民教連）に加盟する団体の中でDDRの旅行を計画したことがあったようですが、成功していないとのことでしたので慎重に準備に取り組みました。

下見・打合せの計画

まず1昨年（1975年）の12月、大使館交渉から始まりました。電話で104番に、「おそれいりますが、東ドイツ大使館は何番でしょうか？」やさしく、美しい声で交換の女性が「ちょっと、お待ち下さい。……申し訳ござい

ませんが、申し出の大使館はありません。」「ええ！ そんなはずはないんですがね。」と私が言うと、「あのオ、ドイツ民主共和国大使館ならありますけれども」と言われると、すかさず「それぞれ、それぞれ。」エピソードになりましたが、この程度の認識で計画が始まりました。大使館に行きますと、この旅行は、友好委員会を通してお願いしますとのことでしたので、日本ドイツ民主共和国友好協会（以下友好協会）との交渉に移行していききました。なぜかといいますと、日本とDDRは1973年に国交回復をしますが、教育などに関する文化協定が締結しておらず大使館交渉はむずかしいということでした。友好協会に行きますと、名の通り友好的で、協力して下さいました。しかし、会員になっていないので、会員になり、正式ルートにのりました。友好協会とドイツ民主共和国日本友好委員会（以下友好委員会）の連絡により1976年3月末、下見・打合せ訪問が実現しました。友好委員会では、委員会所属のゴールドシュミット女史と、教師の家のクロイツガー先生との打合せをしました。こちらの訪問計画は、10年制学校、職業学校、総合技術センター、総合技術教育研究施設、ドレスデン工科大学、ピオニール宮殿などでした。話し合いの結果、各学校、施設と連絡をとり、実現できるよう最大に努力します。又、条件として、①最低4日間訪問してほしい、②社会主義建設と教育の話をしたい（干渉するわけではないが）③友好委員会と友好協会を通じて事務連絡をしてほしい、④通訳を最低1人はつれてきてほしい。⑤訪

問する教師の名前、学校名などのリストを送ってほしい、を留意して訪問計画をして下さいと提示がありました。打合せ後、10年制学校を訪問したいと要望を出しましたが、当時、風邪がはやっており、子供を守る観点から遠慮していただきたいと言われ、ペルガモン博物館の見学だけにとどまりました。DDR訪問の前にフランスのパリのエコールポリテクニク (École polytechnique) に事前連絡なしに行きましたが門前払いになりました。

事務局の発足

帰国してから常任委員会にかけて、旅行団を結成することをきめ事務局を設置しました。団長は、諏訪義英(大東文化大学)先生、副団長は、向山玉雄(東京都葛飾区立奥戸中学校)先生、事務局長は三浦基弘(東京都立小石川工業高等学校)に決まりました。旅行者は、Kツーリストにたのみ、宣伝費、パスポート作成費など数十万円経費節減に努力し、旅費を安くすることに努力しました。団員募集には、月刊「技術教育」、機関誌、産教連通信、また会員の口こみなどで30名組織することにしました。

一方、友好協会と連絡し、1976年度の協定に産教連の訪問の協力を要請し、「日本ドイツ民主共和国友好協会とドイツ民主共和国-日本友好委員会との間の1976年における協力のための協定」に次のようになっています。「日本ドイツ民主共和国友好協会(以下友好協会という)とドイツ民主共和国-日本友好委員会(以下友好委員会という)の代表は、両組織間の相互協力および日本とドイツ民主共和国両国民間の友好・親善と相互理解とを促進するため、1976年7月、ベルリンにおいて会談した。

1973年5月両国政府間に外交関係が樹立されて以来、政府レベルや各界における両国民間の交流はひろがりつつある。双方は友好協会と友好委員会との相互協力が両国民の真の友好と相互理解とをいっそう促進する上で重要な意義をもっていることを確認し、前年にひきつづき1976年においても、双方の協力関係を維持、発展させることに同意した。

広範な日本国民の間に、ドイツ民主共和国についての関心が高まっている。

友好協会は、ドイツ民主共和国の生活と文化、各分野における達成、ドイツ民主共和国国民の世界平和実現への努力についての正しい理解を日本国民の間にひろめるよう努力する。

友好委員会は、日本国民の生活と文化、その平和と民

主主義と生活向上のためのたたかいについての正しい理解をドイツ民主共和国国民の間にひろめるよう努力する。

双方は、日独文化交流の長い歴史と伝統とを考慮し、日本とドイツ民主共和国との間の文化交流をいっそう促進するため、つぎの通り1976年の協力協定を結ぶことに合意した。……友好委員会は友好協会の推薦する次の視察団の見学を組織することにより、日本のありとあらゆる社会分野の代表が、ドイツ民主共和国での現実の社会主義を知ることができるようにする。身体障害者視察団、大阪婦人代表団、産業教育研究連盟(一は筆者)国民文化会議……」又「日本とDDR」(日本ドイツ民主共和国友好協会の機関誌 No. 16, 1976・10)に1976~77の活動の中で次のように書かれています。

「(1) 両国民の友好・親善と相互理解をすすめる活動……(2) 人的交流に努力する活動……(3) 訪問・視察団への協力 まじめにDDRを訪問・視察したいという旅行団への協力をつづけます。さしあたって明春予定されている産業教育研究連盟(技術教育研究団体)のDDR訪問(約30名)に協力することが常任理事会で決定しています。」これらのことが、DDR訪問に大きな援助となりました。同時に参加団員も着実に集まり、当初予定した人数よりうわまわり35名で打ち切りにしました。通訳については、団長のはからいにより現地のフンボルト大学の日本人Y氏に依頼し、旅行中の健康管理にI先生の参加を可能にし、安く、安全に、かつ有意義な視察旅行ができるよう万全に構えました。

こちらからDDRに出した手紙の返事は友好協会を通して1977年2月4日付で届きました(原文略)。

内容は見学場所と日程についてでしたが、10年制学校がなく心配でした。この手紙がくる前に、別の用事で日本にきたゴールドシュミット女史・団長、私と旅行者、4人の打合せ、また友好協会の招きで日本語を学びにいらしたモイツナ女史、団長と私の3人での打合せで確認したことでした。確認したという意味は、10年制学校を訪問することが主であるということでした。そして、この旅行は、日本の民間教育研究団体が注目し、成果を期待しているし、この旅行が成功をおさめれば、日本とDDRの教育運動の友好に甚大な影響を及ぼすこともつけ加えました。

再度、手紙を出し10年制学校訪問の実現を求めましたが、1977年3月3日付で届いた具体的な計画書には10年制学校は載っていませんでした。

これでは、旅行の主旨がなくなると判断し、友好協会

より連絡をとりましたが、期日がせまっております、国際電話をかけました。なにせ国際電話は初めてのことで、正確に伝えなければいけないので、団長にたのむと、読むことはピカ一だがしゃべることはカンペンして頂戴。しゃべったら、私、ダンチョウの思いと断わられ、モイツナー女史は、日本語をある程度、力があるので、ドイツ語、英語のチャンポンでいこうと思いDDRの友好委員会に私がかかけました。出発1週間前でした。時差は8時間日本時間午後5時、DDR時間午後9時です。電話交換手がつながりましたとの連絡までわずか5分、世界は狭いと実感しました。私が“Allo! Freundschafts Komitee Deutsche Demokratische Republik-Japan”という女性に答で“Ja. つづけて私が Vom Japan-Reisegruppe des Verbandes der Lehrer.Meutznern bitte”あらは“Ja.Moment.”少し時間が経って“モイツナーです。”“サンキョウレンの三浦です。わかりますか。”“わかります。三浦さん”“じつは、10年制学校のことですが、見学できませんか。”“こちらでいろいろ努力したのですがだめになりました。”“ええ、こまったね。これじゃ、そちらに行く意味がなくなります。”“じゃ、やめますか”“そんな、急に言われてもこまります。”この会話のあと突然、電話が切れ、再度、電話したら、外出した後でした。あとから訪問してわかったのですが、モイツナーさんが文化省など実現のためまわったそうです。

急にやめるわけにもいかず、友好協会と相談し、現地で再度打合せをしすることに決め、ともあれ第1回産業教育研究連盟ドイツ民主共和国総合技術教育研究視察団一行35名、添乗員2名計37名が3月27日羽田をたつことになりました。

おわりに

10年制学校については、今年2月、DDRの文化省で生徒、教職員の労働の過重につき、諸外国の訪問を当中止することになったそうでした。しかし、職業学校での学生に10年制学校時代の経験話を聞くことができたので幾分か、補充された面があったことと思っています。DDRでは、教師の家、ドレスデン工科大学、ピオニール宮殿、化学系職業学校で多大な歓迎を受け、旅行団員の多くが、この旅行に満足しており、事務局の努力が実を結び一同喜んでおります。

最後に、友好協会の事務局長、一条元美さん、事務局の村本さん、Kツーリストの日置さん、望月さん、常任委員の皆さん、その他、多くの方々のご協力によりこの旅行が成功したことを付言します。

〔追記〕エコールポリテクニクについては、別の機会に報告します。ねばり強い交渉の末、エコールポリテクニクの訪問が可能になりました。

(東京都小石川工業高校)

どこを訪れ 何を聞き 何を見てきたか

小 池 一 清

1. 日程とコース

〔3月27日〕13:00結団式。東京都港区立勤労福祉会館。羽田発21:30。ルフトハンザ航空DC10型機でアンカレッジ経由—西独ハンブルグへ。(機内泊)

〔3月28日〕06:05ハンブルグ着—パンナム機に乗換え、西ベルリンへ。専用バスで東ベルリンへ。ホテル着。昼食後、東ベルリン市内見学。(欧州一の規模を誇るホテル、シュタットベルリン泊。37階建て。200ベッド。)

〔3月29日〕東ベルリン滞在。午前中、諸国民友好委員

会訪問。午後、教師の家訪問。(シュタットベルリン泊)

〔3月30日〕専用バスにて東ベルリンより約180km南に離れたドレスデンに向う。午前中、ドレスデン工科大学訪問。午後、ピオニール宮殿訪問。(シュタットベルリン泊)

〔3月31日〕午前中、国営ベルリン化学工場内の職業学校訪問。その後、市内自由行動。夜、ベルリンシンホニーオーケストラ鑑賞。(シュタットベルリン泊)

〔4月1日〕早朝東ベルリンを立ち、西ベルリンより空路フランクフルト経由でパリへ。パリ市内見学。夜ムーランルージュ観賞。(LPMサンジャック泊)

〔4月2日〕午前中、フランスのエリート学校エコールポリテクニク訪問。午後パリを立ち、空路イタリアのミラノへ。夜、スカラ座にて「シンデレラ 姫」鑑賞。(アンブロジーノ泊)

〔4月3日〕早朝ミラノを立ち、空路、ローマへ向う。着後、午前・午後市内見学。(レジデンスパレス泊)

〔4月4日〕ローマを立ち、フランクフルト経由で東京に向う予定が、航空機の遅延でフランクフルト発東京行きの便に乗れず、フランクフルト空港内で待期。午後、フランクフルト発モスクワ行きに搭乗。モスクワで東京行きの便に乗り継ぐ予定が、ここでも不能。やむなくモスクワ泊。

〔4月5日〕いつ搭乗できるか不明。ソ連政府観光局手配によるバスにて、モスクワ市内見学。夕刻の便の搭乗券が、ツーリスト同行者の日置、望月両氏および三浦事務局長の努力で入手できた。しかし、予定の便に乗れず、またもや待合室で待期。21:30の便にようやく搭乗可能となる。アエロフロート・ソ連航空イリュージン62Mジェット機で帰国の途につく。(機内泊)

〔4月6日〕予定より1日遅れで、12:30無事羽田着。解団式後、解散。

2. 参加者

視察旅行参加者35名。近畿日本ツーリストより望月、日置の両氏が同行。参加者の内訳、男性29名、女性6名。勤務先別では、小学校女1、中学校男13、女3、高校男11、大学男3、養護学校男女各1、聾学校男1、学童保育女1。年齢別では、20代9、30代13、40代11、50代2。

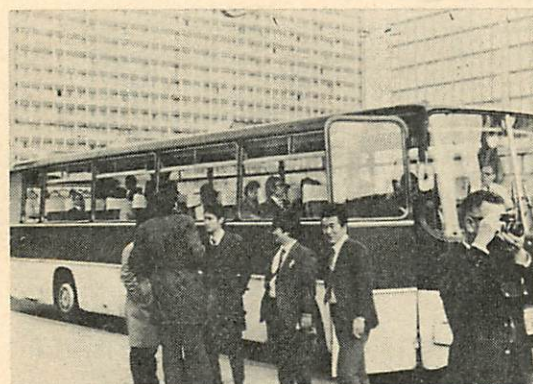


写真1 一行が世話になったバス(ホテル前)

3. DDRにおける主な見学・訪問

DDR滞在は、3月28日から4月1日早朝までの4泊

5日。この間、空港出迎えからはじまって、貸切りバスの手配、食事案内、見学先や訪問先の案内等は、すべて政府観光局職員のチェンカー氏にお世話になった。氏は身長およそ190cmの立派な紳士。終始にこやかに誠意をもってわれわれに接してくれた。

通訳は、DDRフンボルト大学日本語学科教官を勤められる安井氏にお世話になった。氏は在独18年。DDRで唯一の日本製乗用車を愛用されていた。在独18年のキャリアに加え、大学の講義でなれている大きな声は、氏から少々離れた距離にあっても、聞きとるのにまったく不自由しない声量で、しかもきわめてテキパキと通訳をつとめてくれた。さらにDDRの教育全般に通じておられるなど、われわれにとって最高の人と同行いただけたことを感謝している。

(1) ベルリン市内見学

東ベルリン到着の午後、バスで市内見学。主な見学先は、ブランデンブルグ門、ベルガモン博物館、歴史博物館、無名戦士の慰霊堂などである。

ベルガモン博物館は、現在のトルコ西部のベルガマの地に紀元前3C～2Cに栄えた古代都市ベルガモンの文化遺産を展示した博物館である。当時の建造物の現物を使って古代都市の姿を再現したコーナーもあり、貴重な文化遺産を昔の姿そのままに後世に伝えようとする努力のすばらしさに、ただただ眼をみはり、ため息がでるばかりであった。歴史博物館は、1945年以降東ドイツが、社会主義国へのスタートを切った当時からあとの歴史を、庶民の生活用品、生産の道具や機械、機関車、初代大統領が職人時代に使用した大工道具など、各種の現物を主に展示した博物館で、同じ1945年敗戦を迎えた日本人にとって、感動を覚えずに見ることはできなかった。

(2) 諸国民友好委員会訪問

ホテルからバスでわずかな時間の所に諸国民友好委員会があった。最初に委員会書記局勤務の小柄で若く美しいお嬢さんから、「日本のみなさんと交流できることを大変うれしく思います。」と日本語による歓迎のあいさつを受け、一同力強く拍手。

つづいて委員会書記長の Menneberg 氏からDDRについての全般紹介を受けた。

1) ファシズムと悲慘 ファシズムは多くの悲慘を残した。人種差別、戦争による町の廃きよはその例である。ドレスデンの町は、みなさんの国の長崎、広島と同じように、無差別爆撃を受けた。ファシズムは町の破壊だけでなく、わたくしたちの頭の中に多くの悲慘を残した。

こうした説明につづいて、2枚1組になった大きな写真を何組も示した。左は破壊された姿の建物、右はそれをもとどおりに修復したものであった。「この修復への努力はナチの遺産としてでなく、社会のすばらしい遺産として大切にしたいからである。」こうした修復の工事をわたくしたちは町の各所で今も進められているのを見ることができた。以前の都市の再現計画もあり、今後も大切に進められるとのことであった。

2) 社会主義の特長点 政治は、労働者主動型である。農民、中産、インテリ3者一体である。重要な生産手段は、人民の所有になっている。社会主義経済は、2000年までの中期、長期展望に立っている。そこでは何より人民の需要が優先される。

今後の課題としては、物質的、文化的生活水準をさらに高めること、および、社会主義生産を高めることが大きなものとしてあげられている。(昨年の第9回社会主義統一党大会で決定)

「大きなピカピカした自動車だけで事がたりとは考えていない。」精神的教養を高めること、倫理性を高めること、社会全体に思いをいたすことのできる心を育てることを大切にしている。生産性を高めるためには、科学と技術を大切に、常に発展した高度化をねらっている。

何よりも社会と人民の全面的発達をねらっている。社会主義国は、自由主義国が200年間でできなかったことを短期間でなしとげてきた。

3) 教育政策の方針 高度な教養と専門性をもった労働者の育成に力を入れている。このことには大きな誇りをもっている。「大学卒は頭がよい」という考えは変えている。大学教育だけでなく、専門教育の大切さを再確認している。この国に生れた子は、最低12年間の教育を受ける。10年制の一般総合技術学校と2年間の職業訓練である。10年制学校のあと一部の者は2年制の学校へ進む。

4) 都市と農村の格差是正 農業生産に従事する人人の生活水準を高めるため、工業的大量生産への移行を進めている。自分の土地の私有権を認めている。多くの人が自分の土地を出し合って、共同耕作する形態を変え、ミルク、卵など生産の専門化を進めている。ミルクのパイプライン化、施肥の飛行機化などがおこなわれている。生産の専門化、工業化には、高度の知識、技術が余ぎなくされている。これらに対する専門家を養成している。

5) 社会保障政策 家賃は現行のままとし、値上げ

しない。1m²当り、80ペニヒ(約100円)～125ペニヒ(約156円)である。住宅は現在不足しているが、1990年までに解決する。

年金の値上げ、有給休暇を増やす、1週当りの労働時間を短縮する、社会保障費の増額を図るなどが検討されている。1週の労働時間は、現在43時間45分であるが、2交替制の人および、2児の女性については、週40時間にすでに切り替えられている。賃金はそのままである。

6) 外交政策 理論と実際の両面において、平和共存を基本とする。世界の平和は人類の願いである。戦争で結果がよかった例はない。戦争を必要としない世界づくりに努めている。競争による産業・軍事面のコンプレックスをなくすことと軍縮問題に力を注いでいる。

DDRは、知識集約の生産で、社会主義国をリードすることが必要である。資本主義国との交流も大切にする。1700万人のDDRのことだけを考えていない。

7) 東西ドイツ問題 ドイツ帝国主義は、負けることをきらい、結果としてひどい目にあった。東西の堺を西側は、県堺ととらえている。これは危険な考え方だ。たとえば、そういいながら、DDRをドイツ国民と見なしていない。DDRは、国の堺と考えている。

これらの問題は、両国側だけでなく、関連支持国の考え方が問題でもある。

以上のような話を伺ったあと、Menneberg氏は、「社会主義国は、1人1人の能力を最大限に伸ばすことを何より大切にしている」と話を結んだ。

(3) 教師の家訪問

教師の家訪問というと、教師の個人宅訪問のように思われるかも知れないが、そうではない。日本風に表現すれば、教師のための研修やサークル活動のためのセンターである。わたくしたちは、ホテルから200mほどの所にあるベルリン市の教師の家を訪問した。12階建ての立派な建物で、わたくしたちはエレベーターでその最上階に案内された。



写真2 教師の家(中央 Wetterhahn 女史)

説明を担当してくれた方は、一見女性校長さんといった風格の教育学士の称号をもつ、Doris Wetterhahn 女史であった。彼女のここにおける仕事は、外国からの来訪者に情報を提供することを担当する係とのことであった。

彼女はこれから話をどのように進めたらよいかをわれわれにまず相談された。私の予定ですか。質問を出してもらおうか。総合技術教育センターで話しか。それとも紙に質問事項を書いて出してもらおうか。どのようにしましょうか? と問いかねられた。一方的に説明をはじめるのでなく、来訪者にどのようにしたらよいかを事前に確認して、話を始める方式は、他の訪問先でも同じであった。わたくしたちは、社会主義社会と教育の基本的かわり、および、10年制の普通教育総合技術学校の特色の2つを中心に伺うことにした。

1) 社会主義社会と教育のかかわり DDRにおける多数党である社会主義統一党の第9回党大会(昨年)の決定および政府の努力で、2000年までの構想・展望が出されている。教育は、学校教育と社会教育とにおいて、それら2000年までの展望の一環としてその重要性はきわめて高い関係にある。2000年までの長期展望の社会政策綱要では、①家賃の固定化 ②生産性の向上 ③賃金の増加と福祉の向上 ④再教育の無料化などをあげ、個々人のよりよい発展と幸福をねらっている。これらにかかわって教育の重要性はいうまでもない。

教育のために十分な金をかけるには、生産性の向上によって金を得ることが必要である。この実現のためには、社会に対してどう貢献するか姿勢と能力を育てることが教育で大切にされる。またこの達成のためには、DDRだけでなく、他の社会主義国でも平和の維持を大切にす。国全体の目標から個々の学校の教育が考えられている。

学校に通う子どもたちと社会の人々に、文化的生活の発展向上のために、自分たちはどうしたらよいかを考えられる能力の育成を大切にしている。個々人のパーソナリティーを大切にしながら、全面的に発達した社会人の育成をわれわれはねらっている。

労働は社会発展の基礎である。それだけに、労働意欲の育成を大切にす。この意味で、総合技術教育の側面からの教育の意義は大きいものをもっている。21世紀のはじめには、高度な社会主義国になれる自信をもっている。高度な知識と技術をもった社会の建設者の育成が要求されている。

2) 10年制普通教育総合技術学校の特色 10年制の

総合技術学校 (Polytechnische Oberschule) は、DDRにおける義務教育学校である。社会主義国では、全面的に発達したすぐれた能力をもった社会人の育成が要求される。Oberschule の Ober は高位を意味することばであり、高度の教育をほどこす学校であるからOberschule と名付けているのである。すべての教科で科学性が大切にされる。教材は、実社会と結びつけられている。1年生から生産的活動を大切にする。

1年生から6年生までは、工場作業までは行かないが学校園教授 (1~4年まで週1時間) と工作教授 (1~3年で週1時間、4~6年で週2時間) による生産活動を学ぶ。工作教授では、現代の材料を使い、近代的用具を使う。学校園教授では、自然を育てる用具を使い、一定の成果を上げることがを学ぶ。理科で学んだことを適応させる。みんなで共同して作業する。などを学ばせる。

7・8年では、週2時間、学校外の工場や農場の施設で学ぶ。遊びでなく、その施設での生産活動の一貫として実習をおこなう。これらの活動によって、教室での学習が実践の中で結合される。

9・10年では、週3時間実際の生産現場、つまり大人の生産活動の場の中で学ぶ。

これらは職業教育の代替としてでなく、どの職業につく人にとっても必要なものとして、社会主義生産を知ることが基礎学習として要求されるのである。

3) 質問 ①総合技術教科と他教科との関連は? — 大切にされている。社会科とは深い関連をもつ。技術・工学の教授だけでなく、労働や労働者に対する理解の教育が重視される。労働や労働者の問題は、知識として学ぶだけでなく、実際の生産現場における実習によって体験として学ぶ。

② 裁縫教科は? — 4・5年で選択教科として、針仕事 (Nadelarbeit) が各1時間ずつある。これは各個人が自由に男女の別なく自分の意志で選択できる。男女の性による教科づくりは全くない。

③ 学校園教授が1~4年で終るのは? — 農業生産は、専門化や工業的生産化によって機械化されるなどから、農業と工業との差がなくなっているからである。

④ 総技指導の先生は? — 5年生以上では、総技の専門教育の資格をもった人が担当する。

⑤ 学校園や工作室は? — 学校園は、都市部では各校毎に持たないので、数校で共同地をもっている。工作室は、1~6年では各学校のものを使う。7年生以上では、企業にたのんで総技のセンターをつくり、12校くらいで共同利用している。

⑥ 1クラスの人数は？——DDRの全国平均は、26人。今後さらに下げること検討している。大都市平均は、31人。「1クラス35人というすごいところもある」という話も出、これには一同笑いを止めることができなかった。ベルリン市内では、今年9月の新年度から、1クラスの人数を30人に引き下げるとのことである。工作教授では、これを15人の2グループに分け、2つの工作室で同一進度で学習がなされるとのことである。日本の現状からみて、まったくうらやましい話である。

⑦ 進路指導は？ おちこぼれ問題は？——この問題は、話せば2時間にもわたるであろう。おちこぼれは、約8%ある。正常児ではあるが8学年以上にはついていけない者である。保護者との了解で、8年で卒業し、職業訓練校に切り替える。8年で卒業がよいかは、現在問題にされている。個々人を最大限に伸ばすことを大切にする立場から考え、完全にどうにもならない生徒はいない。働きかけをどうするかが大切だと考えている。

進路指導については、社会全体を計画的に発展させるために必要な職種とのかかわりがある。地域にどんな職種があるかを6年生から家庭に知らせ、将来どの職種につきたいかの姿勢を育てるようにしている。新聞、ラジオ、テレビ、および地域の職業学校でも職種の宣伝をする。現在最も要求されている職種は、住宅建設に関する職種である。

以上のような説明と質疑応答のあと、Wetterhahn 女史は、「DDRの教育に対し強い関心のあることを大変うれしく思います。みなさんの職場で良い仕事をされることを望みます。」と終りのあいさつをされた。

(4) ドレスデン工科大学訪問



写真3 ドレスデン工科大学せんい学部実習工場
左側中央2人学部教授 左奥政府観光局役人
左手前通訳安井氏

副学校の Dr. Herlitzius 氏その他多くの人から説明を受けた。去日、日本の東大が100周年を迎えたようであるが、この大学はもっと創立は古く、来年150年目を迎えるとのことであった。

1) 大学の特色 全日制の学生数1万人。通信教育生2000人。教授500人。研究者2200人。1万人の学生の内女子学生は、45%。自然科学と工学にウエイトをもっている。繊維と食品加工分野の作業機械については、特に歴史をもっている。最近では、データ処理技術、エレクトロニクス、森林工学も加わっている。その他、哲学・文化科学のセクション、職業教育の専門家養成のセクション、企業経営の責任者養成のセクションがある。学生代表も総長の諮問会議に出席し、発言権、採択権をもっている。

2) 教授・学習活動の特色 入学した年の半年間は社会科学、工学の基礎、設計製図などを学ぶ。今までの知識を高めるとともに、社会の労働者が学ばせてくれていることへの感謝の念も育てる。理論と実際の両面から社会の要請に応じた養成が本学の任務である。たとえば機械工学の学生は、機械だけでなく、工業と農業の格差をなくそうとしている。したがって、農業生産の機械化にもウエイトがおかれている。

第3学年が終ったところで、すべての学生が3カ月間にわたって、自分の希望職種の職場で学ぶ。たとえば、工場では、班の人の中に入って、労働の価値や尊さを学ぶ。単に職場で働くだけでなく、その職場における諸問題に気付かせるよう、事前に大学から課題が出される。問題の把握とその解決策が課題である。すべて実地の問題が組み込まれる。大学の研究の成果を企業に持ち込むこともある。卒論の90%以上が現場に結びついたものである。

1年生で外国語の国家資格をとらせ、外国文献を読める力をつける。マルクス・レーニン主義は必修科目になっている。法学と工学一般を全学生の必修にしたいと目下検討中である。今のところ教官不足である。

歴史では、科学史、技術史、物理学史、数学史を扱っている。それらは知識としてでなく、今日にどう生かせるかの力を大切にしている。

3) 研究活動 仕事の効率を高めることが主におこなわれている。これはDDRのねらいである。手労働・筋肉労働などにたよっている遅れた工場について、世界に立ち打ちできる立場からの技術指導をしている。その他科学と技術の最先端を各企業に浸透させることも進めている。社会主義国以外の国々とも研究協力をおこなっ



写真4 ピオニール宮殿

ている。日本との協力関係もうまく行っている。

(5) ドレスデンピオニール宮殿訪問

ピオニール (Ponier) とは、開拓者、創始者などの意をもった言葉である。ピオニールハウス、子どもの家などと呼ばれるものが各地におかれている。これは学校教育を離れ、地域の青少年のための社会教育施設といえるものである。

わたくしたちの訪れたピオニール宮殿は、19世紀ザクセン王の皇太子の宮殿であったものを地域の子どものための施設として利用しているものである。文字通り本物の宮殿であり、大理石の床、天井には豪華なシャンデリアがぶらさがり、日本の児童館などとは全く比較にならない立派なものであった。

7～14才の子どもがピオニール団に所属し、この宮殿で、代表的先人の偉業を学んだり、鉄道、工作、美術、動・植物などたくさんあるサークル活動に参加する。それらの活動は子どもたちにとって、余暇の善用、将来への職業の準備、社会に通用するパーソナリティを育てるなどがねらわれている。また、ピオニール団の指導員養成や再教育の場所としての機能ももっている。

ここの指導員は、教育学の立場からの専門家40人、技術関係の専門家40人から構成されている。大変な指導者構成である。それだけに、展示されているモールス信号機、ラジオ受信機、電気回路の各種作品やゴーカートなどの機械作品、金属加工作品などのどれを見ても、子どもらしい粗雑な作品は1つもなく、専門指導員によって指導されるだけのすばらしい作品ばかりであったことには驚かされた。近隣の工場もこれらの活動には積極的に援助してくれることも聞かれた。

(6) ベルリン化学工場内職業学校訪問

ここでは、副校長の Frank Noack 氏が中心となって説明してくれた。

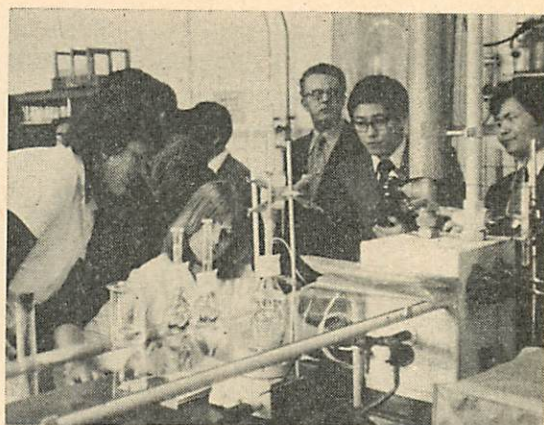


写真5 ベルリン化学工場職業学校実験室

この化学工場は、100年前に創立。1950年国営工場に移轄。工場の主な生産品は、インシュリン、クロマイ、注射薬、錠剤、アミノ酸、試薬、消火剤、サビ止め剤など多品目を生産している。従業員3000人。

職業学校は工場内の一画に独立して建てられている。

1) 学習コース ①化学実験室の助手養成コース。②化学工場専門工養成コース。③大学進学者コースの3つのコースに分かれている。前の2つのコースは2年制、大学進学者のコースは3年制である。生徒の総数は、330人。その85%が女性である。

2) 学習上の特色 5つの講義室と、4つの実験室をもっている。①と②のコースは、教育省で決められた内容にそって、広範な基礎を学ぶ。したがって、どの化学分野に就職しても立派に取り組んでいかれる能力が培われる。第1学年では、3週間理論学習、2週間実習のくりかえしで、基礎事項を中心に学ぶ。第2学年では、専門に分化し、理論学習2週間、実習3週間をくりかえしながら学ぶ。実習はすべて工場で行う。8つのテストを総合して資格認定がなされる。指導はきびしくなされる。

進学コースでは、はじめの2年間で理論科目を学び、3年目で実習の単位をとる。

3) 指導者 先生は全体で40人。その70%がこの学校の卒業生である。いずれも専門学校あるいは大学の卒業生である。理論学習は教育大学卒の者が、13人で担当。実習指導は、技術関係者の専門家で、生徒養成の資格をもった者があたる。

指導者は、それぞれ専門文献に目を通したり、月例会教育会議で理論学習をしたりする。5年たつと、6週間の再教育に出される。

この職業学校では、午前午後にわたって、これ以外に

たくさんの方を同った。それは10年制学校の訪問が諸般の事情から実現できなかったために、この職業学校の先生および、話し合いの場に参加された男女各1名の学生からそれらを含め、DDRの教育全般にわたる話をたくさん伺うことができた。しかし、ここではそれらについては割愛させていただく。

4. まとめ

今回の視察を通して、確認できた特色点をあげると、つぎのようなことがあげられる。

- (1) 労働と教育の結合は、10年制学校から大学に至るまで一貫したものとして体系的に位置づけられている。
- (2) 総合技術教科と自然科学、社会科学とは密接な関連をもって指導されている。

(東京都八王子市立浅川中学校)

企業内職業学校と 室内照明器具のこと

志 村 嘉 信

はじめに

DDRの視察旅行団の1員として、あわただしく準備をすませ、海外の様子を実際に目でとらえて無事羽田に着くことができた。その視察の中で学ぶことのできたうちの一部を、雑感として記してみたい。

1 企業内職業学校にて

① 教育機器の利用

写真1はTVカメラで自動制御装置を撮影中のものである。被写体は電気スタンドで照明を受けている。被写体がタイプライターの4分の1程の大きさのため、その機構を学生全体に提示するためにTVカメラを利用してテレビに映像しているものと思われる。学生全員が一斉に学習した後、1人1人の学生が直接その装置を視察して、機構の学習をより確かなものにするといった授業過程と推察される。この教授学過程は日本の授業でもよく行われているパターンと類似している。ぜひとも知りたかった、見たかったのは、その教育機器の実地の利用場面であった。教師が学生に向かって、機構を一方向的に説明して終りなのか、それとも、教師がさまざまな質問を出して、学生の返答を正しいか誤っているか診断しながら進めるのかといったことである。この点の授業技術は、技術家庭科の機械の学習の場面でも当面することである。

TVカメラの機構は、日本で商品化されているタイプの1つと類似している。おそらく、必要があればTVカ

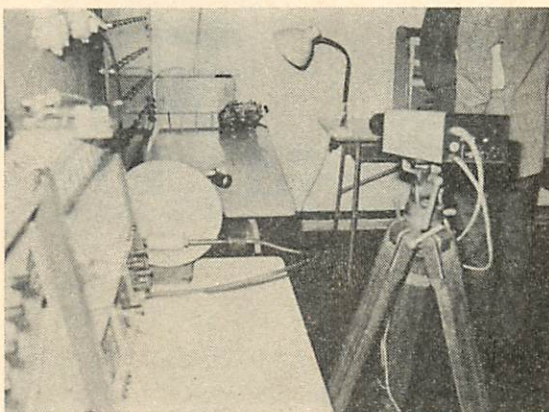


写真1 TVカメラの利用

メラに映像が現れるタイプのものも利用されよう。むだなことははぶくといった点は、合理的で徹底していると思った。また、カメラの3脚は木製が主体で、固定する部分だけに金属が使われている。全体的にごつい感じがする。デパートで見た、35ミリカメラやテープレコーダのデザインも同じ印象をうけた。日本では見た目のいいカッコよさが消費者の購買欲をさそうことが中心に作られている。日本の視聴覚教材の1つにTVカメラの3脚もあるが、ずいぶんとこっているのを見かける。放送局並といったところのものが多い。

写真2はTVカメラが設置されている20人ぐらいの学生が入室可能な教室である。写真1のカメラで撮影された装置は、右上部のテレビに白黒で映像されていた。

テレビの左下は掛図で、更に中央に黒板がある。学校



写真2 視聴覚教室



写真3 安全指導の表示

で使う移動式黒板の大きさである。左端の大きな白い部分はOHPなどのスクリーンにするところで「壁」である。これは私達も利用させてもらえそうである。ただ、日本の教室は画一で黒板が大きなスペースを占めているのでどうかと危惧はあるが。

② 安全指導

写真3は室内に表示されている安全指導である。喫煙、非常ベル、消火器、救助法が部屋に入ったそばにまとめて表示してあった。救助法も図入りで解りやすくなっている。一般的にシンボルマークなどを使って具体的に誰にも解りやすい表示がほどこされている。デパートでも何階はどんな買物ができるかといったことが、文字を読むより、大きな図で一目で解るように表示されている。

③ 評価

写真4は企業内学生が化学実験を試みているところである。私達視察団を笑顔で迎えているが、この女子学生達にも厳しい授業と評価がなされているとの先生の話。10年制の義務教育の評価が相対的で、「1」が最高で数字「2」、「3」と大きくなると学力の低下を示すとのこ



写真4 化学実験中の女子学生

となのでこの企業内職業学校においても同様な方法がとられていると思う。

④ しつけ

DDRの家庭で子ども達に対してどのようなしつけがなされているか不明であるが、一般的にしつけ（態度とも考えて）をみると、家庭教育にあるものと、学校教育にあるものと2つに分かれるのではないだろうか。この企業内職業学校では、厳しい教育が（時には意地悪のように）なされているとの話があった。それは、学生達の将来たくましい生きかたを願ってのことと思われる。

学校側と視察団との懇談会には18才の男子学生と写真5の19才の女子学生が同席した。視察団から10年制の義務教育と現在の職業学校への進路のかかわりなど難しい質問に、過去をふりかえり的確に答弁した。難しい質問に、写真5のように両手でポーズをとり熟慮する場面もあったが、終始笑顔で答えてくれた。



写真5 質問に答える女子学生

彼女の席は日本流に言うところの末席で、右手に男子学生、左手にはイングリット女先生が同席している。たまたま言葉1つの答弁を通訳の安井先生に着席したままで答えたところ、隣のイングリット女先生から「(あの方は)先生よ。立ちなさい」と小声でビリッとした声が彼女に向けられた。

ドイツでは授業中の発言は立ったままか、着席したままか解らないが、今回の懇談会のような視察団への訪問客に対する配慮か、それとも年上の人に対する細かいよ

うであるが、学校教育の「しつけ」なのか、いずれにしても教育の1つを見せてもらうよい機会となった。女先生によるほんの一言は、この女子学生を通していろいろな場面で後輩の指導に実践され受け継がれていくものと思う。

2 照明器具

① 家庭の照明

芸術の都、ドレスデンを出発する頃、夕日も大分傾いて専用バスは第2次世界大戦の遺産“アウトバーン”を一路ベルリンに向かった。ベルリン市内では夜のアパート群を身近に見ることができた。帰宅した家庭の部屋にともる照明は、ほとんどが電球による照明で4個ぐらいの電球を使ってシャンデリヤ風であった。日本でも照明器具は蛍光灯から電球照明への流行が感じられる。ベルリンのアパートでは蛍光灯を使用している家庭を探すのは極めて困難であった。工場とか、駅、デパートなど人の集まる場所では蛍光灯の照明である。

アパートの窓をうつし出す電球照明は、やはり蛍光灯と異なって暖味を感じさせる。蛍光灯と電球が使い分けられているのも何か理由がありそうだ。例えば、集会場となる場所は、長時間連続照明をするので蛍光灯の方が有利などといったことである。

② 電球1コで大きな話題が……

ホテルの部屋はツインでパストイレ付きであった。室内の照明は全部電球照明である。そのうちドアを入った所（ロッカーがあり、縫い針・糸、洋服ブラシ、靴みがきまで用意されている）と洗面所が天井照明となっていた。寝室は大型の電気スタンドが1つ、事務用の卓上スタンドが1つ、枕元の小スタンド1つである。これらのスタンドに共通しているのはつぎの点である。

- (1) 全部素通しのガラス電球である。
- (2) カサの取付はソケットに入れて特殊なプラスチックねじわくで固定。
- (3) カサを固定した後、電球をねじ込む。
- (4) 日本の様式の電球に針金でカサを宿らせていない

写真6はホテルの事務用の電気スタンドである。裸電球のままだとまぶしいが、カサをつけるので日本のつや消し電球は必要ない。つや消し電球はフィラメントの二重コイルと同様に日本の発明らしいが、ホテルでは日本のような電球は見かけなかった。だからドイツの電球はカサがないとまぶしい。カサを使うからつや消しにする必要はない、いやカサを使わないで裸電球で使えるのが日本のつや消し電球だ。このいずれがよいかは興味ある

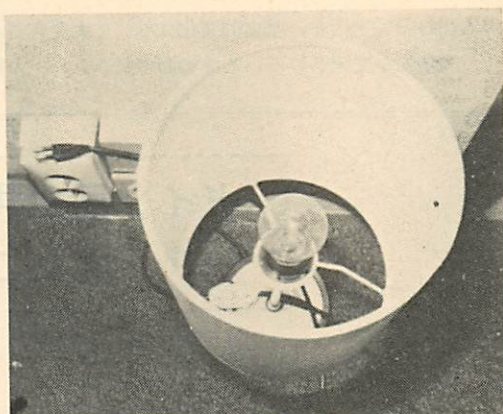


写真6 ホテルの電気スタンド

問題だ。国民性もあろうし、生活習慣もあるし、技術開発と国民経済や消費生活の問題など電球1コで話に花が咲くことと思う。



図1 電球頭部の表示

もう少し電球をながめてみよう。口金や電球の大きさは日本と同じぐらいと見ていい。右まわしでねじ込むのも日本と同じ。電球のてっぺんにマークがないかと調べてみた。みつかった。やはり表示はきちんとしてある。図1は電球のガラス頭部にある表示である。日本で見える電球の表示と同じくらいである。

つぎのことがらを比較してみると面白いと思う。

	電 圧	W数 (同一にしてみる)
ドイツ	240V	75W
日 本	100V	75W

このことからどのようなことが考えられるかである。

つぎにコンセントへのプラグであるが、その形を図2に示す。

日本でみられる一般的な電気製品の差し込みプラグは、剣形をしている。ドイツ



図2 プラグの形

の場合は円筒形で差し込み部分も長目である。この形は、日本の電気製品では電気ごたつのヤグラとか、電気アイロンの発熱体の端子部分などに見られる。プラグの形が剣形がよいのか、円筒形がよいのかおそろくその特性はあると思うので調べてみたい。

おわりに

かけ足視察といったところであるが、日本を離れ他民

族の人達の日常生活や、歴史的文化に触れて大変有益だった。国際的な交流がいろいろな場面で試みられ、人類

の平和と幸福を高い次元から願うものである。

(東京都調布市立第三中学校)

ドイツ民主共和国で 見たこと 聞いたこと

保 泉 信 二

東京からハンブルグまで、アンカレッジ経由の飛行機で、約16時間で着く。地球儀でみると、北半球を半分以上飛んだ距離になる。

生れてはじめての海外旅行であったことが、私にとって、すべてが新鮮なものとしてうつり、それだけに、1つ1つの事実や事件が印象ぶかい。

今までの40年間で島国の中で育ち、初めて外国人を見たのが、終戦後の駐留軍。いまでこそ、外国人は、めづらしいものでもないが、当時を思い出してみると、外国人およびアメリカを体質的にうけ入れないものがあったようだ。

戦後まもない頃、駐留軍の進駐にあたって、私の田舎(埼玉県北部)には、次のような、うわさが流れた。

「アメリカ人とは、天狗のように、鼻が高く、青い目をし、赤い髪の毛をした、鬼のような大男である」と。ことに婦女子にこのことが広まり、私の姉などは、家から1歩も出られない日さえあった。近所のおばあさんが、そのことを苦に入水自殺をしたのも、その頃であった。

いまでこそ、ばかげた話であるが、外国人を全く見たこともない私たちにとっては、このうわさは、心肝を寒からしめるものであった。

そんな外国人に対する偏見と、コンプレックスの中で育った私にも、外国を訪れる機会がまわってきた。

それは、今回の産教連の海外旅行の企画である。この11日間にさまざまなことを見聞した。

帰国後、その見聞した生々しいことを、職場ニュースとして、分会の仲間にも知らせている。また、父母を対象とした教育懇談会の席でも話した。そして、日本民教連の代表者会の席上でも話した。

今後、私に接する人たちにも、ひきつづき話したいと思う。その見聞のいくつかをまとめてみよう。

「ベルリンの壁」で ZAHL KARTE

ハンブルグから、飛行機で40分もすると、ベルリンに着く。ハンブルグから、エルベ河を上流にむかって航路が設けられているのだが、当日は、雪が降っていたので視界は悪く、エルベ河の美しさを見ることができなかった。

ベルリンのテーゲル空港からバスに乗りかえて、20分もすると「ベルリンの壁」に着く。

「ベルリンの壁」とは、1961年8月13日、西ベルリン大封鎖のとき、南北45kmにわたって作られた壁で、鉄条網とコンクリートが打ち込まれて、東西の交流が断絶され、ベルリン市民に悲劇をうんだところである。

バスが検問所に近づくと、1人の警備兵がバスに乗り込んできた。

乗員との間で旅行の目的・日程などを聞いていたからだが、パスポートも見ないまま帰って行った。

しばらくして、別の警備兵があらわれ、全員にZAHL KARTEをわたし記入するよう要請された。

ZAHL KARTEとは、コンサイス独和辞典によると、



写真1 放課後学校近くの卓球台で遊ぶ子どもたち

振替貯金払込用紙とあるが、この訳とはちがう。旅行の目的のほかに、氏名、住所、出生地、職業、勤務先、パスポートナンバーなどを記入するものであるから入国申請書と考えた方がよいであろう。

全員が記入し、入国の許可がおりるまで約1時間。この旅行中、ドイツからフランスへ、フランスからイタリアへ、それぞれ入国するときに、ZAHLE KASSEと同様のCARTE CARTAを必要としたが、DDRへの入国の検問が厳しかったように思う。

このことは、翌日のDDRの諸国民友好委員会の書記長のあいさつの中で、国境の不可侵性を強調したことからうなづけるような気がした。

それは、今までの戦争が、国境を無視することからすべて始まっていること、国境を国境とみとめない西ドイツの態度、平和を外交政策の基調とする態度などの中に見ることができると思う。

清潔な街、静かな街——ベルリン

私たちの宿舎 Stadt Berlin はアレキサンダー広場に近いうンター・デン・リンデン通りにあった。

ウンター・デン・リンデンは、戦災に合う前は、パリのシャンゼリゼに匹敵するといわれた賑わいであったという。いまでは、12車線の広い通り、分離帯に駐車場を設けてあるほどの広い車道、50m近い歩道、1階を店舗とし、2階以上を住宅とする高層アパート群、マーケット、各種の店舗、銀行などの建物が通りをはさんで建っている。アレキサンダー広場に建つ365mのテレビ塔は、東ドイツの象徴でもある。

Uバーンで1駅のペロリーナホテルで、2回ほど食事をとったが、その帰り道、歩道を歩いてきても、タバコのすいがら1つおちていない。このことは、ベルリンの中心街から遠くはなれた諸国民友好委員会前の歩道についても、フンボルト大学裏の歩道についても同じである。一行のうちのひとりKさんが、夜11時をすぎて、街中を散歩していたら、歩道を大型の電気掃除機で清掃している作業員をみたという。

しかし、街がきれいなのは、清掃作業員がいるだけではない。日本でも、新宿駅構内などでも清掃作業員が働いている。しかし、紙くず、タバコのすいがらなど、至るところにおちている。市民の意識のちがいはないだろうか。

職業学校見学のために、観光バスに乗ったときのことですが、車内には、灰皿がついているが、「禁煙」の表示がしてあった。ドイツでは、運転手がタバコを喫って

はいけないと言え、乗客は従わねばならないという。

このことは、ドイツ人は、融通がきかないとも言えるし、秩序を重んじるとも言えるし、いいかげんな手かげんは通用しないということにもなる。厳格なのである。

また、夜7時になると、すべての店がシャッターをおろす。7時以降、人のいるところは、レストランのようなどころだけである。

日本のような資本主義国では、営業権の侵害などといって、とてもドイツのまねなどはできそうもない。

もうひとつ街が清潔と感ずるのは、建物のもっている美しさであろう。彫刻をはめ込んだり、壁画等で飾ったりしてある建物があるし、広場や建物を中心に街が構成されている。

日本の1戸建のように、それぞれの個人が、色や形を変えているわけではなく、きちんとした都市計画にもとづいて、通りや街がつくられている。同じ都市建築構造でありながらパリやローマとはちがった美しさをもった街であると思う。

ゆるやかな社会主義建設をめざす

DDRは、1949、10、7に創設された若い社会主義国家である。諸国民友好委員会の書記長は、その挨拶の中で、

「われわれの政治的支配は労働者を指導者としての支配であり、労働者階層は、農業、インテリ階層とむすびついている。そして、もっとも主要な生産手段は、人民のものとなっていること、すなわち国有となっていることであり、生産手段の私有制は少ししかなく、社会主義的な計画経済であり、自由な経済計画ではない。」

「マルクス・レーニン主義の科学的な考え方が、いまや国民の考え方になっており、社会主義社会への主要な課題は、物質的、文化的な生活水準を常に高めて行くこと、社会主義生産の発展を更に高めて行くことにあり、現在では、高度に発達した社会主義国家となっている。」

そして、共産主義に漸次移行して行く社会的、経済的基礎を、西暦2000年までにはたそうとする計画をもって

いる。」

等のあいさつをのべた。

社会主義社会のもっとも特徴的なことは、生産手段の国有である。ところが、DDRにおいては、農業労働者などに対しては、土地の私有を認めていることが他の社会主義国とちがっているところである。

DDRの国土は、ドイツが東西に分割される以前から農業が中心であった。西ドイツには、石炭や鉄などの地

下資源が豊富にあり、もとから重工業の繁栄していたのに対して、DDRは、本来農業のための土地であり、ガイドのソエンカーさんの説明によると、かつ炭とカリ塩ぐらいいか資源がないという。

したがって、東西ドイツは建国の出発点において大きな差異を示していたのである。

こうした状況の中で社会主義国家を建設するには、外国から資源を輸入し自国の重工業を発展させることと、農業の振興による国家建設しかない。友好委員会での書記長のあいさつでも、都市と農村との格差の解消を強調していたことも、こうした背景があるからではないか。

こうした背景から、土地の私有制を認めたのかどうか分からないが、農民は自分の土地をもち、協同組合をつくって、共同管理のもとに経営しているという。

畜産についても、1人あたり1000頭ぐらいを分担し、搾乳から製品までを機械化している。

農業の機械化は、経営の共同化によって一層すすんで都市と農村との労働の差もみられなかったと、ドレスデンからの帰りに農村をまわってきた団員の1人が、あとで語ってくれた。

土地の私有を認めていることも、DDR個有の社会主義国家建設の方針のあらわれかもしれない。

ゆるやかな社会主義社会建設の方向は、土地だけの問題だけではなく、教育や、文化政策等にもみられる。

DDRの学校制度は、10年制の義務教育が行われている。すべての地域で10年制に移行しているわけではなく、1976年の9月の段階で92%が10年制に移行している。

残りの8%は、まだ8年制の学校として残っているということではなく、8年で卒業するものがあるということである。すべての学校が10年制に移行しているが、8年で卒業する者にしろ、10年で卒業するにしろ、卒業後2年間の職業教育をうけることが、保障されているので、8年で卒業する者にとっても、実質10年間の教育は保障されているということである。

国民の実態と要求を満たしながら、創造的に社会や個人の生活を高めて行くところなどに、中華人民共和国やソ連などの社会主義国家建設の行き方とちがう面をもっているのではないか。それは服装などについても言えることである。

教育や文化政策に手厚い保護が

社会主義建設にとって、教育や文化のはたす役割は大きい。ことに教育は、その根幹をなすものである。それ

は、教員の身分にあらわれる。

日本でいえば、教員の地位を高くすることは、給料をあげること（人材確保法にみられるように）で解決しようとしているが、DDRではちがう。

DDRでは、教員の給料は、他の労働者とあまりかわらず、ベルリン市内の教員でも800～1000マルクである。他の労働者とちがうのは、年金で少し優遇されているくらいで、他はあまりかわらない。

むかし、ドイツのことわざに、村に3人の違い人がいるという、その1人が村長さん、2人めが牧師さん、3人めが教師だという。こういうことは、現在では、なくなっているが、しかし、教員は、他の面で、重要視されている。

その例としては、教員は、3人に1人が代議員になること、自治体の首長は5人のうち1人は教員であること、そして、国会議員に至っては、124人をかぞえるという。これは、日本の議会のように、日教組などで、一定の業績をもった人が、国会議員となるのとはちがって、教員が、国家や自治体の建設に積極的に責任をもつということであり、教員の多くが、国民議会（国会）や、地方国民議会の議員として、社会主義国家建設のために、責任をもって参加し、尊敬すべき人格として認められているということである。

もう1つの重要なことは、文化に対する手厚い保護政策である。

DDRに滞在中、オーケストラの観賞をした。会場は、フンボルト大学構内のホールであったが、立派な施設であり、30名ほどのオーケストラであったが、入場料はわずか20マルク（約250円）であった。

DDRには、こうしたオーケストラの楽団が81、この楽団がそれぞれ演奏する専属のシアターをもちその数が80あるという。1つだけ多いのは、1つのオーケストラは放送局の楽団であり、専属のホールは必要ないわけである。

そして、それぞれの楽団が公演活動を行っている。

したがって、ベルリン市内でも、毎晩のように、オーケストラの演奏が行われているわけである。

1日の労働をおえたあと、家族と一語に食事をするとか、正装をして、音楽会や映画会、演劇をみるとかの、夜の生活を楽しむということは、いくらでもできるわけである。日本のように、テレビに毒されている国民とはちがう。

11日の旅行期間中、約半分をDDRですごした。ベルリン市内の職業学校、ドレスデン工科大学、ピオニール

宮殿などの教育施設を見学したが、いずれのところでも教育と国家建設への自負と情熱と自信を感じた。

これは、いったいどこからくるのだろうか。私たちが立場をかえて、外国からの視察団をむかえ入れたとき

に、DDRの教師たちが私たちに示してくれたものと同じものを与えられる自信が、残念ながらない。

(東京都府中第3中学校)

ピカピカ光る自動車が沢山走ることを うらやましがらない国でのこと

坂 本 典 子

はじめに

4日間のDDR滞在中に、目で見、耳で聞き、からだ全体で感じとったものを、今は1つ1つ反すうし、それをさらに拡大しながら思い返しているという状態です。

人民友好協会・教師の家・ドレスデンの工科大学・ピオニール宮殿・アレクセーレオーノフ国営化学工場等の訪問を中心に短期間に一気につめこまれた多種多様な内容はまだまだ自分自身のなかで分類しきれていませんし、それをどう整理すればよいのかを考えると、まだかなりの時間的ゆとりがほしいところです。そんな段階で何らかのまとめをすることには大へん不安があるのですが、今回は主観的な感想として、焦点をしぼってまとめました。

家庭科は自由選択

日本に紹介されている資料によりますと、10年制一般教育総合技術学校のカリキュラムに家庭科(裁縫と訳されている資料もある)という科目が自由選択として4学年・5学年に週1時間ずつおかれています。

教師の家での討論には、国際情報部担当のドーリス・ベッターハーン女史が、われわれの質問に答えてくれましたが、家庭科についてはあまり多くを語りませんでした。主として針仕事を課しているということ、そして自由選択というのは、とつてもとらなくてもよいということで、母親のすすめでとる生徒はいるが、生徒自身の選択にまかせた場合にはほとんどとらうとしない。しかし男子でもやりたい者は選択しているというような話でした。実状として選択している生徒の割合を質問してみましたが、くわしい数字は不明ということでした。そして

女史は「この教科については、余り重要な科目だとは考えていない」という主旨の発言をしていました。

DDRにおける教育全体について男女の性による差は全く設けられていないこと、また今までの段階で男女差のない教育を行ってきたことが、社会的にいい効果をもたらしているということを女史ははっきりといい切っていました。このことは社会主義国において本質にかかわる問題であり、婦人問題についてもアクティブに活躍しているという女史の発言からみて、この問題についてじっくりと話をきく機会のなかったことを大へん残念に思っています。

婦人のおかれている状況

今回の訪問がすべて総合技術教育を軸として組織されていることで、婦人問題について質問をさしはさむことへの遠慮もあって多くを知ることはできませんでしたが技術教育とのかかわりのなかで明らかにされた部分もあります。質問したいと思っているものにとって、時間的制約は大きな拘束力です。

教師の家で語られた男女差のない教育がいい効果をもたらしているということの裏づけになるかどうかは別としても、ドレスデンの工科大学の学生数は現在1万人でそのうち4500人が女性であるという事実、国営化学工場付属の職業学校の学生は85%が女性であるという事実、そしてその工場の従業員も男女半々であるというように工学関係・化学関係での女子のハンディはここでは全くみられませんでした。人民友好協会の討論のなかでも担当者は「婦人の問題は完全に解決しました。男女同権の確立です。学校における女性校長は5人に1人、地方公共団体の代表においても3人に1人は女性が占めています。

す」といっていましたが、女性の社会への進出はめざましいものを感じさせました。

考えてみれば、国家が子どもたちの世話をひきうけてくれるならば、婦人が職業をもつことは大きな妨げはないはずです。化学工場でも敷地内に企業内託児所の建物を併設していましたが、0才〜3才までの保育園、3才〜6才までの幼稚園とも朝6時〜夕方6時まで開園し、婦人の働きやすい条件を作ることに力をかけています。産前・産後の休暇は合わせて26週間、そのあと必要に応じて育児休暇もとれるというぐあいに、婦人が働くための条件は備っています。もちろん職場では男女同一賃金ですし、2人以上の子どもをもつ婦人は労働時間を週40時間におさえ（労働時間は現在43時間45分）賃金は同じに支払われているということです。

そして現在、婦人の75%が就業している事実からみて、家庭にいる婦人のほうがまれで、これでは亭主をおくりだしたあとの井戸端会議の相手もみつからないことになります。

DDRの面積は北海道と九州を合わせたものよりやや小さく、人口は1700万人、工業国として発展するために労働力はいくらでもほしい実状でしょうが、婦人がはたらくことを労働力不足の補完的なものと考えている日本とは、全くちがった観点で婦人問題が解決されていることは何とすばらしいことでしょう。

じゃがいもとグリーンピース

ドイツのじゃがいも料理はすでに定評のあるところですが、朝食を除いて昼も夜もじゃがいもは形をかえてでてきました。ホテルの朝食は、ロールパンにバターとジャム、それにゆで卵かチーズかソーセージがでており、紅茶またはコーヒーがつけます。紅茶用にレモンはつけますが果物・野菜類はいっ切ありません。昼食にも夕食にも厚切り肉のローストかステーキです。1切200g近くあるのではないかと思われるほどのボリュームです。脂の部分はほとんどありません。それにボイルしたじゃがいもか、フライポテトです。たまに酢漬の紫キャベツかきんかんくらのトマトのボイルしたものがそえられる以外は野菜らしいものはありません。

別に深めの皿にボイルしたグリーンピースが山に盛られてだされることもありました。デザートはシロップ漬けのアンズとかチェリーとかすもものような果物が多くだされました。

これらの料理は、視覚や味覚を重んじる日本人の目や舌には余りにもそっけないものですが、質実剛健のドイ

ツ人気質そのものという感じです。しかし新鮮な野菜果物類をほとんど摂取していない食事形態で支障をきたしていないことにおどろいています。ビタミンCはじゃがいもから摂取できるのでしょう。何しろ1食分のじゃがいもの量が200〜300gはあるのですから。

まさに質より量、料理の種類も単純、きわめて堅実で合理的ということばにつきるようです。日本では魚料理しか食べないというH氏が「食事は一番必配だったが、抵抗なく肉が食べられました」といっているところを見るとそれが気候風土にあっているのかもしれない。

家庭料理というものに直接ふれることができなかったのは残念ですが、一般には昼食は職場・学校・託児所での給食になりますし、夕食は、ハム・ソーセージなどの熱を加えない料理をとる習慣があるそうです。このことから考えて食事作りにかける時間は日本とは比較にならないほど短時間にすませ、そして食事にはたっぷり時間をかけて楽しむことになるのでしょうか。

デパートでの発見

アレキサンダー広場に面して東ベルリン最大といわれるデパートがあります。何しろ時間で拘束されているのですからゆっくり見てまわれるほどの時間的ゆとりはありませんでしたが、そこにDDRの生活の一部を垣間見ることができたように思います。

総体的にみて、耐久消費財・装飾品、ぜいたく品とみられるものは別として消費物資の価格は安くなっています。靴などもデザインより機能性に重点がおかれていてはきやすそうです。おどろいたことに靴は中じきにみんな価格が印刷されているのです。そういえば訪問先でだされたレモネードのびんのラベルにも価格が印刷されていました。ここでは、10数年間物価はすえおかれているというのですから、商品のラベルに価格を印刷しておけば、日本のように1つ1つの品物に値札をつける労力を要しません。そこにも国の政策として、消費物資の供給には力を入れながら価格を安定させておくという方針をみることができました。

また別な階では服地売場にかなりのスペースをとっていました。それと同時に型紙のパターンは婦人用・紳士用・子ども用・ベビー用とかなりの種類がそろっています。あみ物・ししゅうのパターンも同様です。これは意外でした。学校教育で被服製作やあみ物・ししゅうを課せられていなくても、需要があるということです。かなりの婦人が余暇を利用してそれらを手がけていることが考えられます。私が見ている間にも、若い夫婦があみ物

機械（日本にあるような形）と糸・その附属品一式を店員に包ませていました。

そのほか意外だったのはミシンの機械部品が取揃えてあったことです。ボビンケースの部品とか小さいねじ類とかが四角い箱に入れてずらりと並べられています。ねじをなくしたり。調子のわるい時は、部品を自分で取りかえて修理をすることになっているのでしょう。

デパート全体はどの階をみても華やかな雰囲気はありませんでしたが、いかにも堅実そのものの消費生活が感じられたのです。

おわりに

それぞれの訪問先で、異口同音に、高度に発達した社会主義社会を建設することを目指して漸次共産主義社会に移行していくための構想が述べられていたことを総合してみると、国全体が1つの目標に向かって着々と何かを築きつつある様子がわかるのです。生活全体は質素でむだがなく、町を歩く人々には悠然とした構えがあり、表情はおだやかで、明るく自信に満ちているようにみえます。それが、失業者は皆無・受験競争は皆無・学校卒業後の有効な就職・安定した生活に支えられた人間の表情だといえるようです。

（東京都品川区荏原第1中学校）

旅行を終るにあたって

——モスクワ～東京間に書いた感想文から——

産教連お得意の速報がDDRに着いたその日から発行された。紙名は“DAS LUMEN”ハブニングで思いのかなったモスクワ——東京間で、No.9が発行された。ちょっと第一面を紹介すると、

「みなさん、ご苦労さまでした。われわれの高度に学問的な漫遊旅行に終止符がうたれようとしています。

静かなDDR、パリの日本人街、ペテン師のローマ野郎？ すべてわれわれの視野を広めてくれました。

“ああ、されど日本への道は遠かった。ダンケ・メルスイボクワ・スパシーボ、（機上でのスワ団長のおことばです）。コラム——ミウリンスキー（三浦先生のあだ名）大活躍。ともかく、モスクワというおみやげ付の旅でした。今日も機上の人になれるかどうか、あきらめていたくらいだったのですが、三浦先生の大活躍で。本当におつかれさまでした。……」

と言った具合で、最後に参加者全員に、感想文を要望。

(1) DDRでの総合技術教育及びエコール・ド・ポリテクニックの見学等の学習で感じたこと。

(2) 日本の民間教育団体としては、初めての企画でしたが、このような試みをどう思いますか。また、今度の旅行の成果を日本の教育実践（研究）の中で、どのように生かしたいと思いますか。

(3) それ以外の感想

(4) 取材した場所・方法の一覧表作成のおねがいの項目で書いていただきました。以下、主に1、2を中心に主な感想を拾って見ました。詳細は産教連ニュース等をご期待下さい。

忙しい学年末をくぐりぬけ、準備も充分でなく、勉強不足で出発し、今、その旅を終ろうとしている。

私は出発の午前に準備のかたわら今回の旅行の自分としての方針を立てた。① DDRの教育の実態とその内容（総合技術教育）、でき得ればDDRの農業の実態と農業教育。② DDRでの生徒指導——わかる授業、いきいきした学校づくりの実態。③ フランスの学校制度と技術教育、この3つの目標がかなえられればと思っ



写真1 諸国民友好協会での会合（第1日目）

た。充分とは言えないが、その3つとも、その目的を達成することができた。「百聞は一見にしかず」、日本に帰って、この旅行で得た資料を整理し、これを日本の教育、民間教育運動に生かすことが当面必要である。これも大変な仕事であるが、とにかく、海外に出て諸外国の実情や問題点を体験的に把握できたことについての充足感がある。

また、産教連の仲間の統一ある目的と行動は、終生忘れ得ない良き思い出となるであろう。また予想もなかったモスクワでの一夜と、モスクワ市内の見学は今度の旅行に一層の精彩を加えてくれた。運動があるかぎり、事物の発展はその内容に質的な変化をもたらすことを知り得たことも、大きな収穫であった。(中略)この旅を終えるにあたって、日本海上空で故国の土を早く踏みたい感情をまじえながら一言。(S・K)

(1) ペルガモン博物館の遺跡の保存と展示方法(ほぼ原寸大の復元)にはドギモをぬかれた。日本でのそれとかなり違っている。産業遺跡など、どうなっているのかも知りたかった。また、歴史博物館は、歴史を生産力や生産手段の発達、変化を中心に、まさに開いた歴史としてとらえていることがよくわかった。

(2) なんとか、やりくりしても、以下のものを見たかった。ドレスデン鉄道博物館、ミラノ、レオナルドダヴィンチ博物館。

(3) ドレスデン工科大学 技術史を大切にとりあげていること——それも講義の1つとしてだけでなく、たとえば繊維工学科の機械も最新式のもののだけでなく、古くから使われて来た機械も残してあるのに感心した。



写真2 ドレスデン工科大学キャンパス

ベルリンで買った「生産力史」のテキストも、中味は読んでないが、みごとな編集である(右ページがすべて

図で、それもはっきりしたもの——日本で訳されているものでホッジスの「技術の誕生」(平凡社、平田訳)と同じスタイルだが——これは通史ではない——)

(4) ピオニールの技術クラブや、職業学校のように、企業の協力が組織的に行なわれているのを見て、さすがは社会主義国だと思った。特にピオニールの技術クラブは、子どもも教師も生き生きとしていてすてきだった。

(5) DDRの職業学校でも、ピオニールでも展示、掲示のしかたがとてもきれいだ。また、コンサート会場やデパート、街の人々の服装もはなやかでなく、落ちついていて、センスがいいと思った。帰途、西ベルリンの空港で見た婦人たちがとてもうすすぎたかと思えてならなかった。——教育全体の中で美的な感覚をもみごとに育てているのだろうか。コンサートなど家族連れが多くうらやましいかぎり。それにペラボーに安い入場料。

(6) 「教師の家」もよかった。教育と教師が大切にされていることがわかった。また、教員が市民としてもゆたかになるよう、サークル活動が保障されているのはうらやましかった。

(7) 日本の生産力の高さをあらためて思い知らされた。

カメラ、電気製品、時計がウィンドーにあふれていたし、日本人観光客のなんと多いこと。

(8) この旅行によって、教師としての視野が一まわり広がったように思う。技術史の授業には直接使えるオミ

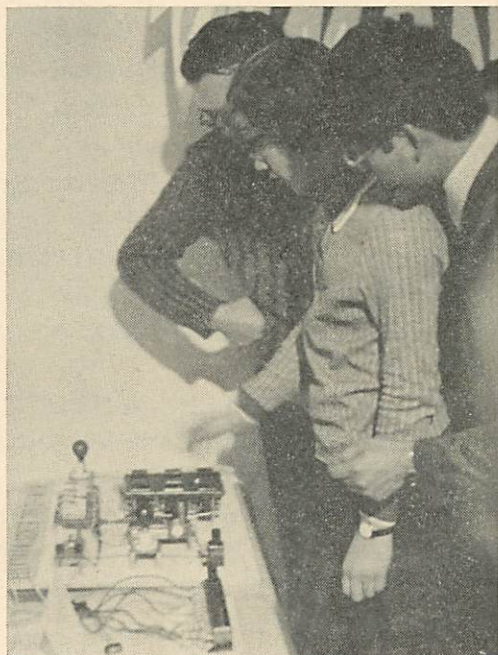


写真3 ピオニールの技術クラブ作品

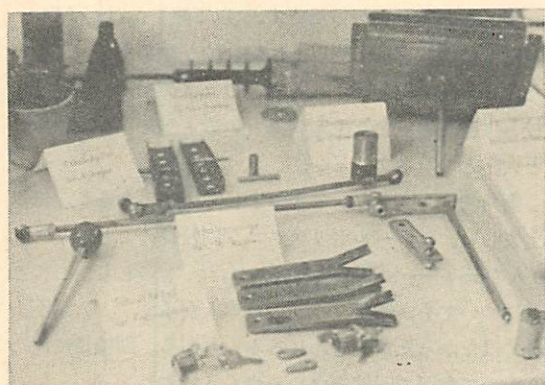


写真4 ピオニール技術クラブ製品（ゴカート部品）

ヤゲが入手できたし、それだけでもゴキゲンである。

(T・S)

10年制総合技術教育の実際について見る事ができなかったのは残念だったが、平和を守り、社会に有用な人をつくるという教育理念がどの教育現場でも一貫していること。1クラス25人前後のことなど大きな驚きとせん望を感じた。ピオニール宮殿の見学では課外（校外）活動が入念に組織されていること。それがまた、学習と密接に関連していて、学校の学習が子どもたちの生活の中に全くとけこんでいることにも驚かされた。それだけに10年制学校の1日の実際をこの目で見て、われわれの見習い得る範囲での研究努力の参考にしたかった。

(S・O)

＜教師の家＞ 資本主義体制としての矛盾である地域格差、肉体労働と精神労働の分離。これらの問題に真正面からとり組んでいる姿に感動。農奴制の歴史を解放後の20数年の間に大きく質的变化を遂げさせ、教師が都市よりも農村をより、選んでいくという事実にも驚いた。

日本の実態と比較してあまりにもちがいすぎるのでちょっととまどってしまう。

農業について多くを知りたいと期待をかけていたが、バスの中から見るDDRの農村地帯は、農業の立地条件としては恵まれているように感じた。社会主義建設の目標に添ってやれば、おのずと都市から農村へ、技術水準も高まり、将来の展望も具体化しやすいようである。今回は農村の実態を見る事ができなかったが、次回は必ず実現できたらと思う。

＜ドレスデン工科大学＞ 特に学生との交歓の際、彼等の将来展望を聞いて、大へん優等生的な答が返って来たので、その真の姿の解釈には苦しむ。宿舍の近くのデパートで会った店員の態度や、高校生？の行動を見てみると人間的な欲望は、それほど差がないと感じたのだ

が、トータルとしては、将来展望に向っている若者たちの集団をそこに感じた。(H・T)

社会の体制がちがう国での教育であることを痛切に感じました。「生産力の増強」という同じことばが、労働者にとって、DDRと日本では全くちがった意味をもつわけです。日本で、私たちが「子どもに労働体験を」というときには、DDRと同じようにはいかないわけです。たとえば、どのような方法をとれば、社会的有用労働に参加させ、それについて学習させることができるか、私たちのおかれている社会の生産関係の矛盾をいかに学ばせるか、などどれをとって見てもむずかしい課題だと思えます。

家庭科の分野についての科目は、自由選択の「針しごと」以外にはなく、全く重視されていません。社会体制のちがいで、不必要な分野となったのかも知れませんが、工作や製図、技術、職業学校での科目等の中で、基本的な考え方が学べるのかも知れません。とにかく、家庭科の分野についての学習については、DDRの家庭の中に何日か滞在し、家族関係や、生活様式などを見学したり、10年制学校を具体的に視察しなければ、衣食住について、どのように学んでいるのか、明確にならないのではないかと思います。(以下略) (T・F)

私が、今一番なつかしく思う情景は、教師の家やシュタットベルリンのあるアレキサンダー広場である。

もちろん、パリのルーヴル美術館も、ミラノのスカラ座も、バチカンのサン・ピエトロ寺院もすばらしかったが、ベルリンは何しろはじめて踏む外国の地であったし、最も長く滞在したところであったし、何よりも、最も安んじて生活できたところであった。DDRでは子どもたちが非常に大切にされている。それは、甘やかされているということではなく、主権者として全面発達べく育てられている——少なくとも、はっきりと意図的に——ということだ。

特にいいと思ったのは実習や工作が、その場かぎりのものでなく、作品が製品として市場に出たり、機械の部品になったり、生産工程の中に組み入れられているということである。そのことによって、自分たちが社会を担っていること、また勉強することの意味が端的に理解できるということ。いろんなところで受けた説明を大まかに割り切って言えば、今、DDRでは生産をあげることに、国民の文化水準を高めることが、大きな目標となっていて、そのために教育が非常に重視されているということである。少し欲を言えば、説明がやや多く、目で見える部分が少なかったことである。(以下略) (Y・M)

前々から総合技術教育の思想に学んで、あるいは遠い国の文献に学びながら、実態を十分に把握せず実践して来ました。しかし、今回の教育視察を通じて（職業学校やピオニール官邸、教師の家での会合等）、DDRの教育政策、教育のシステム、その全体構想をつかむことができました。雑誌や本から受ける感じとは全く異った一面を見たり、感じたりすることができたことは大きな収穫でした。すべての面において感心することが多かったわけですが、感心だけでなく、これからの日本の教育全体の機構を考えなおさなければいけないことに気がきました。侵略的行為のみを増長させるような教育に終始一貫しているのが日本の教育ではないのか。ソニーその他の大企業が海外でがんばっているのは仕方がないとして、資本主義のみにくい面が浮き彫りになっている感じは何かならないものか。日本に直接、DDRの技術教育を導入することは不可能なことは当然ですが、その思想や方針に学ぶことは大いに大切なことと、参考になります。——以下略——（J・K）

DDRの総合技術教育とエコールポリテクニクの共通点は、経費を国で負担することだけで、あとは基本的にちがう。科学的分析の下で、労働を通してムダのない、どこへでも使える職業教育を身につけさせるDDRの教育に感銘したあとの訪問だったので、特にその印象が強い。エコールポリテクニクでは、頭デッカチ教育の恐ろしさを感じた。「エリートは300人しかいない」との副総長の言葉がいまでも耳に残っています。

第1回目の視察旅行、私は門外漢ですが、評価してよいと思います。綿密な企画、優秀な通訳、立派な仲間達。さすが「サンキョウレン」。政策のちがう日本で、DDRの教育をとり入れることはむずかしいと思いますが、その教育観、社会主義的人間像について、今後も研究して行きたい。欲を言えば、ピオニールの実際の活動場面をもっと見たかったし、婦人労働者とのディスカッ

ションもあるとよかったです。（以下略）（H・M）

総合技術教育は予想以上に総合的な体系をなしていた。10年制学校とピオニールとのコネクション。職業学校と生産現場、また生産現場（企業・ゲゼルシャフト）と大学とのコネクション。

街角や、レストランでキスをしている男女あり。ほほえましい。エコールポリテクニク副校長のことば——300人の云々——には毒気を抜かれた。もっとも、このことについても、通訳（パリの日本人女子ガイド）が不十分ではなかったかと思われるふしもある。副校長にはあらためて書面で回答を求めるつもりです。

産教連の課題が少しだけ手にのせることができたように思います。男女共学、技術教育と職業教育の結びつき、それらの独自の課題等、今後生かすべきものがなにかを少し理解でき始めるような気がします。頭の中をもっと整理して考えなおさねばなりません。

DDR訪問の成果については、政治体制が根本から異なるので、すぐにどうということは言えないと思いますが、日本の民間教育研究団体が訪問したということ、そしてお互いの友好関係をDDRとのみならず、団員間でも深め合ったということは大変重要な成果であったと思います。従って、私たちの役割もまた、今後の活動の中で、それを重視してとりくむ課題がでてきたと思っています。今回の訪問の内容については、産教連としての課題があります。その第1は、記録、質疑応答などをまとめ、私たちが何を見、どんな学習をしてきたか、資料として作りあげることだと思います。第2は各個人が得た、学びとったものは何かを発表し合い、集団で討議を行い、客観的・科学的なものとして、すぐれた意見を産教連が持つことであり、このことを持って、日本の技術教育をリードする団体として発展することだと思います。また、各個人の役割も重要です。それは職場や地域の中での活動にも、上記の成果をふまえた上で、日本の教育の発展のために大いに活用し、広め、深める努力をすることだと思います。このような企画を立案し、その実現のために骨を折られた事務局を初め関係機関の皆さんに心から感謝します。（H・S）

（まとめ・佐藤慎一）

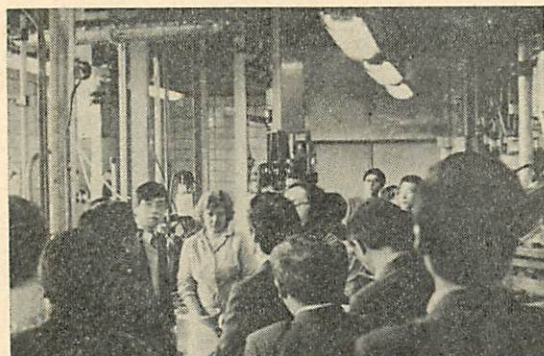


写真5 ベルリン化学工場付属職業学校実習室

ドイツ民主共和国の 総合技術教育を学ぶ

向 山 玉 雄

はじめに

産教連は1970年以来「総合技術教育の思想に学ぶ実践をめざして」をテーマにして研究してきた。そのため、ドイツ民主共和国（以下DDRと呼ぶ）の総合技術教育についても一定の学習を積み上げてきた。しかしメンバーの中で直接DDRをたずねた人はなかった。文献をとりよせたり、行った人の話を聞いたりして間接的に学習してきたわけである。できれば直接国をたずねて自分の目で見たり聞いたりしたいという希望はもっていたが、こんなに早く実現するとは思わなかった。それが三浦常任委員の努力によって思いがけず実現でき、帰ってきた今やはり行って良かったという実感でいっぱいである。日本の教育実践にどう生きるかは今後考えていかなければならないのであるが、今まで文献でしか学習できなかった教育制度や、総合技術教育や、子どものようすや教師の姿勢など実感として1つ1つたしかめることができたことは今後総合技術教育の思想に学んでいく上で大きな成果になるにちがいない。

私たちがDDRで訪問した場所は次のとおりである。

- ①「DDR人民友好委員会」話と討論
- ②「ベルリン教師の家」話と討論、施設の見学
- ③「ドレスデン工科大学」話と討論、見学、学生を交へて
- ④「ドレスデンピオニール宮殿」ピオニール活動見学
教師および生徒との交流、討論
- ⑤「ベルリン化学国营工場職業学校」説明と討論（学生を交えて）授業、施設見学
- ⑥ 10年生総合技術学校、保育園、幼稚園、放課後の子どもたち……10年生総合技術学校は正式には見学できなかったが、校舎、学校菜園、校庭などを外から見学、学校帰りの生徒と話す。
- ⑦ その他、ベルリンからドレスデンに到る途中の農

村を見たり、教材資料館などを外からのぞくなどや
ベルリン及びドレスデンの市内見学など

これだけの見学および討論だけでDDRの教育全体を断定的に述べることは失礼かと思うので以下述べることは、私の感想を含めた印象記である。

なお訪問全体の成果については、すべての説明や質疑のテープによる再現を含めて単行本にまとめる予定なのでくわしくはそれを待ってお読みいただきたい。

1 ドイツ民主共和国の印象

訪問する前私は数冊の観光旅行用のパンフレットを見た。しかしこの中には多くても数ページしか書かれておらず、中には西ドイツから東ドイツに入ると、とたんに暗い印象を受けると書かれてあった。しかしバスがベルリンに入ると私の目にうつったのは整備された都市ベルリンと道路をゆっくりあるく人々の明るいまじめな顔であった。自動車のスクラップが積み上げられ、いかがわしい雑誌がはんらんしている西ドイツをのぞき見た私にとって、それは質素ではあるが健全に発展していると思われるDDRの姿であった。ベルリンの町には古い建物



写真1 10年生学校の校門で生徒と話しあう

に新しい材料で増築し、補修された姿がいくつか見られたが、ペルガモン博物館を見たり、説明を聞いていくうちに古い文化を大切にしながら新しい社会主義社会を建設する姿にうなずくことができた。

この印象は5日間DDRに滞在して帰途につく時点でも全く変わらなかった。

ドイツ民主共和国は1943年現在の体制をめざしてからまだ30年近くしか経過していない。当時農業国だったDDRはその後工業生産にも力を入れ、都市と農村の格差をちぢめることに努力がはらわれた。農業の機械化に成功し、その努力は大きな成果を上げているという。このことは、教育の面においても「機械や電気の学習は農村においても共通して役に立ち基礎的な重要点と考えている。といったいくつかの学校の教師の言葉もうなずけるところである。

社会主義国では生産手段の主要なものは人民の所有となっている。したがって学校は全部国立・公立であるし企業の大半も国営企業となっている。私たちを案内してくれたツェンカーさんも国営のガイドさんだった。しかし私有財産が全く認められないのではなく、現状では、農業経営などは自分の土地を、共同組合に入って集団農場として耕作しているという。印象としては建設途上の社会主義国という形で特に印象が深かった。ゆるやかな社会主義国という印象である。

国全体が高度に発達した社会主義社会をつくる。共産主義社会に移行するための物質的、文化的な基礎をつくる。そのためには、物質的文化的水準を常に高めていかなくてはならない。それぞれの人が自分の教養を高め、自分の労働を大切にしなければならないという。よりよい社会主義社会をめざす人民の努力はかなり徹底しており、どこの学校の教師、生徒・青年と話しても同じ答えが自覚的にかえってきたことから実感としてうけとめられた。

学校も同様で第9回大会の決定にもとづいて行なわれているが、10年先20年先の社会主義社会を背おう高度な教養と高度な倫理性をそなえた人間像をめざして、緻密な計画のもとに教育が行なわれている。

以前は大学を卒業すれば頭が良くなるだろうという固定的な考え方もあったが、この考え方は変えられ、専門的な労働者を養成することに最重点がおかれているという。

DDRでは男女同権の問題についても大きな課題としてとりくまれてきた。私たちが見聞した範囲ではどのような制度や保障のもとでこの課題が達成されたかまでは学

習できなかったが、見学した学校で女性が重要な地位につき、職業学校でも男女がほぼ半数在籍し、説明に立った女教師や指導者の生き生きとした自信に満ちた話しぶりからも容易に想像することができた。

しかし問題がないわけではない。軍縮の問題、生産性向上の問題、資源不足の問題等、中でも西ドイツとの関係についてはかなり大きな悩みをもっているように受けとれた。

予想していた以上に教育制度が体系化され一貫したものであり、しかも、ち密な計画のもとに制度が組織されているというのが実感であった。しかも幼稚園から大学までが、将来の高度に発達した社会主義社会の中で働く人民の育成という目標につながり、それが国家の政策と一致していることに今さらながらおどろきを感じた。「教師の家」で10冊程度の教育に関するパンフレットをいただいたが、図1にあげた教育制度はその中の「ドイツ民主共和国の総合技術教育」15ページに出ているものである。この体系表は日本でも紹介されていて私たちも見なれているものであったが、私たちはこれを見ながら説明を聞くことにより、DDRの学校や教師や子ども・青年の姿を思い合わせながら具体的に実感として頭の中に入れることができた。以下若干の解説を試みたいと思う。

DDRでは義務教育が10年制の普通教育を行なう総合技術学校と呼ばれ、この中で全面的に発達した社会主義社会をになう人間像をめざして教育が行なわれている。10年制学校を卒業するといくつかのコースにわかれるが、大半は②の職業学校に進む。この学校は国営の企業に附属している学校で、たとえば、ベルリン化学工場内の職業学校では職業に関する専門的基础教育を受け化学実験室の助手と、化学工場に働く班長クラスを目標として行なっている。学校といっても実際にはその企業に働く労働者の1員として生産に従事するわけで一定の賃金も給与されている。理論と生産が一定の間かくをおいてくり返されており、職業訓練の他に社会科学に関する学科も学ぶことになる。しかし企業内教育といってもその企業に直接役立つ教育だけが行なわれるのではなく、その専門のどの分野の仕事に従事してもよいように共通的な転移のきく教育がされているということである。

私たちは、ベルリン化学国営工場の職業訓練校を見学したが、ここを出る青年はベルリン市内のいろいろな化学工場で働いているということである。

この職業学校は2年で卒業する者と3年で卒業するものがあり、さらに職業学校へ入ってから専門学校や大

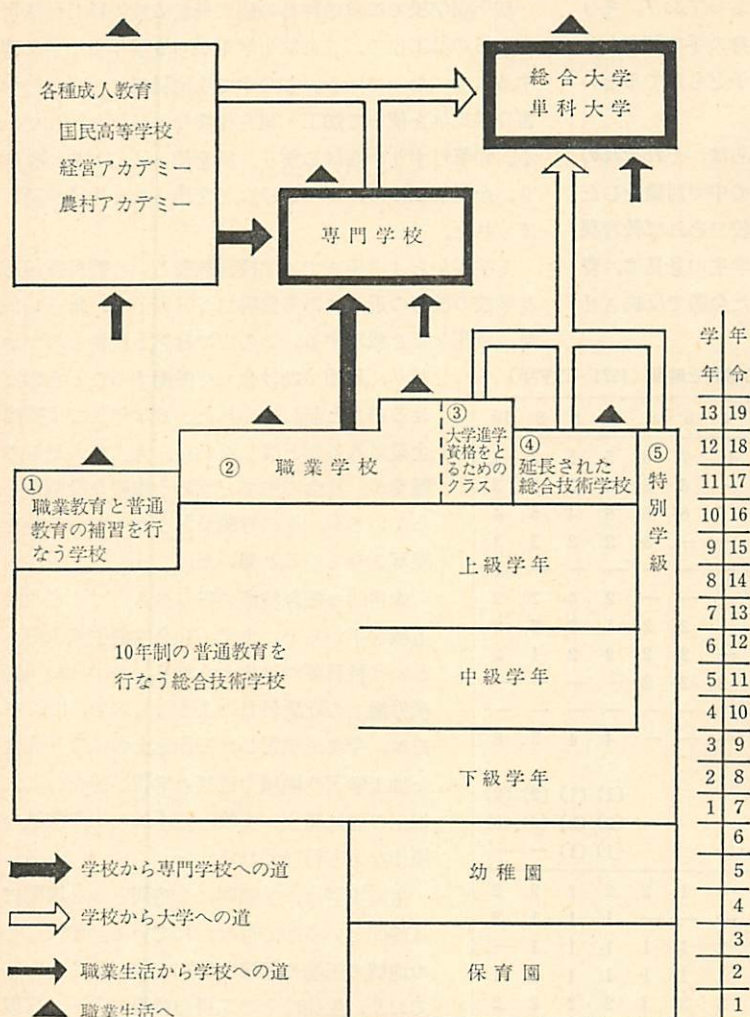


図1 ドイツ民主共和国の教育制度

学に進学を希望するものは資格試験を経て、さらに上級の学校で学習できるような制度になっている③。

10年制の義務教育が終わると延長された総合技術学校④に進む生徒もいる。延長された総合技術学校を出て職場に直接入る青年もいるが多くの場合は大学に進学するようである。この学校では普通科目の教科を中心に学習するが、生産実習にあたる時間が数週間とられている。

この図1の中で①は10年学校の8年を終了して直接生産労働を行ない、しかも一般教育をも継続・補習していくコースがある。これは訪問して始めて知ったものである。教師の家での説明では、DDRでは、1976年現在92%が10年への移行が完了しているが残りの8%が①にあたる部分つまり8年終了で職場に入っているということである。この課程は3年間で、職業訓練と並行して一般普通教科も学習し、ほぼ10年生卒業の生徒と同レベルの

学力を身につけるようにしているということであった。

10年制学校と並行して「特別学校・特別学級」というのがもうけられ、これは7才から18才まで一貫した特別な教育が行なわれる。特別という意味は専門的な一貫教育という意味で、体育の才能のあるものは子どもの頃から、訓練を積み重ね、特にすぐれた層をつくるという意味にとれる。どんな種類の特別学校があるかまでは聞く時間がなかった。

職業学校の上には専門学校があり、職業学校での専門基礎教育の上にさらに専門的な学習がなされるようになっている。専門学校の中でさらに学習したい希望があれば、総合大学、単科大学にも進めるようになっている。

DDRでは成人教育にも力を入れており、経営アカデミー、農村アカデミーなどの教育センターで学習が行なわれ、それらの人々が専門学校や大学をかなり自由に利用して学習できるようになっていると聞いた。私たち

が訪問したドレスデン工科大学は、全日制1万人、通信教育2000人、が学習しているが、企業で何年か働いてさらに高度な専門技術を身につけるために来校している人もかなりいると聞いた。

これらの統一された教育制度の他、この系統図にはあらわれていないが、課外活動が重視されている。10年制学校の中級学年までは、それぞれの学校で行なう課外活動に参加しているようであるが、上級学年になると大部分の生徒はそれぞれの地域にあるピオニールで課外活動を行なう。ピオニールには専門の指導者がいる他、自由ドイツ青年同盟(FDJ)に入っている専門の指導者たちが子どもたちを指導している。私たちが訪問したドレスデンのピオニール宮殿では、子どもの実際の活動を見ることができ、子どもと一緒に話し合ったりした。ピオニール活動では、例えば鉄道クラブのような場合に

は、子どもたち自身が経営する鉄道をもっており、キップの準備からお金の扱いまで子ども自身の手で行なわれこの中からも鉄道関係の仕事にすすむ子どもがでるといふ話をきいた。

10年制を卒業した17才以上の青年たちは、それぞれの学校や地域の中でFDJが組織されその中で討論をしたり各種のサークル活動をしている。学校であれば教育課程や授業内容や学校運営などに対する学生の意見は、青年同盟の中で討論され、教授をまじえた会議で反映させるようになっている。

表1 10年制普通教育・総合技術学校の教科と時間(1971~72学年)

学 科 目	学 年	1										
		前期・後期	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
国 語 ロ シ ア 数 学 物 理 天 文 化 学 生 物 地 理 工 作 学 校 園 教 授 総 合 技 術 教 授 (内容)	語	11	10	12	14	14	7	6	5	5	3	4
	語	—	—	—	—	—	6	5	3	3	3	3
	学	5	5	6	6	6	6	6	6	4	5	4
	理	—	—	—	—	—	—	3	2	2	3	3
	学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	学	—	—	—	—	—	—	—	2	4	2	2
	物	—	—	—	—	—	2	2	1	2	2	2
	理	—	—	—	—	—	2	2	2	2	1	2
	作	1	1	1	1	2	2	2	—	—	—	—
	教 授	—	1	1	1	1	—	—	—	—	—	—
	教 授	—	—	—	—	—	—	—	4	4	5	6
	(内容)											
社会主義生産入門									(1)	(1)	(2)	(2)
生 産 労 働									(2)	(2)	(3)	(3)
製 図									(1)	(1)	—	—
歴 史 公 民 図 画 音 楽 体 育	史	—	—	—	—	—	1	2	2	2	2	2
	民	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	2
	画	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	—
	楽	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1
	育	2	2	2	2	3	3	3	3	2	2	2
1 週 当 時 間 数		21	21	24	27	29	31	33	32	33	31	33
(選択)												
第 2 外 国 語 針 仕 事		—	—	—	—	—	—	—	3	3	3	2
		—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
合 計		21	21	24	27	30	32	33	35	36	34	35

2 DDRにおける生産労働と教育の結合

総合技術教育の中核をなすものの一つに、生産労働と教育の結合により、子ども・青年の全面発達をめざすといふことがある。私たちが言葉の上ではわかっていたが現実にはどんな形で結合がなされているか興味深く見聞してきた。

まず、10年制総合技術学校では、技術に関する教科が中心になり、他の自然科学、社会科学の教科が最大限に結びつくようになっており、技術課目も他の教科を最大限に生かすような形で科学的、系統的に組まれているといえる。

10年制学校では普通科目の他に最初に技術科目が学習されるのは工作で、これは1学年から6学年までが学習するようになっている。この中で生産材料についての学習や手工具を使って加工・組立作業などが行なわれている。鉛筆けずりからはじまり、紙を使った工作、箱作り、金属加工では、カギかけなどを作ったと生徒が話してくれた。

1学年から4学年までは学校園教授という教科目があり学校の校舎の近くにある農場でジャガイモ、ホーレン草、草花などを栽培する。この中で自然と技術とのかかわり、集団で助け合って労働することを学ばせるのだと話してくれた。6学年までは直接

企業に入ることはしないが、大人の人の職業が、社会の中でどういう重要な役割をもっているか、その労働がどうなっているかを理解させていると聞いた。

本格的な総合技術の科目が入ってくるのは上級学年からで、まず「社会主義生産入門」という科目がつけ加えられる。これは、「生産労働」の理論科目のようなもので、この中では、今まで学習した工作を土台により高度な加工学習や機械や電気の学習が行なわれ、加工の他に組立、実験、基本的な工作機械の操作なども行なわれる。

生産実習は、1週間に2時間とか2週間に4時間という形で行なわれている。学校はその地域の工場や農場と特別なけいやくをもっており、生徒はその工場や農場に入って直接生産活動に従事する。生徒の生産実習も、工場では、その工場の生産システムの中に組みこまれており労働者が直接指導してくれる。したがって遊びとしてやっているのではなく、責任をもたせている。生徒のやることだ

から、中には製品がうまくできない場合もあるがそうすると全体の生産にひびくので、生徒も大きな責任を自覚しており、真剣にとりくまれる。

上級学年で加わる2つの総合技術科目は、単に技術を習得するだけではなく、生産全体を総合的視野でみられるようにし、あくまでも基礎教育として行なわれているので職業教育ではない。

総合技術科目ばかりでなく、他の教科もすべて、科学性が重視され、また教材がすべて社会の生産と結びついており、DDRの社会、生活の問題に直面して学ぶように配慮されていることが強調された。



写真2 下校途中の生徒

職業学校での学習は生産労働と教育の結合というよりも、工場で全部を過ごすことになるのでその中で理論科目と実習がくりかえされるので、生徒は、専門分野について、理論と実践の両面から基本的な知識、技能を身につける。私たちが訪問した、ベルリン化学工場職業学校では、第1学年では理論3週間、実習2週間というリズムがくりかえされており、第2学年になると、2週間が理論、3週間が実習という計画で理論と実習がくりかえされる。2年生の終りにテストがあり、そのテストにしたがって、さらに3年に進むもの、大学進学希望をもつ

ものなどが分けられる他、助手として必要な実習の単位がとれるようになっていてと説明された。

ドレスデンの工科大学では、10000人の全日制生徒がいるが工作機械製造、理学、情報処理等幅広い学科をもち、社会主義的な企業の経営者を目ざして育てている。最初の学年で社会科学の基礎と数学、物理をきびしくやり、工業用製図や設計製図などもやる。生産実習は3年生で行ない、大学が工場と常に連絡をとりながら進める。学生は生産実習でどんな課題を解決するかテーマをきめ、企業と打ち合せ、調整が行なわれ、課題と企業の生産課題とがかみ合うように配慮される。4年生では、実施の問題をカリキュラムに組みこまれ、生産実習がその後の大学での学習に生かされるように配慮されている。

おわりに

はじめにもおことわりしたように、以上は私の記憶とメモにもとづいて感想として書いたものである。記憶のはっきりしない部分についてはいづれテープをおこして正確に再現したいと考えている。

(常任委員、視察旅行副団長)

資本主義国における「総合技術教育」

池 上 正 道

「エコール・ポリテクニク」を訪問したとき、まず頭に浮かんだのは「筑波大学」でした。学生の自治も一切認められないという学生生活を、彼等は全く「満足して」といっているように思われました。それは、創立以来、300名の定員を変更していないというエリートとしての充足感があるからでしょう。広大な敷地に、あらゆる施設の完備した教室、研究室、図書館などが並んでいました。これが、どうして「総合技術学校」になるのか、首をかしげるほど、そこでは「技術教育」はおこなわれていませんでした。「理科系教養大学」といったほうがよいように思われました。出発直前に、三浦さんから「エコール・ポリテクニク」の資料を作ってほしいと依頼され、岡邦雄氏の「自然科学史」の一部を紹介した

のですが、数学者のモンジュがこの大学を創立した頃は、たしかに「総合技術学校」であったのが、ナポレオンの反動期からその性格が変わってきたとのべられています。須藤敏昭先生はルイ・アルマンの「エコール・ポリテクニク」1967年からの文章を紹介されましたが、現在では、

「……それは、基礎的な科学的教養を中心とした精神の訓練を行うことで、二つの任務を果さねばならない。まず第1の任務は、実行者、専門家としての腕前を発揮する以前に、ものごとを指揮したり総合できるようになるために不可欠の、特別な能力を生徒に与えることである。もう一つ、それ以上に重要なことは、生徒を、文武にわたる国家機関での活動であろうが、国有の、ないし

は私有の企業を発展させる活動があるが、多様な活動において創造的な役割が果せるように準備することである」

とし、これが「ポリテクニクという名称に（これをより正確にプレ・ポリテクニクと呼んでもよいが）ピットリの役割を果している」とのべています。

このルイ・アルマンのいう「実行者、専門家としての腕前を発揮する以前に、ものごとを指揮したり総合できるようになるために不可欠の、特別な能力を生徒に与える」という点は、創立以来の「ポリテクニク」の考え方だと思われます。岡邦雄氏は、「自然科学史」第3巻の、19世紀の自然科学の概説の部分で、ほとんど「エコール・ポリテクニク」についてのべています。そして「吾吾は、資本主義勃興期の科学の清新な魅力に心ひかれるのである」という感想をつけ加えられています。「エコール・ポリテクニク」の創設期には、「現在われわれの観点からすれば、非常に数学的理論を重視した工業大学と旧陸軍砲工学校を結合、合体させたようなものであった」（岡邦雄）そして1年は「石工規矩法学年」2年は「土木学年」3年は「築城学年」と呼んだとのべられているように「技術教育」の色彩が強かったようです。これは、現在では全く変わってしまい、「理科系教養大学」のように、理論面だけが残り、国家目的に直結した面は強くなってきたと考えられます。

ドイツ民主共和国の教育学者G・クラップはその著「教授と生産労働との結合にかんするマルクスおよびエンゲルスの見解と総合技術教育」（邦訳・マルクス主義の教育思想）のなかで、エコール・ポリテクニクについてのべたあと「19世紀の初期以来、ドイツをも含めたヨーロッパ大陸の諸国家には、パリーの手本になった学校施設が生まれてきた」として1825年カールスルーエにつくられたのが最初の総合技術学校だとのべています（同書 265 ページ）。そして1851年にドレスデンのテヒニッシュ・ビルドゥグスアンシタルトが総合技術学校に昇格したことなどをのべています。そして、

『当時ひろくゆきわたっていて、「総合技術」（Polytechnik）という術語は、いうまでもなく、「工業を実質的に経営するために基礎として要求される科学的知識の総体」という意味を含んでいる。そして、実のところ、総合技術学校は、大てい、その名に合った実質をそなえている』

とのべています（266 ページ）。

ところが、このような伝統の上にドイツ民主共和国

（DDR）の教育が築かれていると期待していた私にとって、全く衝撃的といえるほど、この国の「総合技術教育」は、1949年の建国後、「あらたに」作られたという考え方がおこなわれていたことでした。それ以前の「総合技術教育」は、まさに「総合技術教育」という名に値しないという考え方です。この国で、クラブの考え方が、一部の専門家以外にひろく行きわたっていないこともわかりました。

しかし、私たちが日本で教育運動をすすめる中で「総合技術教育」に学ぶためには、「総合技術教育」の思想の流れを考えることがどうしても必要になります。クループスカヤは「国民教育と民主主義」その他の労作の中で、ルソーからはじまり教育思想史の流れの中に総合技術教育の思想の発展を明らかにしています。ドイツ民主共和国の成立過程を考えると、ソ連を、その国を作るときのモデルとせざるをえなかったでしょう。しかし、日本の国政改革の中での教育改革を考えるならば、これと異なるすじみちをとることは当然です。社会主義社会がまず建設されて、その中で新しい教育体系を考えるというようにはならないでしょう。むしろ、現在、社会主義社会の中で実現されているものも、一定の条件の中で形を変えて、実現せざるをえないものがあるのではないかと、それが国側と民間側の力関係によっては、一定の限度ではあっても、具体化するのではないかと、いや、むしろ、形を変えて、国側から先に提起されてくることに、どう対応してゆくかを考えることが重要なのではないかとこの気がするのです。まさか筑波大学を「総合技術大学」と呼ぼうと提案してくることはないと思いますが、そういうことが起っても決して不思議ではないと思うのです。

「総合技術教育」はDDRの「教師の家」で書いた説明によると、マルクス・エンゲルスによって創られた教育思想であるというもので、それ以前の資本主義国における「総合技術教育」はブルジョアジーに奉仕するものであったと割り切られていました。で「総合技術教育」ということばが、これから、もっと多く使われるようになったとき、それを、日本では誤った使い方であるとして拒否するのか、ことばそのものは受け入れ、実践面で「エコール・ポリテクニク」的な総合技術教育にしないようにしてゆくのかということが問題になります。私は後者の行き方が正しいのではないかと考えています。今度の旅行で、その確信がますます深まったと思います。

（東京都板橋第2中学校）



ゆがんだ「教育を受ける権利」と教師

私の勤務校から、マンモス団地のまんなかにある中学校に転任した校長の話すところでは、学校のまわりの団地から、年中監視されているようだというのである。その正門の前には横断歩道がなく、まわり道をしなくてはならない。その学校の先生が横断歩道を通らないで校門に駆けこんだりすると、学校に電話がかかってくるというのである。

「いま、お宅の学校の先生が横断歩道を回らないで学校に入った。こんなことで子どもにしめしがつきますか」

という抗議である。このようなことは以前には、考えられなかった。たしかに、父母に「教育を受ける権利」の自信が高くなり、教育委員会や学校に、おそれず連絡できるのはよいことに違いない。しかし、そうとばかりは言っていられない面もある。こうした話を教育活動全体にどう生かすかは、学校で教師集団がきめることで、教師集団と父母・市民との信頼関係が成立していれば、その問題を提起した人と感情的にならずに話し合い、あるいは改善を約し、あるいは、そう言っても無理な実状を話して納得してもらうことができる。ところが、残念なことに、そうならないことが多い。学校に電話をかけないで、いきなり教育委員会に電話をかける。あるいは担任の先生に知らせないで、いきなり校長に電話をかける。それも、自分の名を名乗らないでかけてくることもある。子どもを人質にとられていて、その報復をおそれたといえはいるが、それほど、教師集団と父母・市民との信頼関係が成立していないことになる。そして「主任制」が、ますます、これを悪くすることに拍車をかけることになりそうである。

私のかかわった1つの事件があった。ある小学校で新任の女教師のクラスに、友だちに乱暴をよくする子どもがいた。その先生は、当然経験は少いけれども、クラスを集団として高める中で、その乱暴する子も、いっしょにやってゆけるような努力をつづけてきた。学級通信も日刊とはゆかないにしても、ほぼ週に1回ほどは出してきたし、学年の、ほかの先生を無視して決定するということもなかった。にもかかわらず「あの子をほかのクラスにかえるか、担任をかえてほしい」という提案をする親が出てきた。校長・教頭はこれにとびついた。というのは、この先生が組合に加入したり、その青年部の活

動をしたり、教研活動に積極的に参加していることを好まなかった。この先生に一定の「指導助言」をあたえるために、父母の、この非常識な提案を最大限に活用しようとしたらしい。教頭は、PTAの委員が、このクラスの親のボスと、しばしば個人的に喫茶店などで会って、クラスの状態を調査した。もちろん、この問題の起る以前からである。そして、組合運動に熱心な先生とつき合うなということを、親に言わしたりしている。

そして、学級PTAの役員を集めて、緊急に、この問題で学級父母会を召集したらどうかと提案させる。ところが、このための集りを持っているところを、担任の先生に見られてしまい、途中から担任を出席させるよう指示したが、収拾がつかなくなって、その父母会に、担任の出ていない間、校長・教頭が、はじめから父母会に出席し、異様な雰囲気の中で開いたが、結局、提案を生そのまま出すことができず、中途半端で終わった。このとき、明らかに、担任に知らせないで学級父母会の召集を決定したのであった。

この事実を知った組合は、この先生の訴えて調査に入ったが、校長・教頭に、親の言うことは正しい。私はあなたたちとは、このことについて話し合うことはできない、と主張し、ついに決裂した。組合側は、本人の証言を裏づける客観的事実のくわしい資料を添えて、上部機関の交渉にゆだねると同時に、本人を指導主事と面接させて立ち会い、真実を調査するよう要求した。ところが校長から提出された書類は、今回の学級父母会は、親の方が自主的に開いたものであり、校長・教頭は、本人に指導助言をしたが、計画的にダメージを与えて、次の年に担任を外すとかの人事と問題にしたわけではないという意味にとれるように報告した。組合側は、あくまで事実関係が違っている点を追及し、ついに、教頭に校長試験で合格の見通しがあり、年間委員になっていたものを外させるという結果になり、その先生は希望通り担任で持ち上ることができた。これは稀有の例であり、大体、これが簡単に発展することなく、教師の方が絶望して組合退脱、教員を退職、発狂か、自殺という事件に発展することが多い。

父母は教育の主権者で、担任を変えさせたりするのは当然であるという考え方は誤っている。教育を荒廃させる「父母主権者論」の恐しさを知った次第である。(I)

ヨーロッパの障害児教育

——主に技術教育・職業教育を中心にして——

琴 屋 孝 之

私は昨年(1976. 9. 18~10. 17), 1か月にわたり文部省教員海外派遣団第16団の一員として、全国各地の養護学校の先生がたとイギリス・ポーランド・スイスの障害児教育を中心に、フランス・スペイン・アメリカ・欧米6か国の教育・文化・社会の実情を視察する機会に恵まれた。

一行27名は、昭和54年度からの養護学校義務制を3年後に控え、年々重度化・重複化しつつある子どもたちの教育に努力している先生たちばかりで、外国の障害児教育のあり方や方法について共通の視察目的をもって海外視察を続け多くの成果をあげることができた。

本誌には、学校訪問をしたイギリス・ポーランド・スイスの障害児教育の概要と障害児教育における技術教育や職業教育の現状について報告する。

1 イギリス

まず、イギリスではロンドンの北方約600kmにあるスコットランドのグラスゴー市(人口100万の工業都市で産業革命当時に繁栄した都市として有名)を訪ね、当市の養護学校を4校訪問した。

イギリスでは1971年(スコットランドでは1975年)に養護学校入学義務制が施行され、国民健康法の規定により満2才になると、自分の子どもが障害児であるか否かを調査してもらう権利と判定の結果に不服があれば文部大臣に訴願する権利が与えられており、常設の判別センターで、小児科医や心理学者、専門教師などによる検査を受け、早い者は2才頃から保育学校で公教育が開始され、両親の過保護化を防止して自主性が養われることになる。

判定措置後の就学中も絶えず医務官や心理学者による巡回指導が行われ、適切であるか否かが確かめられている。一般開業医も、特殊教育対象者を発見すれば報告義務を負っていて、判別センターに紹介するし、学校には

治療士がいて指示や指導するなど地域社会をあげて教育に参画し協力を惜しまない。

特殊学校は、9種類(難聴ろう・弱視・盲・精薄・てんかん・言語障害・不適応・肢体不自由・病弱)が設置され更に軽度・中度・重度・超重度の学校に分れハンディの状態に応じて受け入れられている。教育の内容はそれぞれ個人の障害に応じて目標が定められ、極めて弾力的で創造的であった。

校舎、校地等施設についてはこじんまりとした学校が多く、日本のように公立養護学校や大学の附属養護学校のように小学部・中学部・高等部がそろっているような大規模な学校は目にかかれなかった。

教員は90%以上が女性で、われわれ27名が全員男性だったので、どうして日本からは女教師がこないのかと訪問校でたびたび質問された。

グラスゴーで訪問した学校と種別は次のとおりである。

- (1) St. Gabriels School (軽度精薄)
- (2) Newhills School (重度精薄)
- (3) Broomlea School (超重度精薄)
- (4) Kelbourn School (痙直・重度肢体不自由)

(1)のセント・ガブリエル・スクールは対象児数72名(男子40名、女子32名)の軽度精薄で年令は5才~12才までである。教員は校長を含め9名で全員女性である。教育内容は小学校教育課程に準ずる教育を行っていて、社会自立を目標に教育課程を編成し、読み書き計算などの教育内容によって能力別のグループ編成替えを行っている。

障害が軽度なので、日常生活指導の必要のない児童には、国語・算数の学力をつけて普通小学校に転校させるようにしている。

(2)のニューヒルズ・スクールは生徒数60名で年令は5才~16才までで、5クラス編成で原則として年令で分けており、IQの測定不能者が多い。

教師は8人、全員女先生で1人はパートタイムで養護教諭的な職務を担当している。

2年前に新設された養護学校である、普通教育は1教室約25m²、特別室はプレールームが200m²で全体的にややミニサイズである。

教育課程は、簡単な知的学習（読み書き・算数）を目標にはしているが、日常の生活経験及びプレーを通しての学習であり、年令の大きい学年では技術科や生活科を多く学習しているそうである。

本校の授業参観で丁度、木工作業学習を見学したので、写真-1にその実習の様子をおさめた。

家具の下うけ作業で、女先生1人に生徒3人であり塗装作業をしていた。女生徒3名は調理室で調理実習をしていた。他の養護学校では、技術や工芸学習があり、電動工具を使って、家具の製作ができるそうである。家庭科の学習内容は、調理・裁縫・育児・応接等の家事にともなう実務的なものであった。16才をこえたと卒業させるが、卒業生で高IQの者はクリーニング関係の仕事についたが、ごく少人数であり、職業につけない卒業生は授産施設に入れてもらい、補助金をもらって生活をしている。

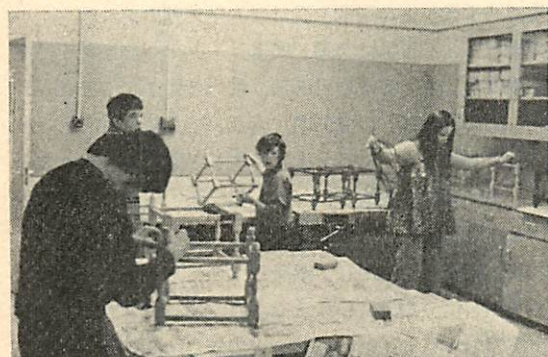


写真1 ニューヒルズ・スクールの木工作業学習

2 ポーランド人民共和国

つぎのポーランドは、よく知られているように第2次大戦でナチと戦い300万人の人命と45%の施設の建物を戦火で失った国である。国中いたる所にナチと勇敢に戦った戦跡や記念碑があり、どの学校にも大戦の資料室があり、平和教育を徹底させていた。

日本には、あまりなじみがなく交流も少ない国だが、有名な人物としては、コペルニクスやキューリー夫人、ショパンなどがある。日本では最近、東欧社会主義国の反体制運動がマスコミによく登場しているが、地理的にソ連に隣接していて微妙な立場にいます。国土

面積はヨーロッパ第7位の広さで、人口は約3300万人、鉱工業の天然資源には恵まれている。

首都ワルシャワから、120km離れたウージ市（人口80万の工業都市で繊維・電子工学・化学が主体）を訪れ、養護学校と普通小・中・高校と電子工業高校を訪問した。

ポーランドの特殊教育については、6才児に対して全員医学的、心理学的な検査を行い、その結果にもとづいて適正な就学指導をするようになっている。

精薄児の出現率は2.5%の割合で、この子たちは幼稚園は普通の子どもと共に指導し、7才からIQ50~70程度は特殊学校にIQ30~50程度の子は終身学校に入学する。終身学校というのは18才までを対象として、生活指導、自立指導など身体的な自立を教えらるることにより、社会的自立を目ざし、雇用を見出させるようにするのである。今後は幼稚園や小学校の中へ特殊学級を設置して特別な指導がなされるとのことであった。

特殊学校としては、盲・ろう・難聴・精薄・終身・訓練学校などがある。

訓練学校は難聴学校と精薄学校の卒業生が入学するようになり、15~19才まで職業訓練をうける。その実習工場は写真-2のようになり大規模な工作機械設備が整っており生徒の製作した製品は全部市販され収益金は免税になり、生徒の資金的援助や工作機械の購入に当てられる。そして卒業後は国家で全員の職業を保障しており、収入を得ても生計が不足する場合は、国家が社会保障をしている。

「社会主義国家のもとでは、社会福祉はありえない。社会保障は社会主義国の基本である。」と一般社会福祉政策の基本的理念を説明者はわれわれ日本の教師に力説していた。

ウージで訪問した学校と種別は次の通りである。

- (1) Kindergarten No. 157 (第157幼稚園)
- (2) Grammar School No. 15 (第15小(中)学校)
- (3) Grammar School No. 137 (第137小(中)学校)
- (4) Special Grammar School No. 97 (第97特殊小(中)学校)
- (5) Z.S.Z. Special School No. 1~3 (第1~3特殊総合アンサンブル学校)
- (6) Zaklad Special School No. 1 (ザクラード第1特殊学校)
- (7) United High School of Electronics (全国電子工業高校)
- (8) Licenuz High School No. 26 (第26リセヌフ普

通高校)

以上のように、8校園を訪問したが、ここで簡単にポーランドの教育制度について説明する。

(A)幼稚園教育は、3才～6才までの4年間を対象としているが、6才児は就学前の教育として義務化されている。この時点においてすべての子どもたちに対して医学的・心理学的診断を行い、適性進路の科学的チェックをされる時期である。

就園率は全体の59%である。1学級当り30人の幼稚園児に対して2人の教師が配置されて、午前6時から午後5時まで両親の働く時間帯を保育されていることが特に目立つ点である。

(B)小学校は7才～15才までとし、学令児は8年間の全員就学義務を課されている。日本でのいわゆる中学校段階がなく、これに相当するものは小学校の中に含めて考えられている。

この小学校の中に共同学校と称するアンサンブルスクール形態のものがあり、レクリエーション活動・体育等を特に重点とした学校の性格で、室内体育館・室内プール、球技場等の施設・設備も、地区住民、地区の生徒たちが充分に利用できるような計画・プログラムが組まれている。

小学校においては、午前・午後に分けて2部授業を実施している所が多く、これは新興住宅による子どもの急増と、施設・設備の不備と、教員の不足が原因のようである。

(C)高等学校については、普通高校と職業高校の2面があり、いずれも小学校を卒業して進学することとなり、4～5年の就学年限を要する。高校進学については、教育機関及び学校で、小学校8年間の観察の累積に基づいて慎重に検討される。小学校から送られてくる書類の中から成績の良い順に許可されているとのことである。

普通高校は大学進学を目指す者が進み、職業高校においては中堅技術労働者の養成を目指している。基礎職業訓練には2～3年を要し、この種の職業高校は全国で300校程度あり、提供するコースについては、それぞれの州のニーズに応じたコースを設定しているようである。

訪問した全国電子工業高校は、テレビ・エレクトロニクス等のコースが設けられている職業高校であった。職業高校には、全般に施設・設備も勤労者のために提供され、指導者も学校教職員だけでなく、外部の工場からエンジニアがどんどん出向いている。

教育制度の就学年令では、3才～6才が幼稚園・7才

～15才が小学校、15才～19才(4～5年間)が高等学校に学ぶことになる。6才(最高年)の幼稚園から高校卒業までが義務就学である。

人口80万のウージ市内に、7つの大学、小学校268校、普通高校39校、職業高校121校、その他の学校を含めて約450の学校が設立されている。他に238の幼稚園をもっているが、幼稚園が多いのは働く婦人が多いことが原因だそうである。そして、

これらはすべて国立であり、設立、運営は当然の事ながら国費でまかなわれている。学校運営費も満足できるものであると聞かれたし、次代を荷負う青少年が国力の充実に邁進するよう期待しての行政施策がうかがえて、教育への惜しみない投資は、日本の財政事業の相対主義と大きく違う点であった。

訪問した(6)、(7)の2校について概要をまとめてみる。

(6)は、第1～3特殊総合アンサンブル学校

この学校の対象児はろうあ(難聴)と精薄(知的障害)で障害種別の違う者が同居している点が特徴である。教育内容は、生活訓練、一般教育、7種の職業科(金工・旋盤・溶接・木工(机・長椅子など)、縫製、編物、刺しゅう)が主体である。職業高校の一種で、初等教育終了後一定の選別を受けて入学後基礎的な教育(一般教育)と、後半に7種の職業コースの相当徹底した職業訓練をしているようである。就学年数5年(15才～19才)生徒数497名(男296名、女201名)で、寄宿舎学校ともいわれるようにほとんどの生徒が寄宿舎生活であり、生活訓練を重視している。職業科の実習場は実に堂々たる工場といった感じのもので、生徒の製品も立派であり、直接商店に出して販売しているものと会社の下請のものに分かれているようであるが、日本の特殊学校の実習では見られないほどの大規模であり正確な製品を生産していた。校内実習ばかりでなく、実際の工場での実習にも出ているということであり、さらに卒業後の進

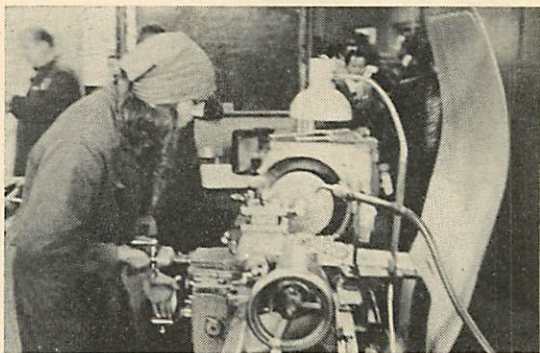


写真2 特殊アンサンブル学校の旋盤実習



写真3 縫製作品を見せる女生徒

路については普通の工場に心配なく就職していると説明された。約500名の生徒に対して、教員は67名、助手・用務員31名、養護教員(看護婦)3名、校医2名の教職員構成であった。

(7)は、全国電子工業高校

生徒数1200名(男720名、女480名)

教員数40名(内、助手3名)

この工業高校の特色は、

(1)T・V Electronics の教育を中心に技術教育を取り入れること。(2)技術者を養成することだけを目的とするのではない、技術学(Technology)を学ばせて社会に出すことを目的としていること。(3)土・日曜日には一般勤労者のために校舎を開放し、授業も受けられるシステムをとっていること。(4)教員以外に、工場から25人もの Engineer が出向して来ていること。(5)教職員組織が一般教養部門と、Work Shop 部門に2分されていることなどである。

見学では、電子実験室の授業を参観したが、3人が1グループで、1クラスは25人~40人、高学年は電波測定の実験中であった。Radio club Room では、補助教員として生徒たちが作ったスライドやTV回路のモデルが納められていた。

Work Shop 部門の実習では、

Automatic 実験室があり、国の一大産業となっている繊維工業にも使用されている重要な部門。実習として製作されたものが一部東欧諸国にも輸出されている。レコードプレーヤー組立室で組立てられた製品は、チェコ・ブルガリア・ソ連に輸出されている。

その他、電子工業高校は、ウージ市、ワルシャワ市、クラホフ市の3校しかなく、ポーランドでは極めて珍しい段階であるとの説明があった。

3 スイス連邦

スイスは日本ではよく知られているように、九州ぐらいの国土面積で人口約620万の小国で25の州からなる民主的、共和政体の連邦国家であり、永世中立国として世界的に有名である。

スイスのジュネーブを訪問して、ジュネーブ市の養護学校や庇護授産所を次の通り6校園を訪問した。

- (1) Foyer de pedagogie curative de Pinchat
(パンシャ養護小(中)学校)
- (2) Ecole Clinique de Pediatie
(病院(内)附属学校)
- (3) Jardin denfants de Thonex
(トネー障害児幼稚園)
- (4) Centre dintegration socio-professionnelle pour adolescents
(青年社会職業統合センター)
- (5) Atelier protege Vifor
(ヴィフォ庇護授産所)
- (6) Atelier protege Chirat
(シラー庇護授産所)

スイスの各州は教育については自由権をもっていて、精薄児教育については各州の教育機関の管轄下にある。精薄児教育課があり、精薄児の教育については障害によって、教育機関で教育の適正化をはかっている。この教育を推進するために、特に普通学校教員や特別教育関係者(医師や心理学者など)の援助と協力に力を入れている。私がスイスの学校訪問で敬服し、今後の日本の障害児教育にもぜひ実施してほしいと思ったことが2点あった。第1は、障害児幼稚園の教育である。日本にも、早くこのような障害児幼稚園が多く開設されて、早期教育による障害の改善が可能になるよう望まれる。

第2は、会社の中にある(5)・(6)の庇護授産所を2か所訪問したが、スイスでは義務教育を終了した18才~65才までの心身障害者を対象に企業が心身障害者に働く場を提供してお互いに社会への協調と連帯を強めていることを強く感じた。いわゆる障害者の社会統合である。日本では、この面が遅れているようである。

(5)のヴィフォー庇護授産所は、医療器具(輸血用品)の組立て作業をする授産所で、成人の心障害者(精薄や脳性マヒ)男4名、女10名、計14名を親会社の援助のもとに、近くの別の工場で教師1名、補助者2名、それに医師、心理学者により、きめこまかなステップで指導していた。組立て作業を通じて作業訓練と生活訓練を行う施設であるが作業工程や技能を完全に習得した者は親会社の工場での作業に移ることもあるらしい。

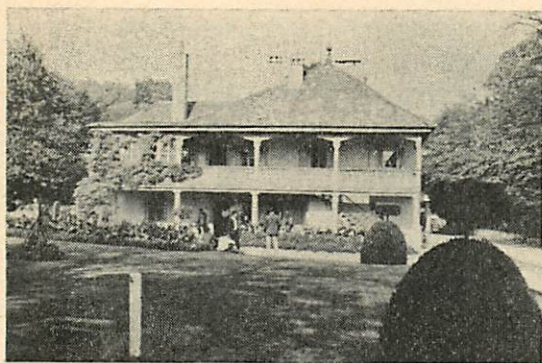


写真4 ヴィフォー庇護授産所の全景



写真5 作業工程を説明する教師

作業工程はかなり正確を要するものだが(写真-6を参照)、組立てに用いるために障害者個々の実態に合わせた補助器具や工程の細分化(8工程)、個人の生産高や技術習得の記録等がよく整備されていて障害者への会社の思いやり、教師の訓練への熱意がそこに働く人々の作業に強く反映されている姿を見て感激した。日本でも、こうした企業の積極的な理解と協力が強く望まれる。

スイスの障害児教育や社会統合の特徴として、

① 障害児幼稚園や小、中学校がすべて小規模で個別指導に徹している。

② 教員と児童、生徒及び保護者との人間関係を重視し、それを基にしてクラスやグループ編成をしている。

③ 生活訓練や統合学習に力を入れている。

④ 専門家チーム(心理学者、精神科医、医師、言語治療士、社会教育指導員など)が週1回、各幼稚園、学校を巡回指導している。

⑤ 幼稚園・小・中学校での障害児の義務教育が一貫しており、さらに「青少年社会職業センター」と「庇護授産所」との連携が、スムーズで幼児から65才までの生涯教育が保障されている。

⑥ 社会の受入れを促進する施策として、職場での雇用はもとより、障害者が自由に利用できる食堂(カフェテリア式)やスーパーマーケットなどがあり、増設もされている。

以上のようにスイスは小国であるが“スイスの知恵”(ロレンツ、ストウッキ著、サイマル出版会版)といわれるように素晴らしいアイディアを生かして政治・経済・文化・教育にわたり日本には多くの示唆を与えてくれているようである。今後の日本の障害児教育にとって、大いに参考にしなければならない。

以上、訪問したヨーロッパ諸国の障害児教育の現状にふれて、主に技術教育、職業教育を中心に報告したが、今後の参考にできれば幸甚である。

日本では、義務制施行を目前に障害者の育成に取り組む関係者が、さらに決意を新にして広い視野からの改善を試み、教育界だけでなく社会の協力と連帯を求めて前進しなければならないと思う。

(岡山大学教育学部附属養護学校)



CAI 入門

B6判
価 500円
〒100

●岸俊彦監修 東芝教育技法研究会編

CAI—直訳するならコンピュータで援助する教授—となるこの教育は、アメリカでは1950年代、日本では1969年頃から研究が行なわれている。かつては想像だけにできなかった多人数教育・応個学習・教授の機械化という目標が、今やコンピュータの機能を利用して満たされつつある。本書は、その効用は勿論、可能性と将来の予測まで、平明にときあかした教育に携わるあらゆる方々の必読の書である。

東京都文京区目白台1-17-6 振替口座・東京6-90631

国土社

学習意識を高めるには

——動機づけのこと——

後 藤 豊 治

1 動機づけの基本

「動機づけ」というのは、新しい経験取得に駆り立てること、新しい行動をよびおこすこと、と考えてよい。学習指導に即していえば「学習意欲の喚起」ということになる。「有機体は学習に対して動機づけられなければならない」(マッ・コーネル)のであるし、動機づけなしに学習は成り立たない。

ところで、「学習」というのはどういうことだろうか。それは「個体が経験することによって、その行動に進歩的変容の生ずること」といえよう。このばあい、行動とは広い意味で、単なる「動作」「行為」(アクション)だけではなく、知覚・記憶・思考・反応・態度……などをさしている。また、進歩的というのは、より速く、より容易に、より正確に、より合目的に、……行動できるようになることをさしている。

だから「学習」はある意味では「新しい習慣の形成」ともいえる。つまり、はじめはムダの多い、不完全な、ギクシャクした行動様式が、ムダのない、スムーズな、統一されたものとなって、そこに習慣化した新しい行動様式が形成されることになる。われわれの日常生活行動について考えてみるとよい。はじめはギクシャクしたムダの多い行動が、なれるにしたがって(学習することによって)、しだいにムダのないスムーズな、ほとんど考えないで當めるような形になっていく。

ところが、V・ファージェもいっているように、「習慣とはおそろしいものだ。習慣とは人間が考えないでスムーズに行動できる体制をいい、日常生活のうえでわれわれに便宜を与えるものだが、同時にそれは、人間、ときには産業、さらには一国家の活動を停止させてしまうほどにもおそろしいものである。」(V・ファージェ、加藤はか訳「創造性の開発」岩波書店)ファージェは、習慣化は創造性の発展を妨げる有力な敵の1つ

だ、といっているわけだが、もっと広くいえば、習慣化は学習の展開を妨げるものだ、といいかえてもよからう。

学習は習慣化を生む。習慣化は新しい学習展開を阻む。したがって、習慣化した状況を破らない限り、新しい学習は進展しないことになる。このような矛盾の発展が学習の本質だといってもよからう。

このような習慣化=学習の停滞状況を破る力は何だろうか。それは、おどろき、疑い(問題意識)、興味、好奇心、不満、固定概念からの脱却、矛盾の自覚、……などであるといつてよい。いつか本誌でも紹介した「ワンタッチの傘と子ども」の子どもにみられるのは、旺盛な好奇心の欠如、固定概念からぬけ出られない態度であり、したがって、新しい事態での学習がなりたたないすがただと見てよからう。そしてそれが、その子における生活経験、とくに「遊び」の不足、幼時からの母親の教えこみ、反撥を知らない従順さ、などに由来しているともいえる。

これまたまえに引用したことだが、折原浩は「テスト回答能力」からぬけて「研究能力」の向上を期待しているが、それぞれの能力とはどういうことであったか、煩をいとわず、再録しておこう。「テスト回答能力」=「できるだけ多くの既成の知識を自明のこととして受入れ、記録し、狭い範囲で適用する能力」、そして、「研究能力」=「ある事柄に興味をもち、その事象にかんする既成の見解に疑問を抱き、その批判の上に自分の仮説を立て、自分でデータを集めて、仮説を1歩1歩検証してゆく、そういう努力が長期間にわたっても、ねばりよく考えぬく、というような能力」だとしている。(折原浩「現代学生の基礎経験」中央公論、'68、5月号)この論考は、学習の発展と動機づけの問題にふかふかかかわっている。

動機づけ(モチベーション)の基本構造は、つぎのよ

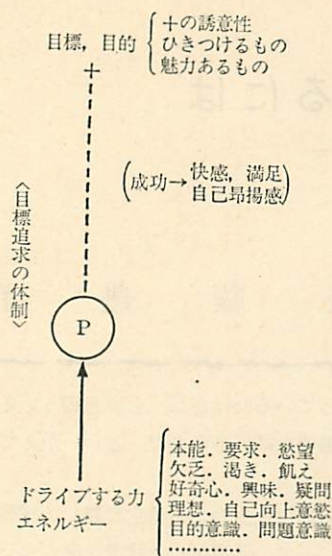


図 1

うに表現できるとおもう。

2 目的意識のこと

図1についてはあらためて説明するまでもないとおもう。要するに、目的追求体制ができあがればよいのだし、その体制にあづかる条件がのべてある。

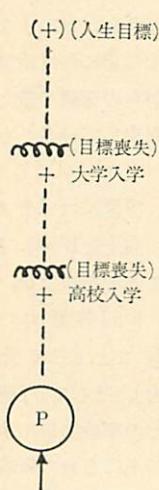


図 2

ところが、同じ目標追求体制といっても問題がないわけではない。たとえば、高校または大学に念願の入学を果してしばらくすると、いわゆる「五月病」の状態があらわれ、えたいのしれない倦怠感、無意味感などにおそわれるというのはどういうふうに説明したらよいだろう。図2を見ていただきたい。

ともかく生徒たちは、高校または大学への入学を目標にして懸命になっているのであり、そこに目標追求体制は成立しているはずである。ただ「馬車馬のように」親

の目標が見つからない状態が「五月病」の本質であり、目標喪失によって緊張がうしなわれ、五里霧中をさまよう倦怠と無意味感に見舞われる状態だとみてよからう。意義ある生涯を生み出すべくも自分をかりたてるエネルギーの欠如が生み出す状態といいかえてもよい。

3 動機づけのいろいろ

学習指導にさいして、教師はさきにのべたような動機づけの基本、つまり生徒の目標追求体制をつくることに手をかしてやらなければならないわけだが、そのために何をしたらよいか考えてみよう。

多くの配慮や仕向けが必要だが、概略あげてみるとつぎのようなことが必要だろう。レディネスへの考慮=要求と学習の時期的一致をはかること、結果に関する情報を逐一本人にしらせること、成功・失敗の経験を生かすこと、賞と罰の効用を生かすこと、競争と協同のしくみの適切な運用、諸活動への参加促進、生活経験との関連づけ、……等々だが、ここでは、そのすべてについてふれる余白はないので、1～2についてふれておこう。

ティーチング・マシンのしくみには、動機づけの重要なファクターである「結果に関する情報」と「効果の法則」がくみこまれていると思う。「学習過程の間の反応は、その結果によって修正される」から、結果がすぐ本人にわかることは学習推進のかなめである。

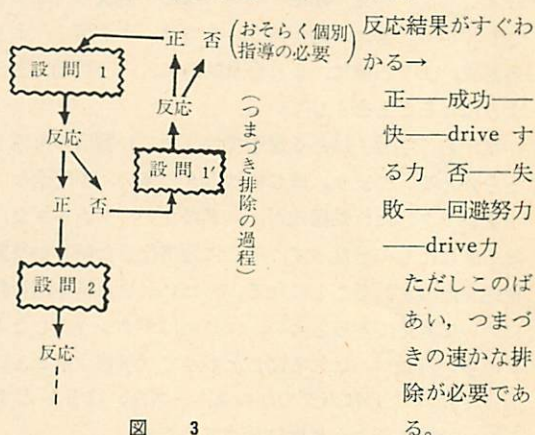


図 3

説明の余ゆうがないので、このプロセスについてそれぞれ考えていただきたい。

ティーチング・マシンに託して、「結果に関する情報」とか「効果の法則」にふれたわけだが、そのためには、スモール・ステップにプログラムすることや、おこりうべき誤りの予測などが前提として必要である。また有効な動機づけのしくみが含まれているからといって、ティーチング・マシンが万全の学習用具といっているわ

けでもない。

わたしの旧制中学時代、毎時間のおわりに5分間テストをやった教師があったが、これとてしくみは同じである。その時間に習得すべき要点についての簡単なテスト——結果の点検——次の時間冒頭に結果についてしらせる——多くの者に誤り・理解不十分さがあれば一斉指導——つぎのステップへの導入（課業）——特殊な誤りをした者への個別指導（つまづきの排除）、という操作はティーチング・マシンのばあいと変わらない。ともかく、「評価」は「動機づけ」として働かなければ無意味だ、ということを強調しておきたい。

「賞と罰」については省略したい。ただ、教師の生徒に対する賞、というより、何かの「業績に対する承認」が、生徒の「はげみ」を生むことはここにまとめておく必要がある。

課業が生徒の能力に対して重すぎる。

——失敗の連続——要求水準・自信水準の低下

——失敗の危険回避——拒否・欠席、ぬけあそび、…

こうして子どもは、失敗の危険（体面失墜）をおそれて、課業に手を出さなくなるから、課業・学校から逃げてしまうことになる。いわゆる落ちこぼれである。このようになった者を学習へ復帰させることは困難この上もない。ただひとつの、ささいなことでもその子の行動・業績についての「承認」しかないように思う。

「競争」は目標達成・成就を他と競うものであるから、学習へのdrive力として働くことはわかる。しかし学校教育の現状はまさに受験・進学競争のまっただなかにある。他人をせりおとし、自分だけぬけがけしようとする態度を出み出しやすい。すると「競争」はこれと矛盾するかにみえる「協同」と両立するようにしくまなければならないまい。本年1月4日、前文相は「競争第一主義を改め、助け合い教育の推進を」とアピールしたが、その真意がどこにあるかは詳かではない。おそらく「競争」と「協同」の両立したしくみは中国の学習小組など

に見られるだろう。集団主義教育の主張のなかにも、もっと深い意味合いで、このしくみは生きているはずだ。「参加」の効用について考えてみよう。

参加といえば社会参加ということになるが、子どものばあいは集団活動への参加、つまり遊びの参加、内発的動機にもとづく集団活動（クラブ活動など）への参加などが主となろう。だから全員制クラブ（？）などはこの範疇から外れる。なぜならそれは「内発的動機」や「主体性」に欠けているからである。参加の意義は、すでに動機づけられた場であること、その活動に興味があること、したがって自発性と主体性があること、したがってまた問題意識の発生が容易であること、これらの条件が欠けては動機づけとしての効用は期待できない。子どもにとっての何よりの参加の場は遊びの場である。すべて上記の条件を具えているからだ。子どもの生活は遊びだといわれる。遊び場の経験を欠いた子どもには動機づけの要件が欠けており、自発性・主体性、さらには問題意識や創造性発展の契機が失われており、したがって真の学習・発達が期待できないことになる。

一応、しめくくりをする段階であろう。

この図は、目標追求体制に邪魔もの・障害がはいり、

目標達成が困難になった状態（一般的にはフラストレーションという）である。

このばあい、障害を除いてやって目標達成をしやすくする（たとえば「つまづき」の排除）ことも必要だが、むしろ適切な障害を設定して、これに挑戦させ、困難を克服することによって、本人の自己昂場感を生み、さらにつづく目標へドライブすることが、動機づけの本義であり、精神衛生の要諦であるといえる。

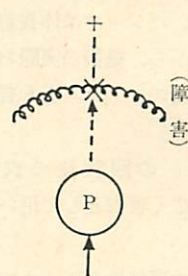


図 4

によって、本人の自己昂場感を生み、さらにつづく目標へドライブすることが、動機づけの本義であり、精神衛生の要諦であるといえる。

（国学院大学）

現代技術入門全集

全12巻 清原道寿監修
A5 箱入

各 650円

- | | |
|------------------|--------------|
| 1 製図技術入門 | 7 自動車技術入門 |
| 2 木工技術入門 | 8 電気技術入門 |
| 3 手工具技術入門 金工 I | 9 家庭電気技術入門 |
| 4 工作機械技術入門 金工 II | 10 ラジオ技術入門 |
| 5 家庭工作技術入門 | 11 テレビ技術入門 |
| 6 家庭機械技術入門 | 12 電子計算機技術入門 |

国土社

地域に根ざした男女共修による 被服学習の自主編成

畔 地 豊 美

〔解説〕

この自主編成教材は、パジャマの下衣（1年）上衣（2年）を男女共学で実践した記録です。

産教連で進めている「布加工の学習」も縫製教材としては何が最も適切なのか試行錯誤の段階です。エプロン（作業衣的なもの）、ショートパンツ等は今まで共学教材として試みられてきましたが、今回の実践記録から、パジャマもまた共学教材としての可能性がでてきたように思います。

現行教科書のブラウス・スカート・ワンピースでは、共学を推進する立場からは到底位置づけようのない教材で、それにかわるものがが必要です。パジャマは休養着として身体をおおう機能をおさえながら、縫製の実際および近年の大量生産化されている生産のシステムをも普遍的にとらえることができるでしょう。

元来パジャマはインド・ペルシャの回教徒の衣服（Pajamas）であったものが、今日広く寝衣として用いられるようになったものです。

今後の共学の教材として実践化の可能性をふくめて紹介した次第です。ご意見をお待ちしています。（坂本典子）

I はじめに

家庭生活は男女の共存で成立しているが、真の男女の協力による理想的な家庭生活が営まれているであろうか。どんなに忙しくても、家庭の仕事は女がするものだという固定的観念が現在まだ根強く残っており、その反面女性の就労が多くなった現状では、家事労働は婦人

に大きな負担となっている。したがって家庭生活においては、家庭構成員のそれぞれが家族の一員として、家事労働認識を深め、積極的参加の要請が強まってきている。憲法が個人の尊重、男女平等、労働の権利などを保障している以上、家庭科教育もその精神に支えられているものでなくてはならない。男女を問わず人間として生きていくための必要なことがらをしっかり身につけさせ、持っている可能性を最大限に伸ばす教育の機会均等を与えるべきではなからうか。このことは家庭生活者としての自覚や正しい協力のあり方や方法について判断でき、行動する人間育成となるのではないか。また、就労している女性の労働力を正當に評価されず、低賃金やパートのような労働力として利用されるなどの男女差別解消や婦人解放の1つの方策としても家庭科の共修は絶対必要と思われる。

東国東郡公立中学校8校は、サークル長を中心として、家庭科全教員が協力しながら共修の突破口を開き、今日までに具体的な取り組みをしてきた。まず父母の共学に対する「賛成可否か」の実態調査をし70%の支持を受け、共修に踏み切り、6年間の歩みの中では1・2年生の全面共修の実施をみ、衣領域における、特に製作教材においては取り組む前に、相当の抵抗があるものと危惧してきたことも実践してみて、生徒男女共に喜びも大きく、父母の変容もみられるようになり、男女共修の効果に明るい見通しがあることを確信した。

II 被服学習についての実態調査とその考察

◎被服学習が必要な理由（1）（男子生徒に）

理 由	要求された内容	理 由 の 例（母のことばより）
1. 衣・食・住は家庭生活の3大要素なので、男女を問わず必要である。	○初歩的・一般的基礎知識、技能をうけさせたい。	△男女平等の精神を養い、協力しあって、よい家庭生活を築くためのエネルギーとなる。 △男の子も、父も買い物をする事が多い。商品等に対する知識も中学時代に

	・衣服の役割 ・着かた、選び方 ・しまい方(整理) ・せんい	ぜひ学習させてほしい。 △生活のため、何でも知っていることは大切だ。 △男であれ、女であれ、自分の身のまわりのことができれば、何事も不自由しない。 △毎日身につけるものであるから、簡単なことができると便利である。 △男子は、製作は別として、他面での教養を身につけさせたい。毎日着ているものだから。
2. 子どもの将来に役立つから必要である。 (自分の身のまわりを整理できるような)	・つくろい ・ボタン・ホック ・つけ ・せんたく ・ミシンの使い方	△独立した場合、身のまわりのことが自分でやれるように。 △今後、家庭生活は夫の仕事、妻の仕事と分担してしまうのではなく、夫婦協力して家庭を築く心構えが大切である。 △親元を離れて下宿した場合、また共働きの多い今日、男子にも大いに必要。 △長い人生には、どんなことに(妻の病氣、死別)直面するかわからない。
3. 物を大切にすゝる気持を養うため必要である。	・衣服公害 ・改善点 ・家庭経済 ・感謝の気持	△今の子どもは、昔を知らない。ただかっこよさや、美しいものを着たがる。 働く時、つぎはぎ着てもよい。清潔なものならよいという気持をもたせたい。 △お金ですべて解決することには、夢も希望もわかない。 △製作やしぐみの理解により物の大切さを知らせたい。 △使い捨てる習慣をやめて、もっと物を大切にすゝる心をもたせたい。
4. 流行に追われる服装をみなおさせたい。		△生活の向上と共に衣生活も発展し将来も流行が生まれるであろうが、その場で自分の立場に適した衣生活が考えられるように学習させてほしい。

◎被服学習が必要な理由(2) (女子生徒に)

理 由	要求された内容	理 由 の 例 (母のことばより)
1. 衣生活は生活の3要素の1つであるから必要である。	○基礎的知識、技術と応用力、工夫力をつけさせたい。	△衣生活は、生活の3要素の1つでもあるくらい、衣の示す役割は大きい。
2. 将来役立つから必要である。 (主婦となるため、女性であるから)	・衣服の目的 ・着方、えらび方 ・整理、管理 ・せんい ・ミシンの使い方 ・更生 ・子ども服 ・ふだん着の製作	△女性である以上基礎的技術は身につけさせたい。 △主婦となるためにも、女らしさを身につけるためにも必要である。 △おしゃれに関心をもつ年ごろなので、中学生らしい服装はどうあればよいのか、考えさせてほしい。 △将来主婦となった時に手造りのものを家族に着せる楽しみや、喜びを味わせたい。 △嫁にいった時、知っていないと因る。 △家計のたしになる作る、着る、着せるの基礎を学ばせたい。 △女性として、何でもぬえるようになってほしい。
3. 製作の楽しさ、労働の苦労がわかり、物を大切にすゝる心が養える。	・被服公害 ・家庭経済 ・感謝の気持	△何でも買える時代であるが、何でもぬえる楽しさ、くふうする力が必要である。 △基礎的学習と共に更正・工夫・応用の力をつけさせ、手造りのものを作る楽しさを味わせたい。また、物を大切にすゝる心をつくってほしい。 △製作・更正ができれば、作る楽しみもあり、経費の節約にもなる。 △与えられたものを着用させるだけでなく、自分にあったものの選び方、管理・製作について学習させてほしい。
4. 流行にとらわれることなく、正しい衣生活ができるため必要である。		△将来も流行はかわるであろうが、自分にあった服装をするため、基礎をみっちり知り、応用をきかせたいものである。 △既製品が出回っているだけに、正しい被服学習が必要である。 △既製品が多くあるが、体に合わないことが多いので、選び方・手直し・活用が必要。

◎被服学習が必要でない理由

A 男子生徒の親

- (1) 男だから必要ない。将来被服製作をすることもないだろう。
- (2) 男子は専門家になる以外、製作などないと思う。女性でさえ、それぞれの仕事に入り、自分の服を製作する暇もない人が多い。
- (3) 既製品で間にあうので、そうまでやらなくてもよい。それより他の分野に精出してほしい。
- (4) 衣服学習はしてもよいが、製作の必要はない。

B 女子生徒の親

- (1) どんなものでも、既製品がたくさんあるから必要ない。
- (2) 技術を身につけても実用化することができない。若い時は必要に感じても、家事に追われてしなくなる。

◎ 考 察

- (1) 男女とも、被服学習に対する必要な理由として、言いあらわし方に違いはあるが、大別次のとおりである。

- ① 衣生活は生活の3要素の1つである。男女を問わず必要である。
- ② 将来のために役立つから必要。
- ③ 物を大切にすることを養うため必要。(製作の喜び、製作の苦労より)
- ④ 流行に追われず、正しい衣生活をさせたい。

また、内容としては、男女共基礎的知識・技能の習得を希望している。

ただ、将来のための理由が

・男子では

- ・自分の身のまわりのことができるよう
- ・夫婦協力の立場から
- ・ひとりで生活する場合に困る

と軽いのに対して

・女子では

- ・家庭に入って主婦となった場合
- ・家庭のために必要
- ・女性として、女性であるから

というように要求度が大きい。

しかし、全般的に必要と答えたものが100%に近いことは、時代の進展に即し、わたくしたちの意図しているところを大きく裏づけていることを示したもので、力強く思った。

- (2) 必要でない理由は、最もだと思われるようにあるが、その理由が製作に限られていたりして、被服学

習を製作のみの狭い分野に考えているものと思う。内容がわかれば全員この学習の意図を理解すると思う。

- (3) 内容としては、男女共基礎的なものとしているが

・男子では

初歩的なもの、一般的なもの、身のまわりの簡単なことで大きく要求していない。

・女子では

初歩的なことに加えて、更生、くふう、応用、製作(手づくり)ということばが多くみられた。

- (4) 心の問題として、労働、製作の喜びを味あわせ、物を大切にすることを養ってほしいということが多くみられたのは、今の使い捨て時代への反省や父母の大きな要求であると思う。また流行へ流され、浪費することへの親たちの関心も、学習指導の上で見逃すことができないと思う。

III 技術・家庭科年間計画 (51年度 安岐中学校)

第1学年

(技術)

製図——20時間

立体のあらわし方

製図用具の使い方

製作図のかき方

木材加工——20時間

設計

製作

金属加工——13時間

設計

製作

(家庭)

被服——30時間

衣服のはたらき

わたくしたちの衣服

衣服材料(繊維)

衣服の構成

パジャマ下衣の製作

衣服と生活

食物——22時間

わたくしたちの食物

日常食の調理

わたくしたちの食生活

○共修するためには、「この子たちに何をこそ学ばさなければならぬか。」をはっきりさせ、思い切った内容の精選をしなくてはならない。

○技術分野は男教師、家庭科分野は女教師が指導する。

○授業はクラス単位で行う。単元により、また区切りのよいところで随時交替する。(事前に話し合っておく)

第2学年

(技術)

木工——16時間

角材(木)製品の製作

(折りたたみ腰掛の製作)

(家庭)

住居——10時間

望ましいすまい

住空間とそのはたらき

金工———16時間	問取図のよみかた	○電気を3年にまわし、内燃機関を2年におろす。			
棒材（金）製品の製作	文具と生活				
（ボルト、ナット、厚板金）	被服———26時間	第3学年			
	布地の特徴と衣服整理	（技術）		（家庭）	
機械———20時間	パジャマ上衣の製作	機械（原動機）15時間。食物（幼児・老人、食生活の改善）15時間を共修とし、他は別修とする。			
動く模型の製作	食物———17時間	（技術）		（家庭）	
機械の整備	成人の食物	電気（強電）	18時間	保育	10時間
内燃機関	貯蔵食品と加工食品	電気（弱電）	15時間	電気	8時間
	食品添加物と食品公害	栽培（食）	4時間	被服	20時間
	調理実習				

IV 授業実践と反省

(A) 1年被服学習指導案（男女共修） 安岐中学校

1 題材 わたくしたちの衣服

2 目標

- (1) 被服の歴史的な背景をふまえながら、被服の着目的や変遷について理解させ、日常着の学習をとおして、身のまわりの衣服に関心をもたせ、機能に応じた正しい着方ができるようにする。
- (2) 繊維や織り方について調べ布地の特性に応じた正しい扱いができるようにすると共に、衣料公害についての理解と関心を深める。
- (3) パジャマのズボンを製作することにより衣服の構成を理解させ、基礎的な縫製技術を身につけさせ、生活に活用する能力や態度を養う。

3 指導の立場

- (1) 1年生の被服学習では、男女とも日常多く着用している日常着から発展し、自分の身につけている被服に関心をもたせ、上下衣の構成をとおして被服のしくみや役割を理解させたい。また消費ムードにまきこまれるのではなく、自分が主体となって目的や機能に合った健康的で正しいみなののできる子どもをめざしている。
- (2) 本校の生徒は男女とも協力的で父母の衣服学習に対する要望もあり（アンケートによる）生徒の製作に対する意欲も大きい。
- (3) 製作にあたっては衣服構成に関連して製作の容易であると思われるパジャマのズボンを作らせることにより、ごく基本的な技術を身につけさせさらに、くふう・創造・協力の態度や完成のよろこびを味あわせたい。

4 指導計画——30時間扱い

- (1) 被服のはたらき……………2時間
- (2) 活動的な日常着……………3
- (3) 被服材料と衣料公害……………5
- (4) 衣服の構成……………2 ……本時
- (5) 下衣の製作……………17
- (6) 被服と生活……………1

本時案

1 題目 衣服の構成

2 主眼 紙を体に当てて型紙を作ったり、分解した学生服を構成することにより、衣服の構成と機能性を理解させる。

3 展開

学 習 活 動	指 導	時 間	資 料
1 自分の着ている服で縫い合わされている部分をみつける	1 生徒の気づいたことについて板書していきながら学習意欲を高め本時の学習目標をしらせる。	10分	
2 上体にまつ葉紙をはりあわせる (グループ)	2 上衣の構成には衿ぐり袖ぐりが必要であることを理解させる。	25	まつ葉紙 セロテープ はさみ マジック
3 日常着の開きについて考える	3 前あきでない服にはどんなものがあるか考えさせいろいろな着方のあることに気づかせる。		あきの実物 見本
4 上衣の型と名称を知る	4 上衣を構成している型と名称をテキストに記入させる。		
5 分解した上衣の学生服(男子用 女子用)を構成する	5 男女別に人体に着せて構成させる構成のしかたのわからないときは自分の着用している服をみながら構成させる。	10	分解した学生服 (上衣)
6 型紙と学生服・男子と女子の学生服の型のちがいについて話し合う	6 まつ葉紙で作った型紙と分解した学生服、男女の学生服を比べて、異っている部分に気づかせ、その理由についても考えさせる。 (例)・後身ごろ (女子用1枚 男子用2枚) ・そで (女子用1枚 男子用2枚)	15	
7 分解した下衣の学生服を構成し、 型について調べる。(スカート・ズボン)	7 スカートとズボンの機能性や形の美しさ、上衣との組み合わせの関係などに気づかせる。 自分の学生服とてらし合わせながら分解した型と機能性を動作を通して理解させる。 ・スカートのひだ ・ズボンのまた上の前後のくりの深さのちがい等	20	分解した学生服 (下衣)
8 次時予告を聞く	8 テキストのまとめをし、次時は採寸をすることを知らせる。	10	

(B) 衣服学習の反省(教師)

・衣服学習に対する興味と関心は、男女共に非常に強く、意欲的に取り組み楽しい授業で学習効果も上がったと思う。

・衣服構成においては、紙を体にあてて型紙を作ったり、分解したものを組み立てたりしたことが、理解する上で効果を上げた。

・繊維についての学習は実験を伴った授業をした。よく理解し、身のまわりの繊維について一層の関心を深めたように思われる。

・衣服製作上の技術面で男女の差はないように思われた。差があるとするならば、それは性格や家庭の育て方の影響によると思われる。男女共にデザインの工夫、布の購入、縫い方の工夫など意欲的な取り組みがみられた。またグループ学習による学習形態が功を奏し、生徒相互の協力や助け合いが見られ能率的であった。

・衣服学習の内容は、技術主義にならないように健康な生活をするための基本的知識を主とし、技術面は生きるための日常生活の場で、自分の身のまわりの処理が出来ることを目的とした。この目標は達成できたと思われる。

・共学した場合、授業時間が半減するので、衣服学習では1年は、日常着と下衣の製作、2年で上衣の製作と衣服整理が限度だと思われるし、これだけおさえれば中学校ではよいのではなからうと思う。

・衣服学習に対する生徒や父母の反応は、大変よろこばれている。実習作品については使用度100%である。男子が針を持ったり縫ったりしている様子を見ると、かわいそうだと言う人がままあるが、私たちの実践を通して、それは歴史的偏見であることを実証した。

(C) パジャマ製作の生徒や父母の感想

久保 友成(1年)

はじめて、まとまったものを作りましたが、案外おもしろいものでした。始めはミシンで失敗しましたが、だんだん慣れてきました。しかし、アイロンがけで縫代の布を少しこがしたことは大失敗でした。アイロンの目もりを見なかったことが僕のうかつでした。しかし、その失敗も役に立ち、2度とはしませんでした。でも、出来上ったときの気持ちは大変うれしいものでした。

——お家の人より——

パジャマのズボンを作るんだ！と、布を買いに行くときから張り切っていましたが、私としては、いささか心配でした。でも出来上ったのを見て、びっくりしました。パンタロン式で格好よく、すそわきには、イニシャルのアップリケを入れ、すごく御満悦な顔をして着ています。家中の者が「よく作ってるナァ、買ったのよりずっとかっこいいぞ」などとほめてやっていました。学校でミシンを習いはじめてから、剣道着の袴のほころびを自分で縫ったり、くつ下の穴のあいた部分を私の知らぬ間に縫っていたりするようになりました。自分にも出来るという自信と、よろこびの現われでしょう。とてもよい傾向だと思ってよろこんでおります。(母)

小野 隆宏(1年)

僕は、みんなの2倍も3倍もやった。それは失敗したからだ。同じ柄の友人の布と間違えて一緒に縫ったり、縫い方を間違えたりした。このようなことは僕だけではないと思う。時どき「ああ失敗した。」と残念そうな声が耳にはいるときがある。しかし、このような失敗をするたびに自分自身で勉強になっていくと思う。だから全く失敗せずに作り上げた人よりも失敗を重ねて作り上げた人の方が再び失敗をくり返さないよう物事をよく考えるようになるだろうし、出来上ったときの喜びも、苦労しただけに大きいのではないと思う。使用した布地、サッカー、綿100%、縫いよくアイロンかけも丈夫、さっぱりした肌ざわりで着心地がよい。

——お家の人より——

男の子の作成では上出来と考える。物事はその事に真剣に取り組むかどうかが問題であり、その結果を論ずるべきではない。(父)

女子と同じ家庭科の授業を受けることは大変よいと思います。自分のことは自分で出来るということは大切なことですし、きっと将来役に立つことになると思います。(母)

(D) 技術家庭科の男女共修を終えて

川野 裕市(2年1組)

結論をいいますと、やりがいがあったとても楽しく共修をして良かったと思います。男子の場合、衣服を作るとき「こういうことは、女がすればいい。」と思ったに違いありません。慣れないミシンや針を使うとき、いやだったと思います。でもやっているうちに、おもしろくなって皆んなは熱心に取り組み、すばらしい作品が出来上っていました。自分の手でパジャマの下衣を作ったという経験が、ちょっとしたつくろいも出来るという自信になったと思います。ただ学校で学習したと言うことだけでなく、日常生活の中に大いに活用できて便利だと思います。また、女子の場合、製図や木材加工がありましたが「したくない」と言う気持はなかったと思います。はじめは、いやだったかも知れませんが、男子が手伝ってくれたり、協力したので立派な作品が出来ていました。誰だってやる気になれば何でも出来るんだ。という気になったと同時に、うれしさも他の時と違ったものだったと思います。このように男女共修の利点は、女子ができないことを男子が手伝い、男子ができないことを女子が教えてあげた。というように男女の協力性ができたと思います。また、広い立場から学習が出来たので楽しかったと思います。それに将来きっと役に立つときがくるであろうし、役立てなくてはならないと思います。

これは昨年の技術・家庭科学習をふりかえっての僕の感想です。

(大分県東国東郡安岐中学校)

質 問 コ ー ナ ー

〔質問〕

乾電池のボルトを増幅装置で高いボルトに高めることはできないのでしょうか。

増幅とはどういうことでしょうか。教科書などでは、小さい電流や電圧を拡大するとか、大きくすることが増

幅であるような説明がされています。これから考えると、1.5ボルトの乾電池1個をもとに使い、10ボルトなり、100ボルトなりに増幅できてもよさそうに思います。乾電池の電圧を増幅して、高い電圧をつくり出すような増幅装置もあるのでしょうか。(東京T)

〔答え〕

乾電池の電圧や発電所の電力を増幅できる装置があれば大変便利ですが、そのような装置はありません。ありませんということは、そうした装置をつくることができないということではありません。そうした装置をつくることはできます。しかしつくっても、経済的に意味をなさないということです。という意味は、1.5ボルトの乾電池を10倍の15ボルトにするのに、1.5ボルトの乾電池を10本直列につないで15ボルトにするより経済的に費用が高くなる増幅器になってしまうから、そうした装置をつくっても、現実の経済社会では受け入れられないということなのです。

増幅のからくりはどうなっているかを考えてみましょう。簡単にとらえれば、質問者も示しているように、小さな電流や電圧、あるいは電力を大きくするといふあらわしてよいでしょう。しかし、その増幅のからくりをもう少しつきつめてとらえると、入力としての小さな電流や電圧そのものを大きくするととらえると、増幅の本質的からくりと違った理解をもってしまう恐れがあります。

たとえば、校庭や放送室などで、マイクロホン 앞에서しゃべると、マイクロホンは一種の発電機であるから、しゃべったときの空気振動に応じた、電流なり電圧をマイクロホンから出力として取り出すことができます。取り出された電圧や電流が増幅回路に加えられ、それがそのまま大きくなるわけではありません。自分がクリーニング屋さんに出したワイシャツは、自分が出したものがきれいになって自分のところにもどってきます。しかし増幅という現象はこうしたこととは少々そのからくりが違います。どのように違うかをたとえ話で示すならば、洋服が小さいので、寸法を大きくしてほしい場合を例にしてみましょう。この場合、寸法を大きくするのに洋服屋さんは、おそらく2つの方法を考えることでしょう。

その1つは、客から渡された洋服をたしかめ、一部ぬいあわせをしないでおすだけで寸法を大きくできるかを考えるでしょう。もう1つは、別の布を使って同じ形の洋服を客から渡されたものより少し大きい寸法にしてつくり変えることを考えるでしょう。後者の場合、客から渡された洋服と同じ生地で、同じ形につくれば、受けとった客は、自分が渡した洋服そのものが手直しされ、大きな寸法になって戻されてきたと思うでしょう。他の布地で大きくつくり直されたとは、当のお客は思わないであろう。

増幅のからくりは、後者の寸法直しと同じような方法で小さい電流や電圧を大きくしているのです。大きくするには入力として入ってきた電流や電圧（客からの洋服）そのものを直接大きくするのでなく、どうしても他の布地（電流なり電圧）を用いなければならないのです。たとえば、ステレオなどのアンプで出力が30ワットとか60ワットとかがあります。この場合、チューナなりレコードプレーヤーから送られてきた微小な電力がパワートランジスタで30ワットや60ワットに自己増殖的に大きくなるわけではありません。30ワットなり60ワットのもととは別の生地、つまり電源から送られてくるのです。したがって、電源部はその増幅器で要求される30ワットなり60ワットの電力を供給できるだけの十分な能力をもっていなければならないわけです。十分な能力という意味は、増幅器の回路内でのロスもありますので、その分を考えて本来の機能を発揮できるだけの電力の供給が可能な電源部でなければならないということです。

他の生地を使って洋服の寸法を大きくするのと同じからくりで増幅作用がおこなわれます。こうしたことを考えると電池の電圧を高めるのに経済的に採算があう増幅装置をつくれなことがおわかりいただけることと思います。（ご質問はハガキで、本誌編集部あてお気軽にお寄せください。）

〔質問〕

布の地直しは必要か——地直しをする理由と方法——
被服製作において、布を裁つ前に、「布目のゆがみを正したり、しわをのばすために、アイロンをかけて地直しをする。」とあります。最近の布は防縮加工してあるし、ゆがみのはげしいものは、地直しするのに手間がかかります。生徒にはどの程度やらせたらよいでしょうか。

〈答え〉

・地直しをする理由と地の目線

布は、紙などと異なり布地ののびちぢみが大きいのが特徴です。スカートやワンピースを着用した場合、すその方に重さがかかるため、地の目がまっすぐとおっていないと型くずれがしやすくなります。

布を織る所は、まず、たて糸をまっすぐピンと張ります。次に横糸をたて糸の間をとおって織ります。そのため、たて糸はかなりの張力でひっぱられまっすぐなのに比べ、よこ糸は、張っぱりも弱く、まがる可能性も大きいわけです。（スカートなどのたてを布のたてにして裁つのも以上のような理由によります。このことは、被服

製作をする前に布を織ることを授業でとりあげて実習した子供にはとてもよく理解できるようです。)このように、地直しは、布地を整理し、曲っている糸をまっすぐにし、たて糸とよこ糸を直角に交叉させ、伸びている繊維を締め、地の目を正しく直して、縫製後でも衣服に狂いがないようにするために、衣服を製作する前に欠くことのできない工程の1つといって良いと思います。

・子供にどの程度までやらせるか

しかし、アイロンをかけて地直しをするのは、おとなでもなかなかうまくいかないようですし、かなりまがった布の地直しはどうて子供にはやれないようです。何人かの教師にどのようにしているかを聞いてみましたが、地直しをきちんとやらせるのはむずかしい、という意見が多いようです。私は、地直しに手間をかけるより、まず、地の目線の大変なことを、布を織ることや、からだにあわせて型紙をつくることを通して教えたいので、なるだけ、地の目のまがってない布を買ってくるように指導します。そして、しわをのばす必要のあるものに限ってアイロンをかけさせています。

最近の布は防縮加工がほとんどおこなわれていますので、一部のデニムなどを除いては、水の中に浸してあらかじめ繊維を縮める必要もないようです。縮むかどうかわからないときは20cm四方の布地を正確にはかり、試してみても変化をみて判断する方法をとっています。

・地直しの方法

参考に、一般的なもめんの地直しの方法は次のとおりです。

まず水の中に20分位浸したあと日陰干しにして乾します。次に右図のように、はさみで10~15cm位の間隔で切りこみを入れ、ひきわを伸ばし、アイロンをかけます。最近の防縮加工してある布は、水に浸さなくても、霧を充分にかけ、しばらくしてから、アイロンをかけるという方法でも良いようです。

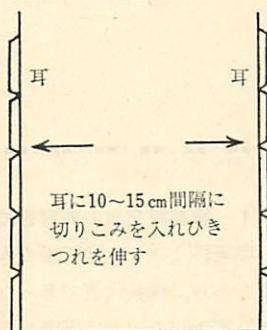


図1

(三鷹市立第1中学校)

授業に産教連編「自主テキスト」を！

「製図の学習」

子どもが図面をかき、読む能力をしっかりと身につけることができるように編集してある。

「機械の学習」

2年の機械学習のテキスト、男女共通に使える。

「電気(1)の学習」

2年生または3年生の男女共通用テキスト、電気の技術史、電磁気の系統を柱に、回路、測定、電磁石、動力、電熱、電動機、照明などを系統的に解説する。

「電気(2)の学習」トランジスタ・電波編

半導体やトランジスタの原理をやさしく解説。基本的な回路構成を追求、さらに電波とは何か、どんな性質があるか、検波、同調、増幅回路について解説。

「技術史の学習」

「なぜ技術史を学ぶか」などのほかに鉄、ミシン、旋盤、トランジスタ、電気などいくつかの教材の歴史をまとめている。

「加工の学習」

加工学習の基本となる教材や工具、機械などについて、学習できるような内容を示した。

「栽培の学習」

農業技術の基本を教える立場から栽培学習を捉える。

「布加工の学習」

繊維のなりたちと特性、加工法、洗剤、染色、布と被服の歴史についてふれている。

「食物の学習」

植物、動物の生長、栄養学、調理器具、植物性食品、動物性食品など栄養学的、食品加工的に解説してある。実験、実習も系統的に男女共通で無理なく学習できる。

「自主テキストによる問題例集」

産教連編の自主テキストに基づいて作られた問題集。

○各冊200円(問題集は300円)

○産教連会員、生徒用は割引価格で売ります。

○代金、後払い可。申し込みは下記事務局まで。

東京都葛飾区青戸6-19-27 向山玉雄方

産業教育研究連盟事務局 〒125

研究活動に対する反応

1949～1950年前半まで

清 原 道 寿

1 職業科文庫の内容をめぐる

職業科文庫「化学工場の人たち」が発行されて2か月ほどのち、編集代表であった筆者の宅へ訪問者があった。第1回のときは筆者が不在のため、後日を約して帰ったという。その名詞には「昭和電工KK 労務課 ○○」となっていた。当日、中年の課員が1人であらわれた。はじめから、威だけ高なポーズをとって筆者の書斎に通じ、坐るなり、「あなたが代表者になっている“化学工場の人たち”という本は、内容にまちがいがあり、当社としては迷惑している。告訴したいとさえ考えている」と一気にしゃべり出した。当方もはじめあっけにとられたが、書棚から「化学工場の人たち」をとりだした。

会社側の言によると、当社では数年前に爆発事故があったが、それ以降、安全に注意して、こんどは爆発などありえないのに、本の中では、また爆発がおこるのかのような無気味さがあるかのように書かれている。それは事実と反するし、これを読んだ青少年は、当社が危険な工場と思いこんで応募しなくなる。当社としては全く迷惑なことであり、事実と反するので告訴するかもしれないという主張であった。

それです、本の内容でどこが迷惑なのかを検討することにした。そのとき、会社側が指摘した箇所をあげてみる。

「(アンモニア合成工場にて)……このパイプには、水素や窒素が通っているのだが、化学薬品のためにパイプが長もちしない。しかもちょっとしたネジのゆるみからさえ、大惨事を起すことがあるんだ。この間も、直径10センチメートルくらいの水素パイプの爆発から、数千万円の損害と、十数人の人命を、ぎせいにしてしまった。ここで働く人たちは、その日その日が命がけだよ」

それをきいていると、ぼくの体中が、ぞくぞくと寒気

がしてきた。

「そのような危険を防ぐ方法はないのですか。」

「それは、うちの労働組合でも、災害防止について働く者の立場から、いろいろと要求もしているが、会社側では、資材がないとか経営が赤字だとかいって、なかなか設備の改善をあとまわしにするのさ、労働者が安全に働ける設備があつてこそ、生産復興も赤字の解消もできると思うけれど、われわれ働く者と会社側とは、考え方がちがうのだよ」

ぼくには、会社側がなぜ災害の起るまで設備の改善をほっておくのか、その理由がよくわからなかった。……最近起った爆発を工員たちは身にしみておそれている。硫酸工場の装置は、6～10年たつと、すっかり大修理しなければならないのだが、現在の装置は、それが十分にされていない。増産増産のかけ声のもとに、老朽施設にむちうって使いすぎたのが、こんどの惨事の原因になっている。尊い人命を犠牲にすることを考えたら、資



写真1

材がまにあわないとか、経営が赤字だからといったことは理由にならないはずだ。……この問題を解決するには、組合長の山川さんが「硫安工場の特異性にあって、働く者の幸福を獲得する」と言ったように、組合の力以外にはないにちがいない。……

以上のような内容について、事実と反する点を具体的に指摘するように求めると、ただもうこんごは爆発は起ることはないというだけで、何らの理由も根拠もあげなかった。会社として抗議したい点や告訴したいというならば、課長なり部長なりが正式に文書を持参してもらえば、職業教育研究会としてもそれに相応して対応するからといって、労務課員に帰ってもらった。その後何の音沙汰もなかったが、この昭和電工では、これから2年ほどのちにまた爆発事故が新聞で報ぜられたのである。

2 図解職業科実習書の内容をめぐる

前号でのべたように、職業科文庫の別冊として上下2冊を発行（S・24・4）した。これは当時の職業科教師の要求にマッチするところであったため、好評のうちにかなりの部数が売れ再版するにいたった。この内容は、検定教科書「職業」の実習面を補う意味で、構成され、トライアウトとしての領域として「事務」（とうしゃ印刷）、「製図」（製図用具、平面幾何画法、投影図法、スケッチ、ポスタの製作）、「栽培」（野菜）、「飼育」（ウサギ・ニワトリ）、「電気」（電気用具の取扱い、電気スタンド・鉱石ラジオの製作）、「機械」（自転車・トケイの修理）、「手技」（木工、塗装、金工——板金・鍛造）、「家庭」（裁縫、あみもの、洗たく、調理、救急）をとり

あげていた。これらの領域は、文部省が通達（S・24・5）として中学校に指示した領域（この領域は、S24・12月に出る職業・家庭科学習指導要領大綱にうけつがれる）にかなり近いものであったため、再版するまでにいたったのであろう。

しかし、内容についていえば、当時の職業教育研究会には、栽培・飼育の実践的研究者が少なく、しかも急いで執筆編集して出版するため、1教師に原稿執筆を依頼した。ところが、原稿の図および文章が、他著者の栽培・飼育書から剽窃したものであったことが、あとになって、読者からの指摘でわかった。さいわいにして著者からの抗議がなかったが、編集代表者としての筆者の第一の失敗である。これにこりて、以降、編集する場合には、どのような人の原稿も、すべて疑ってかかる。とくに現場教師の原稿で、著作物になるものは、必ず疑ってかかるという筆者の編集態度が確立したのである。

3 検定教科書「職業」の内容をめぐる

前述したように、「職業」は昭和25年4月から検定教科書として使われはじめた。1～3年間あわせて、72万冊が全国の中学校で採択されたのである。したがって出版社光書房（のちの立川図書）から印税の一部が、教科書研究協議会の事務局長石田宇三郎にも支払われ、それが未払いとなっていた、画稿料に充当されたはずである。原稿料については、残りの印税から薄謝ながら職業教育研究会の手を通じて支払いが行なわれた。なお、職業教育研究会関係者が受けとるべき稿料・編集料は、研究会活動の基金とすることにした。

「職業」の内容については、中学校からは全くクレームがなかった。しかし、産業界からは、いくつかクレームがつけられた。その中で、郵便局の特定局制度にたいするクレームは、編集者としても放っておけないものであった。

教科書の原稿作成にあたって、特定郵便局制度については、各地の郵便局の実情を、そこで働く人々を通じて調べ、その歴史と現状の実態を叙述することにした。つぎに、教科書の内容を要約する。「……（特定局制度で）いちばん問題になっていることは、世襲制度と、給料の安いこと……特定局という制度は1871年に、国家の財政状態が非常にわるかったので、地方の財産家や、有力者に「局長」という、ひとつの名誉職をあたえて、国家の郵便事業のふたんを、かるくするためにできたもの……（世襲制度は）局長の地位は局長の子がひきついでいくか、他人を局長にするばあいでも、局長の自由な考



写真2

えて、任用する……労働組合では、この制度をなくそうとして、交渉をつづけている。……局長の中には、国家からくるお金で机などをかうために、局員にはらうべき給料をなるべく安くした人もあったそうです。1931年からは、局長の給料は、直接国家からくるようになったので、そのようなことは、すくなくなったようです。それでも普通局より安いということ……（局長の特典は）局長手当として国家からくるなかに、「局舎料」（局の建て物を政府にかした料金）と、きって・はがき・収入印紙などを売った金額の、25%にあたるお金が、局長の収入となっている……（特定局では）昇進は三級官にはなれるが、欠員が少いから昇進は困難だ……」

以上のように、特定局制度について、かなりくわしく叙述し、これには、編集協力者高橋重夫が千葉県のいくつかの地区の特定局を調査し、その調査にもとづいてかかれたものであった。この叙述に対して、特定郵便局長連合会のK会長から、特定郵便局についての偏見にみちた叙述だとして抗議がよせられた。しかし、当方においても、具体的な調査結果によって叙述したことであるので、簡単に訂正を約束することができなかった。調査場所や調査事実によって抗議に答えるほかに、ついには、連合会からきてもらって話しあって、当方の主張を通すことができた。

4 平凡社版「職業科事典 第2巻 実習篇」をめぐる

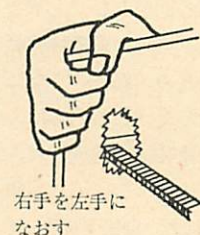
平凡社版「職業科事典」第2巻の執筆・編集は、昭和24年から昭和25年前半期にかけて、職業教育研究会が手がけた研究活動の大きな成果のひとつである。

この第2巻実習篇の責任編集者宮原誠一・海後宗臣の両氏は、最初、実習篇の内容執筆を、文部省の職業科担当の事務官にもとめた。しかし、打合せ会に参加した農業担当の島田喜知治事務官と工業担当の長谷川淳事務官との感情的対立の論争に、平凡社の編集者たちがおそれ、文部省事務官たちによる執筆を中止することになった。そして宮原誠一を通じて筆者へ要請があり、職業教育研究会が全面的に協力することになった。のちに、職業教育研究会の有力なメンバーになった、中村邦男（世田谷区砧中学校）、鈴木寿雄（目黒区第6中学校）は、この執筆を通じて研究会へ参加してきたのである。

実習篇でとりあげた内容は、文部省が通達としてしめた、学習指導要領大綱（昭和24・12）により、その中で、調理・保育・看護などの分野を削除したものであ

た。各分野については、「必要な基礎的技術」「実習の目的・方法・指導の要点」「評価の要点」で内容を構成した。とくに、基礎的技術をどうとらえるかは、執筆にあたって、研究会で討議がくりかえされた。この討議を通じて、職業教育研究会の「基礎的技術」論が深められていく端緒となったといえる。さらにまた、基礎的技術の検討に付随して、評価の要点が明らかにされた。この実習篇でとりあげられた、とくに工業的内容の「基礎的技術」および「評価の要点」は、こののち長く、職業科教育の実際に影響を与えたのである。

さらに、工業的内容は、昭和25年9月からはじまる職業・家庭科の検定教科書にも大きく影響を与えた。影響を与えたというよりも、全くそのまま模倣されたといえる。とくに「傑作」なのは、実習篇内の誤植のみならず、図1に示すような、図の誤りさえ模倣した検定教科書が出るしまつであった。



右手を左手に
なおす

左図1は、職業科事典実習篇のp.165に掲載の図である。電気スタンドの台の工作である。この執筆者鈴木寿雄は左ききであるため、右手で台をにぎり左手でやすりがけをする図を写生したため、「右手を左手になおす」と注意事項をかいた。平凡社の編集者は、そのまま図版にしてしまった。

図1 職業科事典から

職業・家庭科の検定教科書のいくつか、実習篇の図版・文章の剽窃があまり多いので、平凡社の編集部申し、版権侵害として出版社へ抗議することを提案した。それに対して、編集部は、これまでのわが社の事典でも、あちこちの著作から借用しているので、とくに版権侵害として荒だてたくないとの答をえて、もう言うべきことはなくなったのである。

5 「新制職業家庭科指導の実際」の出版をめぐる

この書籍の出版も、当時の職業教育研究会のメンバーによる共同討議の成果である。この書籍の内容は、昭和24年12月に文部省で発表した「職業・家庭科学習指導要領大綱*」について、職業教育研究会会員の現場教師の立場から解釈を試みたものである。

*この大綱を文部省の立場で肉づけしたものが、昭和26年版の「職業・家庭科」学習指導要領となる。

昭和25年1月に出版されたこの書籍は、文部省の発表した「大綱」をいち早く教育現場の立場で解説し具体案をしめたものであったため、出版後すぐに版をかさね、筆者の記憶では、8000部を刷印したのであった。こ

の書籍の内容の特徴は、中学校の職業科（職業家庭科）は、生産労働を対象とする教科であり、「人と人との関係を対象とする社会科と、自然を対象とする理科との中間にたつて、この両者を結びつける」中核的教科であり、この3教科が、「中学校において、内容的教科をなすものであり、従ってその他の諸教科は、社会、労働、自然の内容を学習するための、道具的教科をなす」という考え方*にたっている。

*この考え方は、当時毎土曜ごとに開かれていた研究会で、ブロンスキーの「労働学校」の紹介がおこなわれ、それを参考にして生れた教科構造論であった。

こうした考え方にたつことは、研究会参加者の共通の理解となった。しかし、この場合、これまで「家庭」を、生産労働を対象とする教科に入れることができるかどうかをめぐることは、論議は対立し共通の結論に至らなかった。したがって、この書籍は「職業教育研究会」編とすることをやめ、杉山一人*編著とし、各執筆者の執筆内容はそれぞれ独自性をもってもよいことにした。

*前述したように、杉山一人は東京都教育庁調査課の主事であり、教科書研究協議会「職業」の有力な編集協力者であり、また日教組側から推薦された検定調査員（職業指導）であった。そしてこの当時、職業家庭科の学習指導要領編集委員（昭和26年版）として、職業教育研究会の意見を学習指導要領に反映することに努力した。

したがって、杉山はこの編著の第1章において、指導要領編集委員会の基本方針であった、「職業」と「家庭」を1つの統合教科「職業家庭科」とし、その統合理論を「実生活に役だつしごと」にもとめたことを受けつぎ、その「しごと」を生産的労働と関係づけることに努力している。

「……ここでのいう実生活とは、実家庭生活・職業生活を指しているのだから、実生活に役立つ「しごと」とは、家庭生活、職業生活に役立つ「しごと」の意味である。……家庭生活や職業生活についている人が、実際にしている「しごと」を見ると、自然界からものを生産する「しごと」生産されたものを加工する「しごと」ものを交換する「しごと」これらの「しごと」を処理する「しごと」などになる。そうすると、実生活に役立つ「しごと」……とは、生産に直接間接に関係ある労働……生産的労働であることになり、従って「職業家庭科」で中心として学習する対象は、この間接的な生産的労働であると解すべきである。……では、家庭をどう解すべきであろうか。……家庭の実際についてみると、家庭は2つの意味を持つ……1つは生産の場であり、他は明日の生産のための労働の休息の場である。この場合、農村や漁村の家庭のように、家庭そのものが作業場となっている場合は

いうまでもないことであるが、主婦が裁縫をし、料理をつくる「しごと」も生産的労働と解すべきであろう。従って家庭の目標は、生産の場という意味からは、その生産的労働をいかにして高めるかという目標と、労力の休息の場という意味からは、いかにによりよく休息に適した場にするかという目標を持っている。

こうした考え方に立つ所に、従来の職業科と家庭科を職業家庭科と一本にした意義がある……」（P9）

しかし、このように「職業」と「家庭」を統合して1教科とすることに対し、当時の筆者は反対であった。その理由は生産技術教育をより効果的に実施するためには、「職業」を「家庭」と分離して男女共通に学習する方が望ましいこと、そのことが、当時の教師の実態に即していることなどにあった*。

*昭和26年版「学習指導要領」を批判して、職業科教育のありかたをのべた、岩波講座「教育」第5巻の筆者執筆論文に詳しい。

このような考え方をめぐって、研究会内で共通理解に達しなかったため、著書を「職業教育研究会」編としないうで、杉山一人編著とすることになった。

この著作が出版された年（昭和25）の5月末、杉山一人と筆者は、千葉県の上野中学校の研究会に講師としてよばれた。この席で、杉山一人は、学習指導要領編集委員として講演し、そのあと筆者は、生産教育論の立場で、学習指導要領の内容を批判した。この席に居あわせたM指導主事はすっかりあわてて怒り、こののち、Mが学校長に転出するまで、筆者は千葉県の中学校研究会に「入るべからず」となった。当時の千葉県は農漁が中心で、各地域の学校は、地域のボス教員、さらには県のボスに支配されるという体制が強い県であった。だから、中学校の職業家庭科教育については、Mの支配が強かったのである。

以上、1950年前半期までに、職業教育研究会が発表した研究成果に対し、いろいろな反応のあった中で、いくつかの事実を簡単に紹介した。つぎに1950年後半期からの職業教育研究会の研究活動・組織活動の実状について述べる。

（大東文化大学教育学科研究室）

〈付記〉 前号のおもな誤植

P.31の左下から8行 産別会議→産別会議

右下から4行 第学年→トル

P.34 右上から7行（平均300冊）→3000冊

P.32 左上から19行 西荻書店→西荻書店

右上から18行 職業科実務書→職業科実習書

P.33 左下から3行 磁石ラジオ→鉱石ラジオ

創造的思考力を養うための指導

——カムの設計製作を通して——

工 藤 鎧 一

1 まえがき

「子どもたちに創造的な思考力を身につけさせるにはどのように指導すればよいか」このことはわれわれ技術科教師が常に考え、各研究会などで討議の素材となるものである。

技術科では製作学習が重要視されているものの、ややもすると作らせることのみに終始し、その中で創造的思考活動や技術的思考活動が果して行なわれたのか、またそのような活動を教師が意識的にすすめたかどうか、反省させられることが多い。ここでは機械のしくみの一部である「カム」のはたらきを考えさせ、設計製作を通して創造的思考力を身につけさせることを考えた。また、自分の作ったカムが設計どおりにできたか試させるために「カム曲線機」なるものを自作した。さらに、そのカムを利用して加工学習も兼ねて簡単な動くおもちゃの製作をさせた。その実践の一端を紹介することにした。

2 ブラックボックスの利用

カムの学習をすすめるために、最初につぎのことを課題として与えた。「円板が回転しながら、上下運動をするようなしくみを考えてみよう」

子どもたちに課題意識をもたせることが思考活動の出発であるが、その課題が子どもたちに興味や関心がなければ意欲化しない。この課題は宿題とし、授業ではグループで考えさせた。子どもたちに課題を投げかけ、思考を促す場合、現実の生活の中にそのようなものはないか身近かなところへ目をむけさせ気づかせる。しばらく考えさせているうちに「ボール盤は回転しながら上下することができる」ことに気づく。

ボール盤をブラックボックスとして図示すると図1のようになる。入力～エネルギーの供給を受ける。出力～仕事としてとり出す。という考え方から、ボール盤は入力

が2つで出力が1つということになる。このボックス内の構造は大かたの子どもたちは想像することができるが、最初の課題にはあてはまらない。

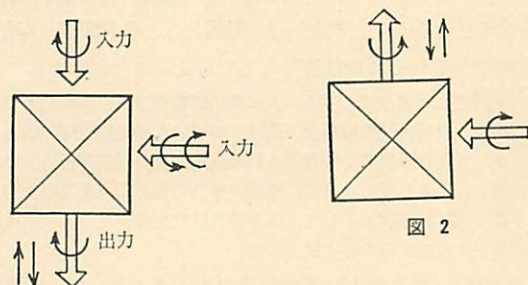


図 1

さらに具体的な思考を促すために図2のボックスを図示する。ブラックボックスの利用は生徒の思考が行き止まったとき、図示して考えさせると大変効果がある。しかし図示だけでは、興味を失うことがあるので、いずれ実物で実験して見せる必要がある。このようにして考えさせ、構造を図示させると、いろいろ変ったものをかいてくるが、理屈に合わないものばかりである。実際ではひとりも見えなかったもので、つぎの写真1のような模型で実験して考えさせることにした。

図3でハンドルaを右に回すと円板Aが左に回転しはじめた。このしくみはどうなっているのか、と発問す

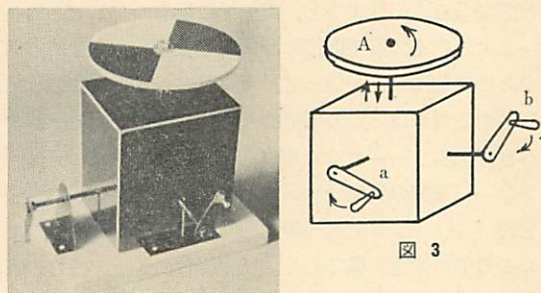


図 3

写真 1

る。子どもたちは興味をもって、このボックスを眺めているが、しばらくして「中に歯車があるんだ」「まさつ車があるんだ」とか答が返ってくる。歯車であるか、まさつ車であるか、どうすればわかるか考えさせる。

次にハンドルaを引っぱり出し、ハンドルbをいっばい差しこんで右に回わすと円板Aが上下運動をはじめた。このしくみはどうなっているのか?と問うと「カムがあるんだ」「クランクがあるんだ」など適切な答えが返ってくる。ではカムかクランクかどうすればわかるか。

カムの場合——円板Aを手で回わすと回転するはずである。

クランクの場合——円板は回転しない

実験結果円板は回転した、中にカムがあることがはっきりした。

ここまできて「回転しながら上下運動するしくみはどうすればよいか」と再び前の課題に戻って考えさせることにする。もうここまでくれば子どもたちも気づく。まさつ車は円板の中心にもってきても回らないことから、カムを円板の中心よりずらせた位置にもってきてハンドルを回わせば、円板は上下しながら回転するはずである。実験結果この通りであった。このように生徒の思考を促すために、このブラックボックスユニットは大変役立った。

3 カム曲線機の利用

つぎに円板を上や下の位置で一時的に止まるようにするには板カムをどのような形にすればよいか考えさせる。

ここではカムが回転していても円板が上下しないようにするには、カムの一部を円弧にすればよいことに気づかせる。(まさつ車は上下しない)、各自、自由に描かせて、その中の適切なものを板書させ、その理由を説明させる。ここで、休止期間と作動期間ということを教える。

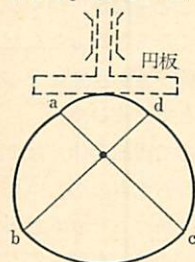


図4

下運動の動きはどうなるか?」

- a b間～円板が上にあがる。
- b c間～円板は上がったまま。
- c d間～円板はさがる。
- d a間～円板はさがったまま。

以上の答えが返ってくる。そこでこれをカム曲線で表わすことを教える。

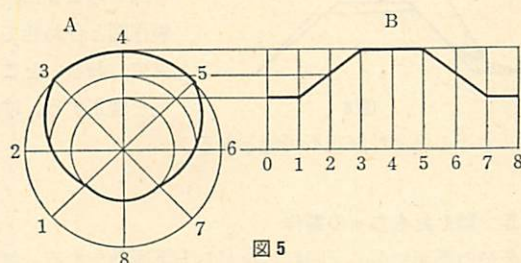


図5

図5のAからBの曲線を導き出させる。ここで、子どもたちが求めた曲線がはたして正しいのか、あらかじめ用意したカムを図6のような、カム曲線機にかけてみせる。

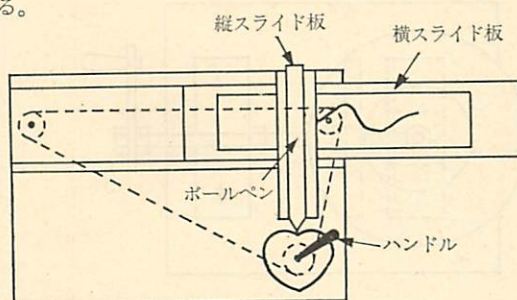


図6

4 カムの設計と製作

つぎに図7のAのような図をケント紙かグラフ用紙に正確にかかせ、自分の好きなカム曲線を描かせる。そしてBの方にカム型を導き出させる。このようにして設計が終われば、つぎは製作である。製作の順序はつぎのようである。

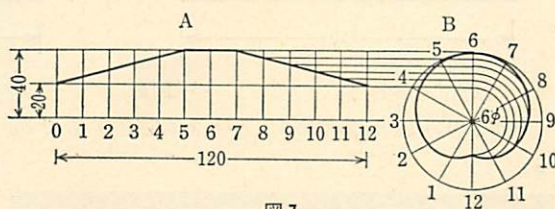


図7

- (1) できたカム型の上に紙をあて、その図形を正確に写しとり、切りぬく。
- (2) 切り取った型紙を材料に貼りつける。
- (3) のりの乾くのを待って糸のご盤で切断する。中心に6φのドリルで穴あけする。
- (4) 曲線部を仕上げる。

カムの材料にはパステルカラー合板を2枚貼り合わせたものを使う。さてできたカムを曲線機にかけて、でき

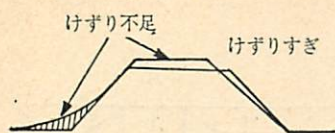


図 8

けずりすぎの場合は修正不可能となる。

ばえを見る。

図 8 のように、製作図と合わせて見て、わるいところを修正する。け

カム曲線とカム型について、どれくらい理解できているか、図 10 のような問題で事前、事後、同一テストしてみた。その結果表 1 のごとくであった。

表 1

問題	1	2	3	4	5	6	7	平均	調査人員
前%	39.2	37.0	67.4	32.6	41.4	17.4	88.0	45.8	120名
後%	96.0	84.8	82.5	76.0	84.8	78.3	100.0	85.4	

テストの結果全員満点にはならなかったが、カム曲線とカムの形の関係を作ることにより理解できたと思っている。

生徒の感想

。 どうしたら回転しながら上下運動をするようなもの

のがかなえられるんだろうか考えた。まずクランクを使ってやる。ウォーム歯車を使う。カムを使う。そして、つぎに回転ということ考えた。回転しながら上下運動をするのだから、カムしかないと思った。カムは不思議だな、と思った。それは円板に接する位置によっていろいろ変化する。

。 カムをもう少しくふうすればよかった。これからも創造的にものを考え、もっとおもしろいものを自分で作り上げたい。

。 はじめ、回わりながら上下運動をする機構を複雑な構成だと思ったが、つくりはじめてみるとかんたんだ

った。カム曲線を出すとき、曲線がさかさまになっていたので合わなかったが、あとでよくした。

。 ぼくはこれまでカムどころか木で円板を作ったことは一度もなかった。カム曲線からカムの形をつくる作業は割合かんたんだったが、糸のこでカムを切るのがむずかしかった。また、このカムを習って、カム以外にたくさんの機構があるが、そんなものを発明した人間は、空を飛んだり海中で泳いだりできないが、なんてすばらしい動物だろうと思った。

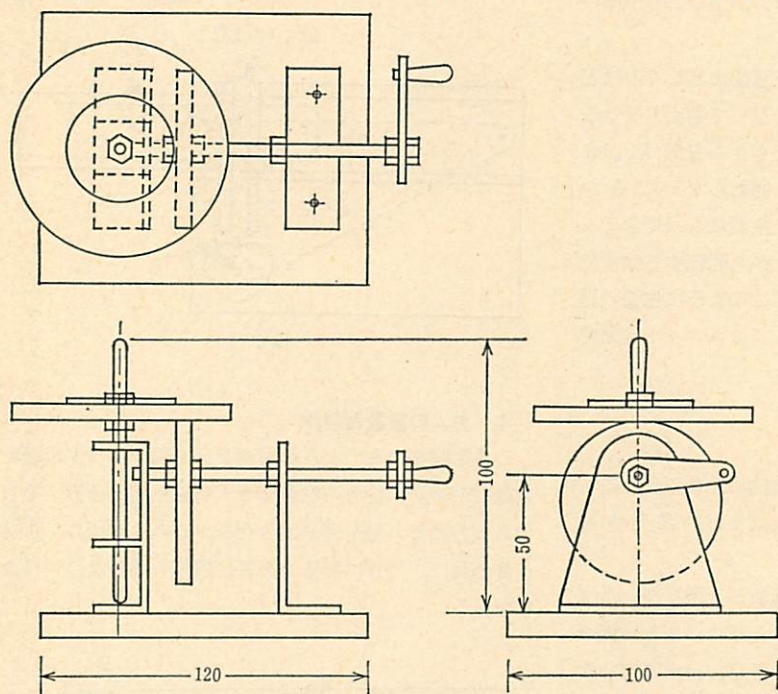


図 9

製作についての詳細は略す、写真 2 は生徒作品である。

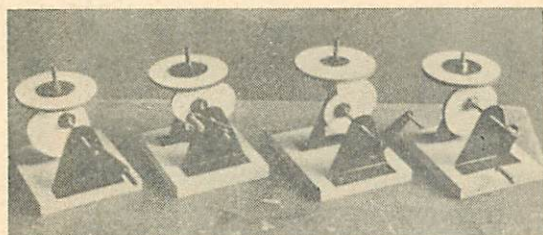


写真 2

6 実践結果の反省

7 あとがき

以上、カムの製作を通して子どもたちの思考を促して

下の図Aの(1)~(7)のカム曲線にあてはまるカムを図Bのア~ケの中から選びその記号を()中に記入しなさい

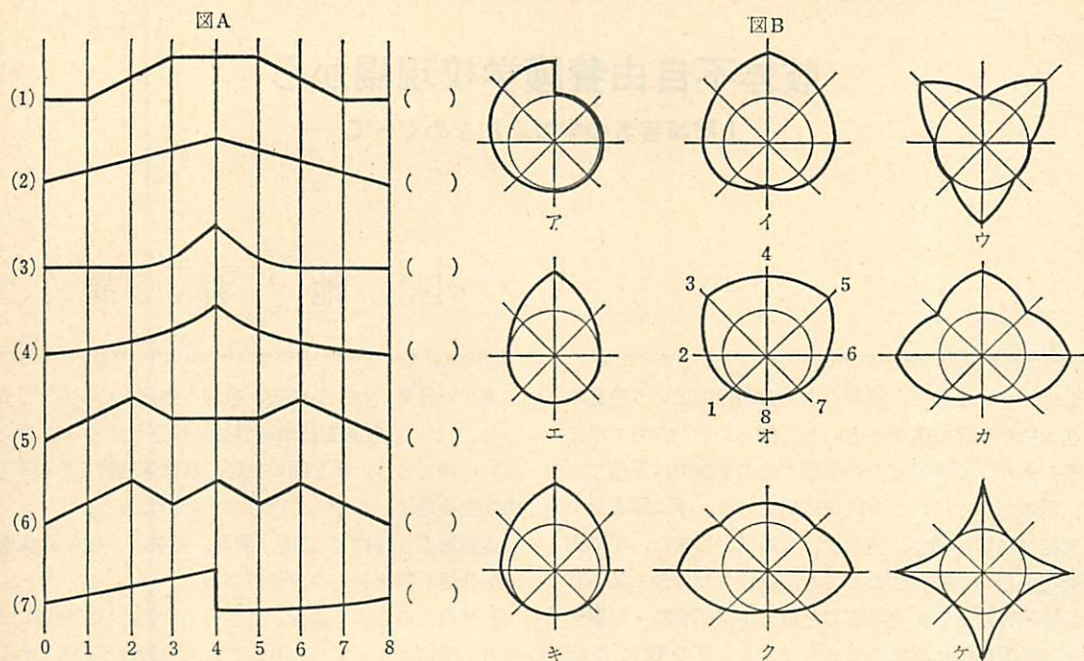


図10

きたが、創造的にものを考えさせるためには、子どもたちが自由に学習できるふん囲気をつくり、興味、関心をもたせるためのくふうが必要となる。われわれは、ややもすると、理解をはやめるために結論をはやく出し過ぎたり、知識の注入にはしり過ぎて、子どもたちの空想力や想像力を発揮する場をこわしている場合が多い。思考

のともなわない知識の理解は、おおむね、転移性に乏しい。とくに技術科は、設計製作や実験実習を通して、創造的、技術的な思考力を養うための重要な教科だと考えている。

(大分県速見郡日出町立日出中学校)

●国鉄の近代機種すべてを収録したSL写真集の決定版!!

蒸気機関車 栄光の一世紀

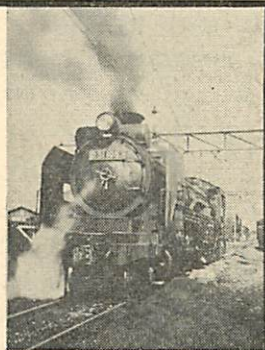
カラー版!!

●天坊裕彦(元国鉄総裁)監修 藤咲栄三解説 各1,200円 全巻揃 6,000円

国鉄の近代機種すべてを多数のカラー写真とエッセイで語る類のない蒸気機関車読本。小学生からマニアまでを対象にした日本SL史の決定版!

- ① 鉄道の夜明けを担った主役たち 輸入機関車
- ② 大正の郷愁を残す蒸機たち 9600形
- ③ 旅情を運ぶ蒸機たち 8620形
- ④ 経済と産業をささえた動輪 C形機関車
- ⑤ 過去の栄光を今に D形機関車

保存機関車



国土社

肢体不自由養護学校現場から

——上肢障害者の学習参加をめぐる——

小 池 舜 哉

脳性マヒによる両手足不自由・言語障害という生徒は現在本校中学部41名中5名いる。何らかのかたちで手に障害があり、技術家庭科の学習にそのままでは不便であり、困難なものは、このほかに14名いる。手に障害がある生徒が全体の46%に達する。このほかにまた、手に運動機能上からの障害はなくても、脳性マヒに多く見られる髄伴障害である知覚障害のために、空間判断・形態知覚・運動協応等に異常のあるものもかなりの数にのぼる。

このような生徒達を相手にしての「楽しい授業」をどう組み立てて行くのか、養護学校教師の苦しいたたかいがある。

中学校に入ってきたときの生徒達の期待は、どこの中学校でもそうかわらない。男の生徒達は同様に次のようにいう。「技術室で勉強できる。」「いろいろな機械や道具を使っていろいろ作ることができる。」「製図ができ、いろいろな図面を見たり書いたりできる。」

小学校ですでに、いわゆる学力差をはっきりさせられてきた生徒にとって、新しい教科への期待は大きい。英語とちがって、小学校時代、塾へ行った等という話はきかないから、技術家庭科への期待はまさにバラ色である。小学部時代には、教師や友だちの介助等で何とか各教科ともやってきたのだから、中学部でも何とか行ける、彼らはそう信じている。

ところが、いざ授業がはじってみるともういけない。ふるえる手に絵筆をもたせてもらい、絵の具をつけてもらって描いた絵でも、足で作った彫塑でも、美術作品としてはりっぱに通用する。しかし技術家庭科となると、単なる表現活動ではないからそうは行かない。文部省の言うところの学習指導要領やその解説によると、手の不自由なものは、知識や理解に重点をおけばいいということらしいが、そんなことで生徒達が満足するはずがないし、差別意識、みじめさを感じさせるだけである。

楽しい授業、わかる授業、教師も生徒も心から「よかった。」という授業を技術家庭科ではどうつくって行けばいいのだろう。手と頭の教科、技術家庭科を手の不自由な生徒達は どうやって行けばいいのだろう。

金属加工（棒材）、栽培、調理、電気、これらが比較的生徒達が興味をもつ分野である。

教材教具のくふう改善、生徒への介助、個別指導のあり方、学習グループづくり、これらが教師が取りくむ具体的な事項である。

ところが、教材・教具の工夫改善といったところで、マヒのためにふるえる両手であっても、それを使用すればまっすぐに切れるのこぎりやはさみ等はまず考えつかない。介助・個別指導といったところで、作品の大部分が教師の手になるもので、さて本立はできたが、自分のやったことは、先生への補助、やすりかけ、とのこぬりだけで自分の作品ということではいかにもさびしい。グループで協力して、助け合いながらといったところで、これ又、同様のことである。

「手と頭で勝負」の「手」を「全身（しかも満足でない）」におきかえて、「からだで勝負」の技術家庭科を追求せざるをえない。楽しくわかる授業をめざして。

肢体不自由の子どもらは、一般の子とくらべて経験領域が非常にせまいといわれている。このことが技術家庭科のみならず学習上の大きな困難点である。

乏しい経験領域の中で、それがもっとも乏しいのは栽培・調理であった。これは一般の中学生に取っても同様であるかも知れない。本校生徒の場合は寄宿舎に収容されているものがほとんどで、自宅からの通学生は中学部の場合わずか8名にすぎない。岩手県に次ぐ広い面積をもつ農業県で、保護者の職業をみても農業が圧倒的に多い。それでも米はどうして作るか、豆は、キュウリは、という知っている者は非常に少ないし、実際に作った経験のある者はまずいない。調理の経験も少ない。たま

に休みで自宅に帰っても、お客様あつかいをされるからである。

寄宿舎生活という制限された中で、生徒達は常に欲求不満の状況におかれていることも否定できない。そこから無気力・無感動がうまれる。それとはげしい食欲。

ここで考えついたのが「作ってたべよう、おれたちの手で」である。

肢体不自由養護学校ということで、1階平屋建の校舎であったことがよかった。1歩外に出れば土がある。

雑草の根を掘りおこし、石をとり出し、土をたがやすという苦しいたかひが、「食おうぜ」という目標ではじまった。車椅子、松葉杖、その他いろいろの補装具、手の障害といった生徒達である。それが全員作業にかかり合うということは、結局は、製図や加工とは質的にはちがうけれども、なまやさしいことではなかった。

段階をかさね、前半の反省を次の生徒にしめして年度の計画をたてさせ、その反省を、ということのくりかえしが、何年か続いた。

年度ごとの学習のまとめ（生徒による）

年次	栽 培	ま と め と 反 省
1 4月 8月	畑づくり トマト キュウリ	・せまい土地でよい ・なまで食べられるからよい ◎すぐ夏休みに入ってしまう ◎他の生徒に荒らされてしまうのでなまで食べられるものよりも別な作物を考えるべきだ ◎雑草を集め堆肥を作るとよい
2 4月 8月	畑づくり ジャガイモ	・栽培法がかんたん ・校舎周囲の除草で堆肥ができる ・うでで、塩をかけて食べたりサラダを作った ◎ダイズに肥料はやらない方がよい ◎ジャガイモには肥料がほしい ◎サツマイモの方がおいしい ◎今後大いに堆肥を作ろう ◎畑の中の石ひろいが大切だ ◎ダイズは夏休み後に食べるように時期を考えるべきだ
3 4月 10月	畑づくり ジャガイモ サツマイモ	・栽培法がかんたん ・天ぷらを作った。小さなジャガイモのみそいためを作った ・のこったのを先生方に販売して肥料やたねを買う基金ができた ◎イモは保存がきくが、すぐたべあきてしまう。調理法があまりない ◎枝豆はよく売れるがイモ類はあまり人気が悪くなかった ◎売った代金で別なものを買って料理して食べてはどうか ◎売れるものを調査するとよい

4 4月 10月	シュンギク ツルナシ インゲン ラジッシュ	・野菜は育ち方が早くよく売れる ・販売した代金で調理実習が大々的にできた ◎イモ・ダイズも自分達で食べる位は栽培した方がよい ◎秋まき野菜を作れば1年中栽培できるのではない ◎多くの種類を栽培して行くことを研究すべきだ
----------------	--------------------------------	---

栽培したものを自分達で食べる。これがなまで食べる。調理して食べる。販売して得た代金で別なものを買って食べる。1年ごとに発展していった中で、栽培・販売（経理）・調理（加工）の学習ができたわけである。

生徒達の意欲も大きい。「食」ということはたまらない魅力である。対等に「食」に参加するためにはどんなに障害の重い者でも「食」原料を得る営みに対等に参加しなければならない。働いて食うよろこびを共にわかち合う、ということについて生徒らは皆んなで考え合った。障害の重い者がいかにすれば対等に食に参加できるか、障害の軽いものが松葉杖を使用してみたり、車椅子にのってみたりしながら、作業の可能性を追求しあっていったのである。

全員が実習に参加するため（生徒のまとめ）

障 害	できる仕事の種類
上 肢	草刈り、石ひろい、たねまき、運搬、販売、経理、農具の出し入れと手入れ
下 肢	草むしり、石ひろい、たねまき、うねづくり、苗植え（ビニル座布団用意）
上下肢	農具の管理、記録、水まき、運搬、草むしり、石ひろい、堆肥積み
車椅子	草刈り、農具の手入れ、運搬、水まきホース使用、販売、種まき、苗植え（ビニル座布団使用）
松葉杖	草刈り、たねまき、水かけ、運搬、堆肥積み、集金

生徒は生徒なりに苦心するものである。これも、1年の反省をふまえて次年度の学年へと申し送りをしながらまとめられてできたものである。

この申し送り方式と年内の反省から、来年度の計画を作成しおわって進級して行くわけである。次の生徒は、その計画にもとづいて実践し、さらに計画を作り反省事項をそえて次年度に申し送っている。

栽培学習計画（生徒による）

月	作 物	実 習	知識・理解・経験
4	ラデッシュ シュンギク ハウレン草	畑おこし 石ひろい 草むしり うね作り	作物の種子のようす、種子のまき方、雑草を積み重ねてくさらせると堆肥になる。作物の発芽と育ち方、土の酸性と

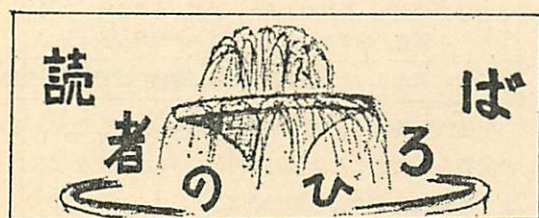
		種子まき 堆肥づくり	アルカリ性について
5	トウモロコシ 小カブ ダイズ	収穫、販売 試食 畑おこし 石ひろい 除草、堆肥 種子まき	つけもののつけ方、新聞の野菜市況とねだんのつけ方、ラデッシュの利用法、種のまき方（すじまき、ばらまき）
6	ダイズ	収穫、販売 試食 除草、中耕	おひたしと天ぷらの作り方、ダイズと他の作物と肥料との関係、作物と病虫害
7		収穫、販売 試食、除草 中耕、堆肥	つけもののつけ方 夏休みに入る前の畑の管理について
9		収穫、販売 試食、畑全体の大除草 堆肥	夏休み後の畑の状態について 枝豆のうで方
10	ダイコン ハウレン草	畑おこし うね作り 播種	輪作、連作と作物について 前年度反省事項の研究
11		除草、堆肥 焼却炉から 灰とり	焼却炉のしくみと火の用心 前年度反省事項の研究
12		除草、堆肥 畑整理、収穫、販売、 試食、灰取り、収穫祭	収穫祭について 総合調理について 会計について 冬の畑の管理について 前年度反省事項の研究
年間の反省から			
・多くの種類の作物を少しずつ作って売れば価格は上がるか			

ら、作物の種類について研究する。

- ・無農薬作物に人気があるから、油かす、けいふん等について研究する。
- ・温室を利用して冬も収穫すればいいというので研究する。
- ・花類も作って売ってくれという要望もあるのでこれについても研究する。
- ・調理のときの全員参加について研究する。

今、本校では、小学部から高等部まで、栽培活動がさかんにおこなわれている。そしてこの活動が理科・数学訓練等に大いに利用されている。アサガオ・ヒマワリ・ヘチマ・イネ等の教科の中で観察用に出てくる植物の他に、全学級（ベッダ学級も重複障害学級も）枝豆・サツマイモを栽培し、秋には調理実習室から香ばしい匂いがただよってくる。この他にも、ジャガイモ・ソラマメ・落花生・イチゴ・スイカ・トマト・カボチャ等を栽培している学級もある。土地があることは、すばらしいことだと思う。土地があるからできることだと思う。

肢体不自由の生徒の技術家庭科をどうやっていくのかといったとき、やはり「生活に役立つ技術を」としかいえない。生徒はエンジン分解もしたいし、ラジオも作りたい。教科書のグラビアにのっている美しい作品の数々を見て、それらを自分の手で作りたいという要求をもっている。どんなに手が動かなくても、作りたい、技術を身につけたいと思っている。教師としても、作らせたい、やらせたい、せめて他人の手70%かりても、残り30%位は自分の手になるものをやらせたいと願い、あれこれと迷い考えている。（福島県立郡山養護学校）



技術教育への教育工学的アプローチ、特にカリキュラム面でサイバネティクスの視点による新しい理論と実践を掲載してほしい。産教連の編集方針と多少異なるかもしれませんが、広い視野にたつて技術教育を発展させるためにも時々新機軸を注入すべきではないでしょうか。（東京・向平 決）

「創造的な教具、子どもの興味をひき、基本的な視

点を教えるのにピッタリの教材」といった観点から、わが実践を見直してみましたが、プラスチック学習を除き、何等自分がつくり出したものがないことに情なく思っている次第です。かなりの自作教具や教科書にはない教材など考えていますが、それらは全くといってよいほど技術教育誌や教研・サークルでの実践発表に学んだものです。学んだと言えば聞えはよいのですが、「技術教育」や「産教連」の実践を「まね」たものばかり。それだけに「技術教育」や産教連は私の技術教育実践の指針ともなっているのです。

模倣は創造のはじまりと言います。いつの日か創造的な実践をして諸兄のご恩にむくいたいと、産教連の刊行物や技術教育誌を見ながらせつせと新年度の教育課程を作っているところです。

（大分・近藤 昌徳）

「小学生殺人事件」の記事に思うこと

鈴木 順 子

1月16日付新聞の朝刊はいっせいに、福島県で起きた小学生の少女殺人について、「性殺人」「いたずら・抵抗され」「性に異常な関心」など、4～5段抜きの見出しをつけて、ジャーナリストに報道していたが、この種の少年少女の「事件」の記事として、このような報道のしかたは、果たして適当なものであろうか。疑惑を覚えずにはおれない。

「乱暴」「いたずら」「抵抗」などのことばは、大人の誘拐事件や強姦殺人事件の報道では、字義通りの意味でよりも、この種の行為の内容を報道の許容範囲内で常識的なことばにおきかえた意味として用いられている。だから心ない読み手によってはどのような猥褻なイメージにも拡大しうる暗示的な意味をもっている。それになによりも、特定の行為の善悪について、結果だけでなく意図の有無や結果の予測に対する適切な判断力や自己制御力などをあわせて問題にする「教育の論理」のたてまえからすると、この少女と少年の悲劇が、このような大人のことばで表現される一犯罪事件として、読み捨てられていくということに憤りをさえ感じるのである。

“この子を非行に走らせたのは、むしろ大人と社会の責任である。”(18日付朝日夕刊News三面鏡)という反省と責任意識から、この事件を警告的にとりあげるといふのなら、三面記事としてではなく、文化欄か学芸欄に、子どもを保護していく立場にある大人向けの事実の記述の記録ないしは、分析的な報告としてのみ扱うべきだと私は思う。

子どもをとりまく環境の悪化を叫び、この種の性犯罪や殺人事件が少年少女にエスカレートしていることを心から憂えているはずの大人が、(16日付朝日朝刊)まだ学童である小学生の起こしたこの種の事件を、世間の好奇な目に晒し、結果的に無気力で退屈な大人の猟奇的刺激材料に色づけるようなことがあっては断じてならない

と思えるのである。それでは、この少女と少年の悲劇を二重に救われないものにしてしまうであろう。

手もとにある限られた資料を手がかりに、この事件における大人と社会の責任を明確にするという観点から、2, 3の問題を考えてみたい。

まず第1には、この少年のこうした行動をその性的関心ということに限って言えば、なにも現代のこの少年に特有の異常なものではなかったように思える。戦中から終戦時にこの学童期を過ごした私たちの時代にも、こうした関心が顕わにされるような出来事は周辺に決して珍しくはなかった。学校から帰るとカバンを放り出して、近所の悪童仲間と遊びに熱中した子ども時代をもった人々なら、ほとんどだれもが、雨に閉じこめられた日の遊びのレパトリーの1つに、少しばかり悪の意識も混えながら思い起こすような“お医者さんごっこ”の体験を秘めているはずである。

この子どもだけの秘密の世界は子どもの無邪気なホンキによって、秘密は固く守られ、そうすることによって大人の領分を侵害するスリルと快感も加わった。しかしいまの子どもたちにとって、このような子どもだけの無邪気な秘密の世界は、大人の徹底した子ども管理のもとで、どんなにか影の薄いものになっていることであろう。大人に歪曲・干渉されることなしに、思春期前期のもやもやした生理的気分を安心して発散できるような遊びの世界が失われてしまっているということが、この少年の悲劇の一因にあげられるように思える。

第2に、このことは、今の社会の子どもをとりまく環境の悪化とも密接に関係がある。テレビ・マンガを通して子どもの世界を大人が侵害しているばかりでなく、子どもと大人の共存の空間であるべき街頭のあちこちにまで、退屈な大人のためのポルノポスターが氾濫し、なんと歪曲された大人の性的人間観がばらまかれていること

か。人間活動のエネルギーを性的衝動にだけ限ってみようとするのは人間の矮小化である。ヒトの生殖行為として、人間男女の深い交わりの1つのあり方として、人間存在の根拠でもあり、尊厳でもある人間的性行動のあり方を、生活や人格や愛情などと切り離して不自然に誇張することで、このエネルギーを多面的な活動として発現させる人間の可能性の一面を隠蔽し、人間への真の興味を失わせているのが現代社会の環境である。親が子どもの世界に神経質に立ち入る理由の1つにこうした環境の悪化があることも確かであろう。

第3に指摘すべきは、この少年の衝動的行動の問題である。この子どもの特殊な家庭環境とその背後にひそむ社会的・政治的問題もこの傾向を助長する要因となったにしても、いまの学校教育の内容にも、大きな責任がある。家庭での躰不在が叫ばれているというのに、いまの学校にはこうした活動力を適切に示した形で表出するような自己制御力を意識的に訓練する場が著しく欠けている。具体的な行動場面で、その場面の状況も含めて、行為の結果を、適確に予測するような真の認識とは、意志や行動習慣・態度などを含む身体・精神的リアリティを変えることに裏づけられたものであるのに、集団による共同活動を通して意識的に生活を訓練する機会はきわめて少ない。

最後に、この出来事を、ついに殺人事件として結着させた少年の殺人知識に対する大人の責任が指摘されるべきである。夢中で暴力をふるった結果の偶然ではなく、死ぬことがその行為の必然的結果として生じる“首を絞める”ことで殺したことに、世の大人は自己の教育責任を考えるべきである。いまの社会には、首を絞めれば人が殺せるといういわば凶器ともなる知識が、人を殺す意味を十分に知らない人々の前に投げ出されている。それに反して、家庭でも学校でも生命の価値を生活の場の人間関係を通して、体で覚えこんでいく機会はきわめて少なくなっているといえよう。意図的教育の学校は、ひからびた知識としての有機体についてではなく、たとえば各自1匹の金魚を責任もって養い育てるといったような時間と手をかけて、生きものが生きていることの実感を体験させるべきである。それとともに、生命というものが、どれだけ多くの人間労働の結果として、守り育てられていくものか、その重さというものを1つ1つの労働を実体的に意識させながら、しっかりと学びとらせる努力がもっと本気でなされるべきではあるまいか。

この事件は、このような大人の反省をもって受けとめられるときにのみ、汚されながら知らされた意味があるといえよう。

(大東文化大学教育学科研究室)

真心を気づかせてくれた45人の目

千 田 カ ツ

あることから

教師は1人1人の子どもを、正しく見とることが最も大切なことであることは、よくわかりきっているが、浅薄、愚鈍な見方、考え方で20年もの教壇生活を続けていた私に、ほんとうの見方を気づかせ、悟らせてくれた45人の目に会った。

以来いつも私が、子どもたちに接する場合の指針となっている。むしろその時を契機に生徒たちばかりでなく、すべての人を見る目や見方を深めようとする変革の方向にむけたこと。そして13年を過ぎ去った今もしば

しば思い出し感激し、その場その時に応じた心や目のあらたな教訓として生きている。

感動の出会い

それは中学1年生を担当した秋のことである。亡夫が出張先でインフルエンザに罹り入院し、高熱が2か月も続き私は日中職務に、夜は看護と子どもの世話、さらに採点等と力の限りの連日続けた。だが病魔は去らず、ついに危篤の淵に近づき、私は身も心も倒れんばかりであったが、「私ごとで」生徒たちに支障をあたえてはならない。職務は何か何でも守らねば……と無我無中の日

日が続く、その間、授業をはじめ生徒たちに接する時はつとめて平常をよそおうと、教室に入るとき、生徒に面するとき、ぎりぎりに頑張っていた。

そんなある日、2校時始めのベルとともに、担任学級の社会科の授業にいき、一刻を惜しみ即座に学習目標の話し合いに入った。ところが3～4分たっても机の中や教科書の下などで、もそもそ手を動かしている者が2～3人いたことから、そのころよく授業のベルがなくてもグループで折紙遊びのようなものに無中になっているのを見かけていたので、ひどく叱った。

それから3日目土曜日の夕方、3人の子どもたちが、美しい植木鉢とふろしき包みを持って病室を訪ねてきた。そのふろしきの中にはクラス全員で作ったという千羽鶴と、「先生がんばって下さい 1年D組一同」と表書きされた袋が入っていた。45人がそれぞれの言葉でしただけの暖かい激励の文を読み、病夫と共にとどなく涙した。まさに「心の花ぞの」、清純な温かい思いやりの溢れる内面の美に包まれ、ただ「ありがとう、ありがとう」と感謝するだけだった。これが教師のほんとうの幸せではなからうかと。幸せを感じるとともに、1人1人45人の頭をなで手握って、ありがとうといってやりたい思いいっぱいであった。と同時に上べだけしか見えなかった私の目と心の浅はかな至らなさがなんともなげなく、申しわけなく、おそろしく思われ、その愚さが痛く痛く感じた。そして長い間接してきた多くの子どもたちに詫げる思いと深い自責の念が心臓にしみた。

教師の私生活や私心など生徒たちには「見せるべきではない」「見えないはず」と思っていたが、そのようにはできなかったのか、事実そうでなかった。やんちゃでいつもふざけたり、走りまわったりしている中学1年生のどの子も、教師の行動や心のすべてが写る「鏡」であった事をあらためて知り、気づき驚いた。

それから4日後、病夫は「生徒たちを大切に、おれの分までつくしてくれ」と言い残して他界した。以後すべての支えを失い、失望のどん底におちた私を再起させてくれたのも45人のくりくりした元気な目、いたわりのひとみと、死のせとぎわまで教育愛に燃えていた無き夫の意志であった。

激励の手紙

先生、火曜日の社会の時間はごめんなさい。

あの時、私たちはこの千羽鶴を早く作りあげたいと思ってもう1羽、もう1羽とつい授業が始まってもやって

いてすみませんでした。社会の勉強もこれからは一生けんめいやりますから、おととい(1昨日)のことはゆるして下さい。

それからろう下を歩くときの先生の心配そうな顔をみると、とてもかなしくなります。授業のときはむりしてにこにこしているんだなあーと思うとなおさらかわいそうに思います。私も千羽鶴をとどけにいきたいですがみんないっしょにいかないことにホームルームできまり、私はえられなかったののでいけません。とても残念です。だから後からいきます。

ですから早くだんなさん先生の病気をなおしてあげて下さい。先生ぞったいたおれないでね。お願いします。

11月27日

及川 君子

先生、国夫先生の御病氣どうですか。先生にしかられるかもしれないけど、私たちは休み時間もお昼の時間もみんなで話しあっています。

それで早くなおるようにと私たち1年D組全員で千羽づるを作り、おいのりすることにきめました。そして5日間で作ったのがこの千羽づるです。そして駒形神社にいったおいのりしてきました。

先生がいつも学校から病院にまっすぐゆき、夜もずーと看病していることをずーと前から聞いていました。それでお手伝いにいこうかと話し合いましたけど、いったら先生にきてはいけないといわれるのがこわくていきませんでした。でも先生がつかれて病氣になったらいへんだとみんな心配しています。このあいだ先生がろう下を歩かれながら、なみだをふいていたのを私はみました。ほかにみえた人たちがいて、それを話しあい私たちも泣きました。

先生、国夫先生のことを私たちにも話して下さい。勉強もちゃんとしますから。

お願いします。

11月27日

阿部 祐子

期待するもの

当時の子どもたちは、今は24～5才の中堅青年となった。時折り1人1人の顔を思いうかべ、男も女もきつと、あのすばらしい清らかな目と心と行動力で、それぞれの社会で有能な活躍をしていることであろうと、心あたたまる思いにひたることがある。また是非そうあってほしいと願ってやまない。(岩手県胆沢町立小山中学校)

第 26 次 技術教育・家庭科教育全国研究大会案内

主催 産業教育研究連盟

下記のように第26次産教連全国研究大会を開催いたします。産教連会員の皆さんおよび職場や地域のお仲間が多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。大会の研究の柱および分科会討議の柱にそった研究や実践報告、あるいは問題提起を多くの方がたから発表いただきたいと願っております。

大会テーマ 「子ども・青年の豊かな発達をめざす技術教育・家庭科教育」

——総合技術教育の思想に学ぶ実践をめざして——

期 日 8月7日(日)8日(月)9日(火)

会 場 広島県福山市「備後ハイッ」(福山勤労総合福祉センター) 福山市引野町4238

研究の柱

1. よくわかる楽しい授業を追究しよう。
2. 「勤労体験学習」とわたくしたちのめざす労働の教育。
3. 男女共学によるのぞましい教育課程を追究しよう。
4. 幼児から高校までの技術教育を明らかにしよう。
5. 授業における集団づくりを追究しよう。
6. 家庭科教育の内容と方法を明らかにしよう。

記念講演 芝田進午先生(広島大学教授)

基調報告 「新学習指導要領とこれからの技術教育・家庭科教育」 池上正道

特別報告 1. 原爆と広島市の平和教育

2. ドイツ民主共和国の教育視察報告

講 座 「技術教育・家庭科教育授業入門」(6日夜)

大会日程

時 日	午 前	午 後	夜
8月7日	全 体 会	分 野 別 会	交 流 会
8月8日	分 野 別 会	問 題 別 会	交 流 会
8月9日	全 体 会	解 散 工場見学(予定)	

分野別分科会と討議の柱

第1分科会(製図・加工・住居)

- (1) 新学習指導要領にみる「製図」「加工」「住居」の問題点を明らかにしよう。
- (2) 製図の基礎をどんな順序で教えたらいいか。
- (3) 基本的な道具や工作機械の学習内容を明らかにしよう。
- (4) 鋼の性質の理解と加工法の学習内容を明らかにしよう。
- (5) 住居学習で何を教えたらいいか。

第2分科会(機 械)

- (1) 新学習指導要領にみる「機械」の問題点を明らかにしよう。
- (2) わたくしたちが大切にしたい機械学習の内容を明らかにしよう。
- (3) 基本がよくわかる教材と学習展開のくふう。

第3分科会(電 気)

- (1) 新学習指導要領にみる「電気」の問題点を明らかにしよう。
- (2) 電気学習では、何をどこまで教えればよいか。
- (3) 電気学習の理解を深める教材のくふうと自作教具の研究。
- (4) トランジスタ教材では何を教えるか。

第4分科会(栽培・食物)

- (1) 新学習指導要領にみる「栽培」「食物」の問題点を明らかにしよう。
- (2) 栽培と食物学習のかかわりをどう考えるか。
- (3) 男女共学可能な食物学習のすすめ方を明らかにしよう。
- (4) 合理的な食品加工法を学ぶ典型教材を明らかにしよう。

第5分科会(被 服)

- (1) 新学習指導要領にみる「被服」の問題点を明らかにしよう。
- (2) 男女共学可能な被服教材を明らかにしよう。

(3) せん維から被服までを学ぶ指導のくふう。

う。

問題別分科会と討議の柱

第1分科会（男女共学）

- (1) 共学の意義と新学習指導要領の関係をどう考えるか。
- (2) 共学の指導計画をどのようにつくり、どう実践するかを明らかにしよう。
- (3) どのような内容が共学できるか、実践上の課題と解決策を明らかにしよう。

第2分科会（学習集団づくり）

- (1) 実習を組織する場合の集団づくりの方法を考えよう。
- (2) 班や係をなぜつくるかを明らかにしよう。
- (3) 学級や班でおくれた者への協力をどうするか。

第3分科会（高校の教育課程改革と技術教育）

- (1) 小・中・高一貫した技術教育のあり方を明らかにしよう。
- (2) 勤労体験学習と新学習指導要領とのかかわりをどう考えるか。
- (3) 職業高校の問題点をどう克服するか。

第4分科会（発達と労働）

- (1) どんな労働経験をさせているか。
- (2) 労働の教育は、子どもたちにどんな力をつけるか。
- (3) 勤労体験学習をどううけとめ、労働の教育をどう進めるか。

第5分科会（技術史）

- (1) 技術史教材とは何か。実際の教材配列との関係を追究しよう。
- (2) 生徒の技術史的認識や理解の内容を検討しよう。
- (3) 地域の遺産や資料等の情報交換およびその扱い方を検討しよう。

第6分科会（施設設備問題）

- (1) 過疎地や過密地では、施設設備をどう充実するか。
- (2) 技術・家庭科の予算をどう確保しているか。
- (3) 半数学級をどう実現するか。どう運動をすすめるか。

第7分科会（家庭と保育）

- (1) 家族関係と保育学習の問題点を明らかにしよう。

※ 今次大会から分科会に「住居」と「保育」を加えることにしました。従来産教連ではこの分野についてはほとんど討議を加えておりませんでした。家庭科教育としてそれらの分野についても検討を加えることの必要を考え分科会を設定しました。

夜の交流会

7日夜……連盟総会・懇談会

8日夜……問題別交流会として、①若い教師のつどい ②地域のサークルづくりと活動 ③教材教具自慢会 の3つの分散交流会をもちます。

参加費 2,500円（学生2,000円）

宿泊費 1泊2食4,500円。宿泊定員120名。定員に達したあとの申し込み者については、宿舎が取りにくくなります。費用も少し高くなりますのでご承知おきください。

申し込み 参加費2,500円、宿泊希望者は予約金2,500円計5,000円を申し込み書にそえ、7月20日までに下記へ。

〒125 東京都葛飾区青戸6-19-27向山方産業教育研究連盟事務局 Tel 03-602-8137

千振替 東京9-120376

提案 7月10日までに事務局へ申し込んでください。

参加申し込み書（書式）

氏名					男・女	年令	
現住所	〒				TEL		
勤務先	TEL						
参加別	分野別	1, 2, 3, 4, 5	問題別	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7			
宿泊と食事希望	泊	6日	7日	8日	9日		
	食事	夕	朝, 昼, 夕	朝, 昼, 夕	朝		
送金	円		送金方法	現金書留, 振替			
提案	有, 無(テーマ)				講座希望	有, 無	
工場見学希望	有・無						

特 集 : 300号記念号

民間教育運動の果たした役割……………大 槻 健
 民間教育運動の展望……………竹内 常一
 産教連の当面する課題……………向山 玉雄
 <連載> 産教連のあしあと……………清原 道寿
 「技術教育」誌をとおしてみた
 研究活動の動向……………産教連研究部
 私と「技術教育」誌の出会い

<実践報告>

基礎的事項だけはわからせたい
 —計算力向上・学習到達目標設定の試み—
 ……………大久保 浩
 本校の金工・木工室の改善点……………斉 藤 実
 金属加工の教育的価値……………早 川 駿



◇本号では、改訂学習指導要領の「技術・家庭」科の領域を中心的にとりあげ、その内容を批判検討する予定で、前号にも予告しました。しかし、文部省の発表が

おくれたため、本号での特集はとりやめにし、発表後に特集を組む予定です。

◇そのため、本号では、産業教育研究連盟主催で実施しました「ドイツ民主共和国の教育視察」の報告を中心に編集しました。はじめに予定していた「10年制総合技術教育を行なう学校」の見学が先方の都合で中止になったため、親しく総合技術教授を見学することができなかったことは残念でした。しかし、今度は第1回の視察ですので、次の機会を待つことにします。

◇本誌も、7月号で300号となります。昭和24年の5月

に、「職業と教育」という16ページのパムフレットを出して以来、通巻300号となります。7月号は300号記念号とする予定です。

◇大阪サークルの会合を案内します。

大阪・技術家庭科教育を語る会(第5回案内)

と き : 6月11日(土) P.M. 2.30~

と ころ : 大阪市立労働会館(白亜殿)

(環状線 森ノ宮駅下車 徒歩約3分)

内 容 : 「よくわかる楽しい授業をどう進めるか」

(1) 実習をどう進めていくか

(2) 楽しい製図学習

(3) その他

連絡先 : 和泉市伯太町3-6-18

小林利夫 (Tel. 0925-45-1822)

昭和52年6月5日 発行

発行者 長 宗 泰 造

発行所 株式会社 国 土 社

東京都文京区目白台 1-17-6

振替・東京6-90631 電(943)3721

営業所 東京都文京区目白台 1-17-6

電 (943) 3721~5

定価 390円(〒33)

編 集 産業教育研究連盟

代表 後藤豊治

連絡所 東京都目黒区東山 1-12-11

電 (713) 0716 郵便番号 153

直接購読の申込みは国土社営業部の方へお願いいたします。

技術・家庭科教育

新しい技術教育の実践

産教連編
一、二〇〇円

新しい家庭科の実践

後藤豊治編
一、〇〇〇円

電気教室200の質問

向山玉雄著
一、二〇〇円

電気理論の基礎学習

佐藤裕二著
八〇〇円

訂改 被服概論

小川安朗著
一、三〇〇円

教育工学・視聴覚

教育工学の基礎

井上光洋著
一、二〇〇円

C A I 入門

東芝教技研編
五〇〇円

V T R ビデオソフトの作り方

東芝教技研編
一、二〇〇円

教育史

近代日本教育思想史

中内敏夫著
二、〇〇〇円

図説近代百年の教育

唐澤富太郎著
八、〇〇〇円

特殊教育

登校拒否児

佐藤修策著
一、二〇〇円

読書指導

全校読書運動の記録

山口重道著
一、二〇〇円

家庭の読書指導

日本読書指導研
一、二〇〇円

学級の読書指導

日本読書指導研
一、二〇〇円

学校の読書指導

日本読書指導研
一、二〇〇円

集団読書

松尾弥太郎編
一、四〇〇円

新しい幼児のための読書教育

代田昇編
一、〇〇〇円

新しい読書教育 低学年

増村王子編
一、〇〇〇円

新しい読書教育 中学年

小林利久編
一、〇〇〇円

新しい読書教育 高学年

石上正夫編
一、〇〇〇円

新しい中学生のための読書教育

黒沢浩編
一、〇〇〇円

京学芸大学付属
大泉中学校蔵書

国 土 社

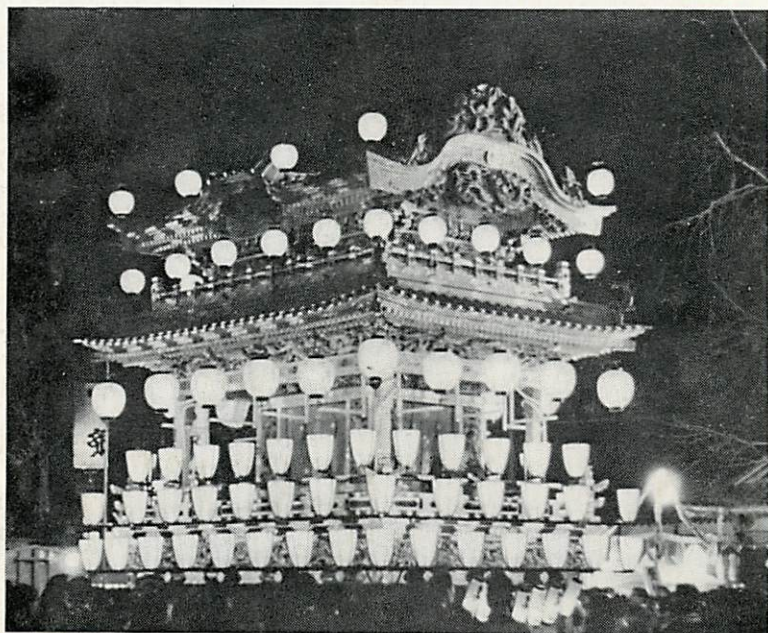


新日本風土記！

日本に生きる

全20卷
完結!!

→写真は秩父の夜祭り 16 関東②より



日本は島国である。沖縄、九州、四国、本州、北海道を始めとする無数の島々を集めても四〇万平方キロにみたない。この叢書は、一億を越す日本人が、この狭い国土で、どのように暮しを立て、どのように生きてきたかを詳説した。

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
総論	北海道	東北②	東北①	関東②	関東①	北陸	中部山岳	東海	近畿③	近畿②	近畿①	山陰	山陽	瀬戸内海	四国	九州③	九州②	九州①	沖縄・奄美
		山形・秋田・青森西部	岩手・青森東部	群馬・茨城・福島・宮城	埼玉・栃木・群馬・茨城	富山・石川・福井・新潟	富山・石川・野・山梨	岐阜・愛知・静岡	和歌山・三重・滋賀	京都・奈良	兵庫・大阪	島根・鳥取・兵庫と京都北部	岡山	山口・広島	徳島・愛媛	高知・香川	福岡・大分	長崎・佐賀・天草	鹿児島・宮崎・熊本

A 5判 上製 定価各1,500円

112

東京都文京区目白台1-17-6
振替口座／東京 6-90631

